

太陽と月

さくらがわ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貴方は太陽。君は月。

地球から300万光年離れた光の国を中心に繰り広げられる、若き戦士の恋物語。

目次

第0話	主な登場人物紹介	1
第1話	出会い	10
第2話	親子	19
第3話	星に願いを	24
第4話	心の闇	30
第5話	罪	38
第6話	真実と決意	44
第7話	温かな想い	58
第8話	ウルトラ銀河伝説	69
第9話	再会	78
第10話	優しすぎるお節介	86
第11話	アナザースペースへ	96
第12話	旅立ち	103
第13話	背中	116
第14話	蒼き星へ	130
第15話	ラブソングはとまらないよ	144
第16話	ULTRA FLY	150

第0話 主な登場人物紹介

主な登場人物紹介

ウルトラウーマンディアナ（ディアナ）

・年齢 5900歳（人間でいうと高校生ぐらい）

・身長 39メートル（マイクロ化可能）

・体重 3万1000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。シルバー族。宇宙警備隊所属。

胸元には六角形のカラータイマーがあり、それを支えるように三日月のような赤いラインが入っている。瞳は銀色。父親は宇宙警備隊に所属していたが、ディアナが産まれる1週間前に殉職。その精神的ショックにより、母親はディアナを出産後体調が悪化。病の床にでき、ディアナが800歳（人間でいうと3歳ぐらい）の時に死去。身寄りもない為、施設に入所し、そこでゼロと出会う。幼い頃から宇宙警備隊に入隊することを夢見ており、ウルトラ兄弟や地球に対しても強い憧れを持っている。座学・実技も成績優秀で、ゼロと共にその将来を期待されていた。宇宙警備隊に入隊後も修行を重ねた結果、史上最年少で「ウルトラ兄弟の候補生」として地球へ派遣される。光の国へ帰還後その功績から、女性戦士として初めてウルトラ兄弟入りを果たすことになる（12番目の妹と呼ばれる）。ゼロに対して幼い頃から「恋心とは違う特別な感情」を抱いており、後にそこへ恋心が加わることになる。また、ゼロの実力・可能性を誰よりも信じ、「いつかはゼロに自分の背中を見てもらいたい」とゼロに追いつき、追い越したいと思っている。優しく思いやりのある女の子らしい性格だが、戦闘時になるとどんな凶悪な敵にも立ち向かう勇気と力を持っている。しかし、ゼロが絡む問題になると自分に自信が無さすぎるところがある。人間体は18歳の「ソラノ・ミツキ」（18歳なのはメビウスに「そのほうがいろいろと都合がいい」と教えられたため）。黒髪のセミロングで、身長は158センチ。体重は47キロ。変身アイテムは

ブレスレット（ウルトラランスとしても使える）。

主な必殺技

- ・ムーンプリズムシユート（ディアナ最強の必殺光線）
- ・ムーンストラッシュ（三日月型の手裏剣のようなもの。連続発射可能。人間体でも発射可能。）

- ・スペシウム光線（ウルトラマン直伝）

- ・宇宙拳法（レオ直伝）

- ・ウルトラランス（ブレスレットを変形させて使用する。）

ウルトラマンゼロ

- ・年齢 5900歳（人間でいうと高校生ぐらい）

- ・身長 49メートル（マイクロ化可能）

- ・体重 3万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。

ウルトラセブンの息子で、ウルトラマンレオ・アストラの弟子。頭には2本のゼロスラッガーがあり、切れ上がった金色の瞳、上半身が青色、下半身が赤色をしている。父親譲りの光線技と師匠仕込みの宇宙拳法を駆使して戦う、*“若き最強戦士”*。現在は宇宙警備隊に籍を置きながら、アナザースペースで新たな警備隊「ウルティメイトフォースゼロ」を結成し、宇宙の平和を守っている。ある事情により産まれてすぐに施設に預けられ、800歳の時にディアナと出会う。やんちゃな性格で施設職員を困らせていたが、その根底には寂しさがあったようだ。幼い頃よりウルトラ兄弟に憧れており、特にウルトラセブンには彼が自分の父親とは知らずに、強い憧れを抱いていた。あらゆる可能性を秘めた戦士として将来を期待されていたが、少しずつ心に闇を抱え始め、力を求めてプラズマスパークに手を出して追放処分となり、K76星で修行の身となる。ベリアル事件によってセブンの実の父親であることを知らされ、怪獣墓場へ急行しベリアルを倒す。そして光の国へ帰還後、セブンと再会を果たす。ディアナには幼い頃から恋心を抱いていたが、それを自覚したのはK76星で修行中の時である。誰よりも彼女の夢を応援し、その実力を仲間としてまたライバルとして認めている。まだまだやんちゃなところがあり、基本

的に先輩にもタメ口。ただ少しずつ礼儀も身に付けてきたようで、ウルトラの父とウルトラの母には敬語。意外と可愛い物好き。人間体は「モロボシ・レン」で父セブンの「モロボシ・ダン」が由来。茶髪の青年で18歳。身長178センチ。体重65キロ。

ウルトラ兄弟

ゾフィー

・年齢 2万5000歳

・身長 45メートル

・体重 4万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊隊長。ウルトラ兄弟 長男。

100万人の宇宙警備隊員を束ねる有能な隊長であり、必殺光線・M87光線は単独で放つ光線としては兄弟最強の威力を持つ（本気で打つと惑星が1つ消滅するらしい）。自身も孤児であったことから、弟たちのことを何よりも大切に思っている（マン・セブン・ヒカリ曰く「超がつくほどの兄バカ」）。働きすぎてほとんど家に帰らないことから「さつさと家に帰れ」と兄弟たちから怒られることもしばしば。バードンに頭を燃やされたことを未だにネタにされているらしい。コーヒーが大のお気に入り。最近の悩みの種は、ヒカリのマッドサイエンティストっぷり。人間体はCREW GUYのサコミズ・シンゴ。

ウルトラマン

・年齢 2万歳

・身長 40メートル

・体重 3万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊副隊長。ウルトラ兄弟 次男。

「怪獣退治の専門家」の異名を持つ。初めて地球に降り立ったウルトラ戦士であり、そのカリスマ性の高さはウルトラ兄弟随一。強さだけではなく、弱きものをいたわる優しさも持っており、兄弟たちか

らの信頼も厚い。暴走した兄弟たちに教育的指導(物理)を施すのは、主にこの人の役目である。趣味は読書。好物は地球のカレー。人間体は科学特捜隊のハヤタ・シン。

ウルトラセブン

・年齢 1万7000歳

・身長 40メートル(ミクロ化可能)

・体重 3万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 三男。

元・恒点観測員で現在は宇宙警備隊に所属している。ウルトラマンゼロの父親で、ウルトラマンレオを鍛え上げた師匠でもある。タロウとは従兄弟の関係。前・宇宙警備隊訓練センター筆頭教官。父と姉がおり、父親は勇士司令部部長。ある事情でゼロを手放さざるを得なくなり、父親であることを告げずにゼロを見守っていた。マン曰く「超がつくほどの親バカ」であるのに対し、弟子のレオには容赦しない。幼い頃からゼロを支えていたディアナに対し、深い恩を感じている。人間体はウルトラ警備隊のモロボシ・ダン。

ウルトラマンジャック

・年齢 1万7000歳

・身長 40メートル

・体重 3万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 四男。

警備隊一のウルトラブレスレットの使い手で、宇宙警備隊の支部長でもある(どこの部署かは不明)。一体化した地球人・郷の影響で甘いものが好物で車の模型をコレクションしている。ウルトラ兄弟の良心であるが、影が薄いと言われ続けているのが残念なところ。妻はウルトラの母の妹。人間体はMATの郷秀樹。

ウルトラマンエース

・年齢 1万5000歳

・身長 40メートル

・体重 4万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 五男。

「光線技のエース」の異名を持つが、あまりにも切断技が多いため一部からは「ギロチン王子」とも呼ばれている。孤児でウルトラの父とウルトラの母の養子。宇宙警備隊アンドロメダ星雲支部長。一体化した北斗の影響により、料理の腕前は一流。自称・宇宙警備隊食堂の料理長でお昼時には厨房によく出現する。短気で好戦的な性格だが、根は優しく面倒見がいい。タロウに対しては一切容赦なし。月星人の南夕子とはいい感じらしい(ただし茶化すとギロチン技の応酬が待っている)。人間体はTACの北斗星司。

ウルトラマンタロウ

・年齢 1万2000歳

・身長 53メートル

・体重 5万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 六男。

ウルトラの父とウルトラの母の唯一の実子。セブンとは従兄弟の関係。宇宙警備隊支部長であり(部署は不明)宇宙警備隊訓練センター筆頭教官。メビウス、ゼロ、ディアナを受け持っていた。パワーはウルトラ兄弟随一。光太郎に勝るとも劣らない爽やか青年であると同時に、自爆技と食い意地と天然は天下一品。ただし饅頭は食べられない。弟や弟子ができて、末っ子気質は抜けない。人間体はZATの東光太郎。

ウルトラマンレオ

・年齢 1万歳

・身長 52メートル

・体重 4万8000トン

獅子座L77星を故郷に持つウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 七男。

獅子座L77星を故郷に持ち、現在は光の国に双子の弟アストラと

共に住んでいる。高い身体能力を持ち、格闘技を得意とする。L77星はマグマ星人によって滅ぼされており、レオはその元王子である。地球にいた頃、セブンから無謀かつ過酷な特訓を受け、軽いトラウマだとか何とか…。今でもごくたまにセブンを「隊長」と呼んでしまう。セブンの息子・ゼロを導き宇宙拳法を叩き込んだ厳しくも優しい師匠である。真面目すぎて鈍感なのがたまにきず。人間体はMACのおどとりゲン。

アストラ

・年齢 1万歳

・身長 50メートル

・体重 4万9000トン

獅子座L77星を故郷に持つウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 八男。

獅子座L77星を故郷に持ち、現在は光の国に双子の兄レオと一緒に住んでいる。レオにも劣らない高い身体能力を持っている。L77星の元王子で、故郷が滅ばされたときマグマ星人に捕らえられ捕虜となった。足についているマグマチェーンはその時の物で、キングでも外すことができなかった。兄レオを陰日向から支える弟の鑑。ゼロのもう一人の師匠であり、レオと比較するとかかなり優しい性格だが、本気で怒るとレオでも手がつけられない、どうしようもできないらしい。

ウルトラマン80

・年齢 8000歳

・身長 50メートル

・体重 4万4000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 九男。

ウルトラ兄弟の候補生として地球に派遣され、帰還後ウルトラ兄弟入りを果たす。地球で教師を務めた経験を活かして宇宙警備隊訓練センター（主に座学を担当）・ウルトラ小学校（各々の訓練センターに入る前に行く学校）の教師を務めており、優しく落ち着きのある性格

で“80先生”と慕われている。特にゼロやディアナを気にかけており、ディアナを想うゼロの気持ちにいち早く気づいていた人物でもある。光の国の王女・ユリアンは幼馴染というリア充っぷり。人間体はUGMの矢的猛。

ウルトラマンメビウス

- ・年齢 6800歳
- ・身長 49メートル（マイクロ化可能）
- ・体重 3万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 十男。

ウルトラ兄弟の候補生として地球に派遣された若き戦士で、帰還後ウルトラ兄弟入りを果たす。また宇宙警備隊訓練センターで教官もしており、ゼロやディアナを教えたこともある。ウルトラ兄弟の中で一番純粹かつ温厚で優しい性格だが、仲間を傷つけたものに対しては容赦しない。また師匠のタロウから受け継いだ自爆技と天然は健在。ディアナがウルトラ兄弟入りした時には「妹ができた」と大喜びし、妹のことになるとゾフィーにも劣らぬ兄バカっぷりを発揮する。料理や裁縫がうまく、女子力が高いと言われることも。好物は地球のカレー。人間体はCREW GUY Sのヒビノ・ミライ。

ウルトラマンヒカリ

- ・年齢 2万2000歳
- ・身長 50メートル（マイクロ化可能）
- ・体重 3万5000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊所属。ウルトラ兄弟 十一男。

元々は宇宙科学技術局の科学者だったが、現在は宇宙警備隊に籍を置きながら研究を続けている。命の固形化に成功した優秀な科学者だが、時にとんでもない実験をしたり、周りの人物を研究の実験台にするというマッドサイエンティストっぷりを発揮する（ウルトラ兄弟が犠牲になることも）。順番でいうと十一番目だがゾフィーとは“腐れ縁の悪友”でメビウスとは親友である。人間体は元CREW G

UYSのセリザワ・カズヤ。

その他

ウルトラの父（ウルトラマンケン）

・年齢 16万歳

・身長 45メートル

・体重 5万トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。宇宙警備隊大隊長兼最高司令官。

タロウの父で、ウルトラの母とは夫婦関係。「宇宙警備隊」発足のきっかけともなった「ウルトラ大戦争」を戦い抜いた歴戦の勇士であり、その人柄から誰からも尊敬され「ウルトラの父」と呼ばれている。ウルトラ兄弟のことを実の子どものように気にかけて、見守っている。ディアナを地球に派遣するという最終決定を下した人物でもある。

ウルトラの母（ウルトラウーマンマリ）

・年齢 14万歳

・身長 40メートル

・体重 3万2000トン

M78星雲・光の国出身のウルトラ戦士。銀十字軍隊長。

タロウの母で、ウルトラの父とは夫婦関係。宇宙規模で医療活動を行う「銀十字軍」の隊長であり、普段はウルトラクリニック78で勤務している。どんな凶悪な宇宙人をも改心させてしまう大きな愛情を持ち、「ウルトラの母」と呼ばれ慕われている。ウルトラの父と同様にウルトラ兄弟を実の子どもたちのように見守っている。

ウルトラマンキング

・年齢 30万歳

・身長 58メートル

・体重 5万6000トン

ウルトラ族伝説の超人で、キング星にたった一人で住んでいる。

光の国のプラズマスパーク建設に尽力したウルトラ長老の一人で、

ウルトラ戦士達から見ても神のような存在である。その能力差を例えるなら、本人曰く並みのウルトラマンがキングに挑むのは人間がウルトラマンと戦うほど無謀とされる。ウルトラ戦士たちが自分の力に頼らないように、よほどのことがない限り表に出てこない。ゼロがK76星で修行していた時は、その様子を静かに見守っていた。

ユリアン

・年齢 7800歳

・身長 47メートル

・体重 3万6000トン

M78星雲・光の国の王女で、現在は銀十字軍に所属。

かつて地球で80と共に地球を守る任務についていたが、現在はウルトラの母のもと銀十字軍の隊員として活躍している。また王女として公務もこなしている。王女とは思えぬお転婆な性格で80も頭を悩ませていたが、最近は少し落ち着いてきた模様（ただし直ったわけではない）。80とは幼馴染以上恋人未満な関係。人間体はUGMの星涼子。

第1話 出会い

あなたは太陽。

力強く時に激しく、手が届きそうで届かないけれど
辛いとき、その温かさを思い出すだけで私は強くなれる。

君は月。

闇夜を照らす月のように、優しく、時に力強く照らしてくれる。

絶望の中でも一筋の光となり、諦めないことの大切さを教えてくれた。

地球から遠く離れた、M78星雲・光の国。

かつて地球で侵略者たちと戦った、ウルトラ戦士たちの故郷である。

その中心街から少し離れたところにある、児童養護施設。

ここでは孤児となった子どもや、様々な事情があつて親と暮らすことができない子どもたちが共同生活をしている。

その施設に響き渡る、幼子の泣き声。

向かい合つて立つ、2人のウルトラ族の子ども。

片方は、泣きじやくるシルバー族の子ども。

そしてもう片方の子どもは、小さな両手をぎゅつと握りしめ、俯いている。

「ゼロくん、どうしてお友達に意地悪をするの？」

仲裁に入った施設職員が俯いている子どもに話しかける。

ゼロと呼ばれたその幼子は、光の国に住むウルトラ族にしては珍しい特徴を持っていた。

上半身は鮮やかな青、下半身は燃えるような赤。

幼さで丸みを帯びてはいるが、切れ上がった淡い金色の瞳。

そして子どもには不釣り合いなほど鋭利な武器、スラツガーが頭に2本。

「……………」

ゼロは、何も答えない。

シルバー族の子どもは、さらに激しく泣きじゃくる。

「ゼロが、ゼロが ぶったあ……！」

唇をキュツと結ぶゼロ。

「ゼロくん、黙ってちゃ先生分らないわ」

「……」

わあわあと泣きじゃくるシルバー族の子どもをなだめながら職員は尋ねる。

「……………おれ わるくねーもん……」

「でもねゼロくん、お友達を叩くことは——」

職員がそう言いかけたとき、勢いよくゼロは部屋を飛び出していった。

どこへ行くわけでもなく、ゼロは廊下を走り続けた。

途中誰かに呼び止められたような気もしたが、無視して走った。

とにかくあの場所から離れたかった。

もう、うんざりだ。

誰も自分の話を聞いてくれない。

『お友達に意地悪しちゃいけません』

『どうして仲良くできないの？』

そんな言葉ばかりだ。

自分だって好き好んでこんなことになってるわけではない。

……………ただ……。

ゼロは目の前の部屋の扉を開け、中に入る。

そこは広々とした遊戯室。

絵本やおもちやが置いてあり、ゼロも何度もここで遊んだことがある勝手知ったる部屋だ。

怒られて気持ちが悪くしゃやくした時も、よく一人でここへ来る——が、今日は先客がいた。

部屋に入ったときに騒々しかったのか、

少しおびえたような表情でこちらを見ているウルトラ族の子ども。

年は自分と同じぐらいの女の子。

透き通るような銀色の瞳、シルバーの体の胸元にある三日月のような赤いライン。

—先に口を開いたのは女の子だった。

「こ、こんにちは…」

消え入りそうな声で挨拶し、ぺこりと頭を下げる女の子。

「こんにちは…」

ゼロも挨拶を返しながら、ゆっくりと女の子に近づく。

「はじめまして……だよな?」

女の子を見つめて小さく首をかしげながら問うゼロ。

「うん。わたしきょうから ここにすむことになったの……」

「そうなのか?」

「……おとうさんも、おかあさんも…しんじやったから………」

「……」

聞いてはいけないことを聞いてしまったと、ゼロは思った。

少し俯く女の子の目には、うつすらと涙が溜まっている。

先ほどまでのむしゃくしゃした気持ちはどこへやら。ゼロはおろおろし始めた。

そんなゼロを見て、女の子ははつとし、涙の浮かんだ目をごしごしと少し乱暴にこする。

ゼロは子どもなりに必死に知恵を絞り、意を決して話し始める。

「…おれも とーちゃんやかーちゃん、いねーんだぜ。ずーっと、あつたことねーんだ」

「……え?」

突然の告白に女の子は思わず顔を上げる。

「ずーっと……?」

「おうー!」

「……」

「ここなら みんないっしょだ。だから、おまえひとりだけが つらいんじゃないんだぜ!」

果たしてこれで泣き止んでくれるだろうか。

ゼロは不安になりながら、女の子の様子を窺う。

「……ありがとう」

涙の跡がまだ残る顔で、女の子はふわりとした笑みを見せた。走ったせいかな、まだ胸がどきどきしていた。

女の子が落ち着いた後、ゼロは尋ねる。

「そーいえば、なまえ なんていうんだ？」

「わたし、ディアナっていうの」

「そっか！おれはゼロ！よろしくな、ディアナ！」

ニツと笑って小さな手を差し出すゼロ。

「……うん！よろしくね、ゼロくん！」

ディアナはそう答えると、小さな青い手に小さな銀色の手を重ねた。

ディアナは先ほど施設長に連れられて施設へ来たばかりで、

また施設長が迎えに来るまでここで待つように言われたのだという。

「ディアナ、それなんのえほんだ？」

ゼロはディアナの隣にちょこんと座り、ディアナが読んでいた絵本を指さす。

「これはね、ここにあったえほんで、ウルトラマンのえほんだよ」

「ウルトラマンの？」

「うん！ウルトラマンが “ちきゅう” でたたかっていたときのおはなしだよ」

言わずと知れた、宇宙警備隊の中でも歴戦の勇士である、“ウルトラ兄弟” ー。

光の国においても彼らは憧れの的であり、特に子どもたちからの人気は絶大であった。

そのウルトラ兄弟の地球での戦いを物語にした絵本は、光の国でベストセラーとなっているのである。

この施設にもその絵本は全巻そろえてあり、子どもたちにも大人気だ。

ディアナが読んでいたのは「ウルトラマンとバルタンせいじん」という絵本で、

ウルトラマンとバルタン星人の最初の戦いが元になっている。

「ゼロくん、よんだことないの?」

「うん… おれ じよむのにながてなんだ……」

「じゃあ、よんであげようか?」

「え…いいの?」

「うん! いっしょによんだほうがたのしいよ」

「…おうっ!」

幼子2人はキラキラした表情でしばらく絵本を楽しんでいた。

どれぐらい時間が経ったのか。

施設長がディアナを迎えに遊戯室にやって来た。

「ディアナちゃん、お部屋の準備ができたわよ! … あら? ゼロくん?」

名を呼ばれて2人は声のした方を振り返る。

「うげっ……」

施設長の顔を見てゼロの表情も変わる。

「どうしたの ゼロくん?」

「……」

先ほどまで楽しく話をしていたのに、表情が一変したゼロを心配そうに覗き込むディアナ。

「先生が探していたわよ? さ、戻りましょう」

「……」

「ゼロくん?」

「……おれ みんなにあいたくね! …」

「どうして?」

施設長が尋ねてもゼロは答えようとしない。

「せんせい?」

「なあに、ディアナちゃん?」

「もうちよつとゼロくんとふたりでおはなししたいんだけど いい

「？」

「ええ、いいけど…」

「じゃあせんせい、おそとでまっつてー！」

「え？ああ、はいはい…」

ディアナによつて半ば強引に部屋を出された施設長と同じぐらいゼロも不思議そうな顔をしている。

扉を閉め、ディアナはゼロに尋ねる。

「なにか いやなことがあったの？」

ゼロは驚いて目を見開く。

「…なんでわかつたんだ？」

「うーんと……… なんとなく」

「……」

ゼロは迷う。はたして話してもいいものか。

出会ったばかりでお互いのことをほとんど知らないのだ。

話から自分のことを知って、先生や他の子どもと同じように言うようになるのではないか。

—いいや、そんなことには慣れている。

ゼロはぼつりと口にする。

「なあ、おれのからだって、へんか？」

「え？」

「へんっていわれたんだ。『あかとあおがいつしよなんて、へんだ』って……」

確かにM78星雲に住むウルトラ族は、シルバー族、レッド族、ブルー族に分かれており、ゼロのように赤と青が両方入っているウルトラ族は珍しい。

「それに、『かおがこわい』もいわれた」

ゼロの瞳はその幼さに似つかわしくないほど鋭く切れ上がったおり、近寄りがたさを醸し出してしまっている。

「それでおれ、むかむかして… どんって……」

自分の容姿をバカにされたと感じ、ゼロは思わずシルバー族の子どもを押してしまい、それを「ぶった」と言われたのである。

そこまで言うのとゼロはディアナから目をそらす。
なんて言うだろう。

先生と同じように「叩いちゃダメ」と怒るのだろうか。
それとも、「へんだ」と言うのだろうか……

「きれいだよ、ゼロくんのからだ」

「え？」

思わぬ返事にゼロはディアナの顔を見る。

「ぜんぜん へんじやないよ？」

「…ほんとか？」

「うん！とつてもきれい」

初めてだった。

ほとんどの子どもは初めて会ったとき自分を物珍しげな目で見て、
警戒されたり変だと言われることも決して少なくない。

それをこの子は――。

「…どんってしたこと、おこらねーのか？」

「おこらないよ？」

ディアナのさらなる返事にゼロは目を見開く。

『へんだ』っていわれて、いやなおもいしちやっただよね？」

「…うん」

ゼロの返事を聞き、ディアナはそつとゼロの頭を撫でる。

「…！」

小さくも暖かな手の感触にゼロの心臓は跳ね上がる。

「あ、ごめん。いやだった？」

ぴくりとゼロの体が跳ねたため、ディアナが申し訳なさそうに尋ねる。

「いやじゃねえ。あんまりあたまなでられたことねーから…」

「そつか…」

ゼロの頭を撫でながら、ディアナは話を続ける。

「せんせいさがしてるっていつてたけど、せんせいとおはなしした
の？」

「した。でもせんせい、おれのはなし きいてくれねーもん」

「どうして そうおもうの?」

「みんな、おれがわるいこだとおもってる」

ゼロの思わぬ返事にディアナは動揺を隠せない。

「みんなみんな、なにかあったらおれのことおこるんだ…」

「……」

「…おれ、わるいこなんだ」

ゼロの声がどんどん小さくなり、表情も暗いものに変わっていく―

「そんなことない!」

突然の大きな声にゼロはびくつと体を震わせる。

「ゼロくんはとってもやさしいよ!だって、なっていたわたしにおはなししてくれたし、わらったおかお とってもすてきだもん!」

「…!」

「だから、わるいこなんかじゃないよ!おはなししたら せんせいもわかってくれるよ!」

「ディアナ…」

必死にそう話すディアナに、嘘は感じられなかった。

ゼロの目にじわりと涙が浮かぶ。

「ゼロくん?」

「ありがとう… ありがとう……」

やっと話を聞いてもらえた。

自分の気持ちに気づいてくれた。

それが嬉しくて嬉しくて。

ぼろぼろと涙を流すゼロ。

そんなゼロの頭を撫で続けるディアナ。

「ねえゼロくん、せんせいのところにいこうか?」

「でも…」

「きつとせんせいしんぱいしてるし… わたしもいつしよにせんせいとおはなしする。そうしてゼロくんのきもち ちゃんとおはなししよう。だから だいじょうぶだよ」

「…ありがとう」

ディアナは立ち上がるとゼロに手を差し出す。

「いこつ？」

「…おう！」

ゼロは涙をぬぐうとディアナの手を取る。

きつとこの子は、大切な友達になる。

こんなにも暖かな気持ちは初めてだった。

第2話 親子

宇宙の平和を守る、宇宙警備隊の本部。

その一室で、忙しそうに事務作業をこなす人物。

報告書を書いたり、書類の必要箇所にサインをしたりと、

その紅い手はせわしなく動いている。

「セブン、入るぞ」

この執務室の主の名を呼びながら入ってきたのは

宇宙警備隊長でありウルトラ兄弟の長男であるゾフィー。

そしてその後ろから同じくウルトラ兄弟・次男であるウルトラマンが入って来る。

「なんだゾフィー、マンも一緒に…」

「なんだじゃないだろう。今日何の日か忘れたのか？」

「…何だっけな」

「ごまかしても無駄だぞ。お前、なんやかんや理由をつけて行ってなかっただろう？」

マンの少し厳しい声にセブンは顔を逸らす。

「俺はあの子に合わせる顔がない…。会いに行く資格なんてないんだ」

「セブン、何度も言うがお前だけの責任じゃない。引き離すのを止めることができなかった、私たち兄弟にも責任がある」

そう話すゾフィーの表情は、長兄として弟とその息子を守ることができなかつた後悔に満ちている。

「セブン、今は親子と名乗れなくてもお前には父親としてあの子を見守らねばならない義務がある」

「……」

「気にならないのか？あの子がどうしているか…」

「…気にならないわけがないだろう。あの子は… ゼロは俺の息子だ」

一日たりとも、一瞬たりとも忘れたことはない。

大切な一人息子・ゼロ。

自分が父親としてふがいないばかりに、産まれてすぐ手放さなければならなくなった。

施設に預けた直後は何度も様子を見に行つたが、最近は何かと理由をつけて避けてきた。

罪悪感に耐えられなかった。

ゼロと顔を合わせるたびに、「どうして独りにしたの?」と聞かれているようで。

「セブン、必ず一緒に暮らせる日が来る。それまではあの子が立派な男となるよう、私たちと一緒に見守っていこう」

「あの子は私たちにとつても、大切な家族なのだからな」

「ゾフィー… マン…。 ……ありがとう」

セブンは震える声で兄たちに感謝の言葉を口にした。

ウルトラ兄弟は週に1度かわるがわる児童養護施設を訪問している。

子どもたちや施設の様子を確かめる目的だが、

セブンを息子・ゼロに会わせてやりたい。

大切な家族―ゼロがどうしているか確かめたい。

兄弟たち全員にその思いがあつた。

ゾフィーたちが子どもたちの集まる遊戯室に入ると、子どもたちから大歓声が上がつた。

子どもたちに挨拶をしながら、セブンは視界の端で一人の子どもを捉える。

赤と青の体に自分譲りのスラッガーを2本持つ、幼子―

(ゼロ…)

ゼロは遊んでいた手を止めて、こちらをじつと見ている。

こちらから話しかけに行こうか、それともゼロが話しかけてくるのを待つてようか…

そんなことを考えながらしばらく子どもたち一人ひとりに応えていると―

「こんにちはー!」

足元から元気な声がかかる。

視線を足元へ向けると、一人の女の子がゼロの手を引いて立っている。

セブンは視線を合わせるように跪く。

「こんにちは。えつと君は…」

「わたし、ディアナっていいいます。このあいだここへきたばかりなんです」

「そうか…。よろしく、ディアナ」

複雑な思いを抱えながら挨拶を交わすセブン。

同じく、複雑な表情のゾフィーとマン。

「あの…ゼロくんがセブンさんにあいたっていったので…」
「え…?」

「お、おれはべつに…!」

そう反論するゼロの頬は赤く染まっている。

「このあいだ えほんよんで『かっこいい!セブンみたいになりたい!』っていったじゃない!」

「…!」

セブン、そしてゾフィー、マンの表情が驚きの色に染まる。

ゼロはというと、真っ赤になって少し俯き気味だ。

「それは本当なのかい、ディアナ?」

固まって動けないセブンに代わり、マンが尋ねる。

「はい!わたしがゼロくんと えほんをよむとき いつも『セブンのやつがいい』っていうんです」

「…」

「ほら、ゼロくん」

「…こんにちは」

ディアナにそつと背中を押され、ゼロはセブンの前に進み出る。

「こんにちは、ゼロ…くん」

少しぎこちない笑顔で息子・ゼロに挨拶をするセブン。

「私の物語を読んでくれたのかい?」

「うん」

「ありがとう… 嬉しいよ」

その言葉にゼロが顔を上げる。

頬は紅潮し、自分にも似たその瞳はキラキラとじていて。

ああ、こんなにもそばにいるのに抱きしめてやることができない。

父親だと、名乗ることもできない――。

セブンが涙をこらえながら大きな紅い手を差し出すと、その手に青い小さな手が重なる。

その様子を二人の兄は静かに優しく見つめていた。

「ゼロの様子、また見に行っただったって？」

「ああ、また少し話をするのができたよ」

それからしばらく経った宇宙警備隊長室。

ちょうど報告書を提出にきたタロウにそう聞かれ、答えるセブンの表情はこの前と比べると幾分穏やかなものだった。

「最近は何のいい友達ができたみたいでな、確か名前は…」

「ディアナ、だろう？」

「そう、その子だ。父親として嬉しい限りだよ…」

「それだけじゃないぞ、セブン。お前はあの子にもっと感謝しなければならぬだろうな」

「どういうことだ？」

ゾフィーの言葉にセブンが問うと、マンが答える。

「ゼロはな、あの特徴から他の子どもたちから変わった目で見られることが多かったらしい。『変だ』とな」

「本当に？」

信じられないといった表情に変わるタロウ。

セブンの表情も固いものになる。

「ああ。この宇宙を見てきた我々からすれば珍しくも変でもないことだが…。まだ広い世界を知らない子どもたちにとつたら、そう感じる子もいるんだろうな。だがあの子―ディアナはこう言ったそうだな『綺麗』だとな」

「それにゼロはそのやんちゃぶりから、どうしても子ども同士のトラ

ブルが起きたとき注意される側だと見られていたらしい。それをあの子がゼロの気持ちを代弁することで職員にゼロの思っていること、感じたことを伝えてくれてるらしいんだ。…あの子はお前に似てなかなか素直に言えないところがあるようだからな。この間ジャックたちと訪問した時に職員がそう話していたよ。『いつの間にかきちんと向き合うことができていると、反省している』と…」

「マンとゾフィーの話聞き、セブンは深い溜息を吐く。

「俺は本当に駄目な父親だな…」

「セブン兄さん…」

「セブン、過ぎたことを悔やんでも仕方がないだろう。それより今はゼロを大切に思ってくれる友達ができたことに喜ぶべきじゃないのか？」

「そうだな… あの子に感謝しなければ…」

セブンは優しい幼子の姿を思い浮かべる。

「いつかゼロとあの子と三人で話ができれば――」。

そんな未来を思い浮かべながらセブンはマントを翻し、執務室へと戻っていった。

第3話 星に願いを

少しざわつく教室。

そこに一人の人物が入って来る。

「はい、皆授業を始めますよ。席について…」

その人物―ウルトラ兄弟九男でウルトラ小学校の教師でもあるウルトラマン80は、

生徒たちが皆席に着いたのを確認して話し始める。

「今日は地球文化体験だ。皆、来週は何の日だかわかるかい？」

「七夕です！」

「そう、正解。七夕というのは地球にある日本という国に古くから伝わる伝統行事で―」

80は日本に伝わる七夕伝説を生徒たちに説明していく。

皆真剣に、あるいは目を輝かせて80の話に聞き入っている。

「じゃあ、今日はこの短冊に実際に願い事を書いてみよう」

80の提案に生徒たちは口々に賛成する。

一人ひとりに短冊を配り終わると、生徒たちは悩みながらも願い事を書いていった。

「何書くんた、ディアナ？」

「さあ、なんだと思う？」

ペンをくるくる回しながらゼロは隣の席の幼馴染に尋ねる。

対してディアナは、いたずらっぽい表情で答える。

「…分かんね」

「考える気ないでしょ…」

少し呆れたような表情で溜息をつくとき、ディアナはさらさらと願い事を書いていく。

そんな彼女を横目で見て、ゼロもペンを持ち直し、たどたどしくも願い事を書いていく。

「さあ、書けた子から笹に吊るしていこうか」

すでに飾りつけを済ませている笹に生徒たちは願い事を吊るしていく。

『背が伸びますように』

『ウルトラの母のようになりたい』

様々な願い事が吊るされていく中、ゼロとディアナも短冊を持ち、笹の前にやって来る。

(何書いたんだ、アイツ…)

気になったゼロはそつとディアナの短冊を覗き見る。

『宇宙警備隊になって、地球へ行けますように』

ゼロは自分の短冊を見る。

『強くなりたい』

「……」

ゼロは席に戻ると、その文章を消し始める。

「ゼロ？何してるの？」

短冊を吊るし終えたディアナがゼロのところへやって来る。

「書き直す」

そういうとゼロは新しい願い事を書いていく。

「…それ、さっきのよりずっといいね」

「つてか、見たたのかよ」

「席を立つ前にちらつとね。ゼロも見てたでしょ」

「…バレてた」

「ふーん… やっぱりあの人が憧れなんだ？」

「別にそんなんじゃない」

「素直じゃないところも変わらないなー ゼロくん？」

「その呼び方、やめろつて言つたら？」

「はいはい」

出会ってどれぐらい経つだろう。

あれからいろんなことがあった。時には喧嘩もした。

変わったことと言えば、身長と呼び方ぐらいだろうか。

「くん」付けは恥ずかしいから、呼び捨てでいいー。

そう言われて「くん」を付けずに呼ぼうとしたけど、なんだかこちらが恥ずかしくてたまらなかつた。

呼ぼうと思つてもどうしても「くん」が取れない。その度にゼロ

は「ッくん」付けはやめろ！」と言ってきたのだが…。

そしてとうとう、いつまで経っても「ゼロくん」と呼び続けるディアナにしびれを切らしたゼロと、「恥ずかしいから、簡単には呼べない」と主張するディアナの喧嘩に発展した。

—結果的にはその喧嘩が原因で「ゼロ」と呼べるようになったのだが。

怒りと恥ずかしさが頂点に達し、感情に任せて「ゼロのバカ！」と言ったディアナに、突然真顔になったゼロが「…今言えたじゃねーか」と言いディアナがそれに気付いたことで万事解決したのは、割と最近の話だ。

身長はいつの間にか追い抜かされていて、それに気づいた時のゼロの表情といたら…。

(得意げだったな…)

授業が終わりふと昔のことを思い出しながら、帰ろうとゼロと一緒に校舎を出た時だった。

「お前だよな、ディアナって?」

突然声をかけられ、ディアナは振り返る。つられてゼロも振り返る。

声をかけてきたのは上級生たちだった。

「はい… なんですか?」

「お前の願い事見たぞー。宇宙警備隊になりたいんだってな?」

「そうですね…」

「女が宇宙警備隊なんて、無理じゃね?」

「それに地球って… 地球に派遣されるのは超エリートばかりだろ?」

「しかもほとんどがその後ウルトラ兄弟に入ってるしな…。女はあそこに入れないんじゃない?」

「お前なんて無理無理!」

ディアナの願い事を叶わないと決めつけ、からかう上級生たち。

ディアナが言い返そうとした次の瞬間—

シン—!

銀の刃が勢いよく上級生たちの間をかすめる。

「ひっ!？」

刃はブーメランのように弧を描くと持ち主―ゼロのもとに帰っていく。

「…それ以上言うんじやねえ」

低く唸るような声で言うと、じりじりと距離を詰めていくゼロ。

「な、なんだよやんのか?」

「俺たちに勝とうなんて5000年は早いぜ?」

威勢はいいが、ゼロから放たれる殺気に上級生たちは少しずつ距離をとる。

「ゼロー!」

ゼロの様子に直後起こりそうな事態を予測したディアナが止めようとしたときだった。

「そこまでだよ、皆」

聞きなれた、静かな声が降りてくる。

「80先生…!」

上級生とゼロの動きもぴたりと止まる。

「君たち、人の願い事をからかうのはよくないね。願い事というのはその人の夢や誰かに対する想いが詰まった素晴らしいものだ」

80の厳しい表情と声に上級生たちは口をつぐみ、俯く。

「それにゼロ、いくらなんでもスラッガーを飛ばすのは駄目だ」

こちららも80に厳しい表情で言われるが、納得がいかないといった様子で目を逸らす。

80の言葉を聞き上級生たちはディアナに謝罪の言葉を口にする
と、80にも頭を下げその場をそそくさと後にした。

「……」

ゼロは黙ったままだ。

「…ゼロ、少し話をしようか?」

ゼロが80を見上げる。

「そんな顔をしないで…。お説教じゃないよ。ディアナ、少し待って
てくれるかい?」

「分かりました…」

80はゼロを手招きすると、校舎の中へ戻っていった。空き教室に入ると80はゼロに座るように促し、自分もゼロと向かい合う形で座る。

「悔しかったんだろう、ゼロ?」

80がそう聞くと、ゼロは素直にこくりと頷く。

思わず苦笑いの80にゼロは小さな、けれどはつきりした声でこう言った。

「無理なんかじゃねえ… アイツは絶対強くなる。女だから何だってんだよ……」

ぎゅつと拳を握りしめ話すゼロに80は穏やかな表情で語る。

「ゼロは… ディアナのことが本当に好きなんだね」

「べっ!別にそんなんじやねえよ!そりゃ幼馴染としては好きだけど、そんなんじや…!」

(……………あれ?)

この慌てよう、そしてその表情は、もしや。

いや、自分も決してそういう意味で聞いたのではない。

だが、この反応は間違いなくそういう反応だ。

……………これは兄に報告すべきか。

…いや、やめておこう。あの兄のことだ、きっと大騒ぎになって学校に押しかけて来るに違いない。

賢明な判断を下した80は何事もなかったかのように話を続けた。

「優しいな、ゼロは」

「……」

「ゼロ、そのことディアナに言ってみたらどうだい?」

「え……」

『「応援してる」って、伝えてみたら?」

「でも……」

「言葉にしないと伝わらないこともあるんだよ。例え君たちがどんなに長い付き合いだとしてもね」

「…アイツ、俺からなんかの応援、喜んでくれるのか?80先生からの

方が喜んでくれるんじゃないのか？」

「いや、ゼロ。君だからこそ意味があるんだよ。きっと喜んでくれるよ」

口元に少し笑みを浮かべてこくりと頷くゼロ。

「そういえばゼロの願い事も見たよ…。素敵なお願い事だね」

「…叶うと思うか？」

「もちろん。君にはそれだけの強さがあると、私は信じているよ」
「…おう」

照れを隠すように少しぶっきらぼうな返事をするゼロ。

その表情は、やはりあの不器用な兄にどこか似ている。

そんなゼロをほほえましく見つめる80。

―校庭に飾られた巨大な笹。

その一本の枝に付けられた、少年が星に込めた願い事。

『ウルトラセブンのように強くなりたい』

第4話 心の闇

宇宙警備隊訓練センター。

未来の若き戦士たちを育てるための施設で、ウルトラ兄弟も教官として訓練生たちを指導することも多い。

その訓練センターのすぐ近くにある、訓練生専用の寮。

もう講義の時間が迫っているというのに、部屋のドアをノックする訓練生が一人―。

「…ゼロ？」

―胸元に輝くのは六角形のカラータイマー。

それを支えるように入っている赤い三日月のようなラインは、銀色のしなやかな体によく映えている。

宇宙警備隊訓練センターに通うディアナは、しばらく講義に現れていないゼロを呼びにやって来たのだ。

「ゼロ、講義の時間だけど…。具合でも悪いの？」

いくら呼んでも返事はない。

確かに部屋にいる気配はあるのだが……。

はあ、と小さな溜息ひとつ。

「…ゼロ、皆待ってるから来てね？」

ディアナは訓練センターに戻っていった。

(……毎日、毎日飽きねーな、アイツも)

寝そべっていた床から上半身を起こし、ゼロは訪問者のいなくなったドアに目をやる。

恐らく教官であるタロウかメビウスに頼まれて来たのだろう。

―優等生のアイツらしい。

ゼロは再び寝転がると、眠りにつこうと眼を閉じる。

訓練センターの講義をサボるようになってから、

ゼロはこうして一日の大半をこの狭い一室で過ごすようになった。

ウルトラ小学校を卒業し、憧れのウルトラセブンを目指し強くなるため、宇宙警備隊訓練センターに入学した。

幼い頃からずっと一緒にいたディアナも共に訓練センターに入学し、

座学や実技などを共に受けて、切磋琢磨しながら訓練生活を送って来た。

—だがその訓練生活は、ゼロにある残酷な現実を突きつけた。

訓練生は全員寮生活をするようになるのだが、長期休暇の時は実家へ帰ることを許される。

しかしゼロやディアナのように帰る家がない訓練生は、長期休暇も寮で生活することになる。

さらに付け加えると、訓練センターに入学すると施設を出なければならぬ為、施設に帰ることもできないのだ。

ずっと施設で生活していたため、帰る家がある訓練生たちが羨ましかった。

家族の話を嬉しそうにする訓練生を妬んだことも多かった。

けれどもディアナが「私も同じだよ」と言っただけでそばにいてくれたことが、何よりの救いだった。

—そのディアナがゼロの心の闇を増幅させる原因になるうとは。

訓練センターに入学してしばらくした頃、ゼロはあることに気づき始めた。

—なぜ、自分は両親の墓参りに連れて行ってもらえないのか。

同じ施設で過ごしたディアナは訓練がない日や長期休暇に、両親の墓参りに行っている。

昔は施設の職員と行っていたが、最近は一人で行っているらしい。

だがゼロは、今まで一度も両親の墓参りに連れて行ってもらえなかったがなかった。

思えば施設にいた頃にも、なかった。

不審に思ったゼロは施設の職員に尋ねてみたが、「知らない」の一言だった。

ゼロがたどりで着いた答えは一つ。

—俺は、捨てられたんだ。

ふつつつと湧き上がってくる、両親への怒り、恨み。

そして何よりも、寂しさ。

生きているのか、もういないのか。

生きているのなら、なぜ俺を捨てたんだ。

なぜ、迎えに来てくれないのか。

なぜ、なぜ――。

「捨てられた」という答えにたどり着いたとき、周りの景色が一変した。

いい成績を収め褒められる訓練生も、

まるで父親面して話しかけてくる教官連中も、

目に映る奴ら、全てがうっとおしい。

憂さ晴らしのために他の訓練生に喧嘩を吹っ掛け、教官に説教される毎日。

挙句の果てに、80やメビウス、そして筆頭教官であるタロウにまで反抗的な態度をとるようになった。

ディアナも例外ではなかった。

座学・実技共に成績優秀なディアナの周りには、自然と人が集まった。

ウルトラ兄弟をはじめとする訓練センターの教官からも、将来を期待される声が上がっていた。

自分とは違う、恵まれた優等生。

始まりは同じはずだったのに、いつからこんなにも差ができたのだろうか。

アイツは日の当たるところにいて、俺は光が差すこともない暗闇にいる。

なぜ、アイツはあんなにも笑っていられるのだろう。

なぜ、あんなにもまっすぐ前を見ていられるのか。

――ああ、そうだ。アイツは親に裏切られたことなんてないもんな。いつしか顔を合わせることもなくなった。

話しかけられても返事どころか、反応することもなく避け続け、

「うっとおしい」と怒鳴ったことも少くない。

その時のディアナの顔は、正直見ものだった。

清々した。

「お前には分かんねえよな、捨てられた奴の気持ちなんか。その場を離れるときは、必ずその捨て台詞を吐いた。」

「目を開ける。」

暗く冷たい、無機質な部屋。

外が少し騒がしい。

恐らく今日の訓練が終わったのだろう。

訓練生の話し声や笑い声、扉の開く音、閉まる音…

今のゼロには、全て耳障りだ。

「そういえば明日って、コロセウムで実践演習だよな？」

「久しぶりだよな。誰と当たるんだろうな…」

「：ゼロだけは勘弁だな、八つ当たりされそう」

「それぞれ。絶対怪我するよな」

「まあでも、講義もちゃんと出てないのに実践演習がきちんとできるのか、まずそこだけだな…」

「うっせえ。」

そう小さく呟くと、ゼロは体を起こす。

「相手してやるよ、ちようどいろいろと溜まってたところだしな。」

「ゴキリ。」

不気味な音が一つ、部屋に響いた。

「翌日。」

ウルトラコロセウムに響く、若く勇ましい掛け声。

時にすさまじい衝突音や光線の音、「おおっ」という歓声も上がる。

「そこまでっ！」

筆頭教官タロウの声で二人の訓練生は演習を終え、互いの健闘を称え合い握手を交わす。

「さて次は……」

タロウが手元のプレートに目を落とす。

「ディアナ」

名を呼ばれたディアナはタロウの前に進み出る。

「…ゼロは来てるか？」

訓練生たちがざわつき、あたりを見回すがゼロの姿はない。

「タロウ教官、今日もゼロは見ていません」

訓練生の一人が答えると、タロウの表情は曇る。

「今日も…か」

手元のプレートに書かれているのは、今日の実践演習の組み合わせだ。

ディアナの相手は、ゼロ。

だが来ていないからといってディアナの演習を無しにするわけにはいかない。

実践を通してでなければ、光線技や格闘技などの成長の度合いは分からないのだ。

—何よりも。

(来月の入隊試験があるから、今日はどうしても見ておきたいんだけど…)

—ディアナは来月に宇宙警備隊入隊試験を控えていた。

その成績や実力から将来有望な戦士として、筆頭教官タロウの推薦を受けた。

そして協議の結果、特別推薦枠での入隊試験が受けられるようになったのである。

あのメビウスでさえ、入隊した時6800歳—。

5000歳代での推薦はまさに異例中の異例だった。

(…本当はもう一人、推薦したかったんだけどね)

タロウは内心大きな溜息を吐く。

—義理の甥である、ゼロ。

身体能力、健康状態共に問題なし。

戦闘能力もディアナ以上の高い可能性を秘めている。

座学は—まあ、それぞれ得手不得手があるとして。

なによりもゼロは、ウルトラ兄弟三男でタロウの従兄でもあるセブンの息子だ。

筆頭教官として、そして叔父としてゼロに秘められた無限の可能性を信じていた。

しかしこのところのゼロは素行が悪く、他の訓練生との喧嘩など日常茶飯事になっていた。

教官にも反抗的な態度らしく、80やメビウスも悩んでいたという。

筆頭教官という立場上、そのような訓練生を推薦することもできない。

よつて、ゼロが特別推薦枠に入れられることはなかった。

そんなゼロの近況を知ったセブンは「…すまん」と頭を下げた。

80やメビウスは大慌てだった。

タロウもそんなセブんに頭を上げるように言い、

「セブン兄さん、僕たちはウルトラ兄弟だよ？困ったときには支え合おう。それが当たり前じゃないか」

そう言った後も、兄はどこか申し訳なきような表情をしていた。

(謝らなきゃいけないのは僕のほうなのに…)

「タロウ教官、大丈夫ですか…?」

「ん、え?」

「ずいぶん大きな溜息でしたけど…」

「ああ、ごめんごめん。大丈夫だよ…」

どうやら心の中でついたと思っていた大きな溜息は、だだ漏れだったらしい。

気を引きしめ、再びプレートに目を落とす。

「そうだなあ…じゃあゼロの代わりに―」

「俺ならここにいるぜ?」

突然の声に振り返る、タロウとディアナ。

特徴的なスラッガーを2本頭に持つ若き戦士が、いつのまにかふらりと現れていた。

「やあ、ゼロ。やっと来たね」

タロウは努めて平静を装い、ゼロに声をかける。

「……」

「今日は実践演習だよ。今から君とディアナで組み手をやってもらう。それで―」

『武器や光線の使用を許可する』…だろ?」

「…そうだ。最初から聞いてたのなら、ちゃんと出ておいで」

「……うっせえよ」

「…まあいい。じゃあ始めるよ」

タロウの前で向かい合う、ゼロとディアナ。

ディアナは静かに、ゼロは睨みつけるようにお互いを見据えている。

「はじめっ―」

タロウの声を合図に先に動いたのは、ゼロだった。

勢いよく床を蹴り、ディアナとの距離を縮める。

そして青い拳を放ったが、ディアナはそれをかわして蹴りを入れる。

まともにディアナの蹴りを喰らい、後方に飛ばされたゼロ。

頭を振り、ギツとディアナを睨みつけるとゼロスラツガーを操り、ディアナの接近を防ぐ。

ディアナは縦横無尽に動くゼロスラツガーによって、ゼロとの距離を縮めることができない。

なんとか避け続け、スラツガーがゼロのもとへ戻っていったのを見たディアナは、ムーンプリズムシュートの構えをとる。

―直後。

一筋の細い光線―エメリウムスラツシュがディアナの頬をかすめる。

一瞬それに気を取られたディアナは、ゼロによる肩への一撃を防ぐことができなかった。

「デヤッ―」

「…っ―」

赤い脚から繰り出された強い蹴りによって、壁まで吹き飛ばされる。

体勢を整えようと上体を起こすと、目前に光の奔流が迫っているこ

とに気づく。

とつさに両手をかざし、円形のバリアによってワイドゼロショットを防いだ。

「チー！」

盛大に舌打ちをすると、ゼロはディアナの懐に突っ込んでいく。

「喰らえ……！」

バシッ！

ゼロの渾身の一撃は、銀の手にしっかりと受け止められていた。呆気にとられるのもつかの間、ゼロの体は宙へ放り出される。

――気がつくと床に大の字になっていた。

「そこまでっー！」

タロウの声がコロセウムに響く。

訓練生たちの視線がディアナとゼロに注がれる中、ゼロの視界にディアナが入り、手が差し出される。

その表情からは、何も読めない。

ゼロはその手を勢いよく払いのけ、コロセウムを後にした。

ワツと歓声が上がリ、ディアナは多くの訓練生に囲まれて称賛の言葉を受け取る。

仲間の声に応えるディアナのどこか哀しみを湛えた瞳に気づいていたのは、

タロウ一人だけだった。

第5話 罪

「くそっ、くそお……っ！」

ゼロは怒り任せに寮にある自室の壁を殴る。
勝てなかった。

優等生を気取っているアイツに目にも見せてやろうと思っていたのに、見事に返り討ちにされた。

おまけに手を差し伸べられ、大勢の訓練生の前で大恥をかかされた。

なぜアイツばかりが強くなる。

なぜアイツばかりが欲しいものを手に入れる。

俺はアイツよりも、誰よりも強いはずだ……

——もつと、力が欲しい。

何者をも寄せ付けないほどの力が。

望むもの全てを手に入れられる力が。

ゼロが顔を上げると、部屋の窓から見えるのは眩いほどの輝き——。

「…………アレだ、アレさえ手に入れば……！」

ゼロは部屋を飛び出す。

——まるで飢えた獣のような、ギラギラとした眼で。

コロセウムの見物席に一人腰かけるディアナ。

そのもとへ歩み寄る人物。

「ディアナ」

声をかけたのはブラザーズマントを羽織ったタロウだった。

「隣、いいかい？」

「はい……」

タロウはディアナの隣に腰掛けると、静かに口を開く。

「今日のゼロとの演習はどうだった？」

「……………何も感じられませんでした」

「え？」

「他の仲間と演習をしたときは相手の思いが感じられるんです。『絶

対に、負けるものか』って…。でもゼロが繰り出す拳、蹴り…。それを受けてもゼロの思いが何も感じられませんでした。ただただ目の前にいる私を倒すことしか考えていないような……」

「…ゼロはどうして変わってしまったんだろうか」

タロウは過ぎ去りし日のゼロの様子を思い出す。

生き生きとして、真つすぐ自分の夢に向かっていたゼロ。

—今、ゼロの瞳にその輝きはない。

「きつと私が原因です…」

「どうしてそう思うんだい？」

「タロウ教官は私が両親の墓参りに行っているの、ご存知ですよ〜？」

「ああ…」

「それを見て、ゼロはなんで自分は両親の墓参りに連れて行ってもらえないのかって思ったみたいなんです」

「……」

「施設の方にも問い合わせがあったそうです。『両親の墓はどこにあるのか』と…」

「……そうか」

「施設の先生方は本当に知らなかったそうなんです、ゼロはそれがきっかけで不信感を抱いたみたいで…」

タロウは、何も答えることができない。

—そして次の瞬間、ディアナから発せられた言葉に絶句する。

「ゼロは… 自分が親に捨てられたと考えているんです」

「…！」

「それからです。ゼロが変わってしまったのは…」

ずっとずっと、そばで見えてきた。

お互いの夢を知って、応援の言葉をもらって。

ゼロと一緒に、夢を叶えたい。

自分がここまで頑張ってこられたのは、ゼロがいたからだ。

目標であり、ライバルであり。

そして何よりも—。

だからこそゼロが豹変してしまったとき、本当にショックだった。

めげずにゼロに声をかけ続け、話をしようと何度も部屋を訪れた。しかしその度に冷たい言葉を投げられ、無視をされ。

どうしていいか分からず、一人部屋で泣いたこともあった。今日の演習は、久方ぶりのゼロとの手合わせ。

けれどもゼロの動きは以前のものとは全く違い、キレも速さも力強さもなかった。

瞳にかつての輝きはなく、表情も暗いもので。

演習を終えて、倒れたゼロに手を差し伸べた。

「独りじゃない、私はここにいます」と。

だがその手は振り払われ、ゼロが自分を邪魔な存在だと感じているということ突きつけられただけだった。

「…私が…ゼロを苦しめているんです…」

「違う、ディアナ。君はゼロを苦しめている存在なんかじゃない！」

震える声で自分を責める言葉を口にするディアナに、タロウが否定の言葉を口にした時だった。

『…ん、タロウ兄さん！』

タロウの脳内に酷く慌てたメビウスの声が響く。

『メビウス？何かあったのか…？』

ただならぬメビウスの様子に、タロウも不安を覚える。

—そして、その不安は的中する。

『ゼロが……プラスマスパークタワーに侵入しました！』

「な、なんだって！ゼロが!？」

あまりの衝撃で思わず口走ってしまったタロウの言葉に、ディアナが反応する。

「ゼロ…？ゼロに何かあったんですか？」

タロウを見れば、顔面蒼白に近い状態で固まってしまっている。

「タロウ教官！」

「…！」

「ゼロがどうかしたんですか？」

普段決して見ることはないタロウの様子に、よくないことが起きたのだと悟る。

そしてその中心にいるのは、ゼロなのだ。

タロウは立ち上がるとマントを翻し、コロセウムを出ていこうとする。

「待ってください、タロウ教官！いったい何が―」

「ディアナ、君はここにいるんだ。…分かったね？」

それだけ言うとタロウは大急ぎでプラズマスパークタワーに向かった。

光の国の中心にそびえ立つ、プラズマスパークタワー。

遠い昔に太陽を失った、この星の生命線でもある。

タロウがそのふもとに到着した時、すでに弟たちの姿があった。

「タロウ兄さん！」

「メビウス、状況は？」

「警報が鳴り響いて、すぐにマン兄さんがモニターを確認したらそこにゼロが…」

「兄さんたちはどうしてるの？」

「…セブン兄さんが真っ先に突入しました」

「え、セブン兄さんが!?!」

苦しそうにレオが告げたことを耳にし、タロウも驚きを露わにする。

「はい、こうなってしまったのは自分の責任だと…。ならばせめて最後は自分の手で止めたいと言って…」

「その後にゾフィー兄さん、ジャック兄さん、エース兄さんも突入しました」

アストラがそう告げた時、タワーの中から騒々しい声が聞こえてきた。

「離せ！離せよ!!」

まだ若々しい聞きなれた少年の声。

ジャックとエースにそれぞれ両脇を抱えられたその声の主が姿を現す―。

「ゼロ！」

不意に背後からかかった声に振り向く。

「っ！ディアナ!？」

コロセウムにいるはずの教え子が血の気の引いた顔でゼロの名を呼び、こちらへやってくる。

先ほどまで激しい抵抗をしていたゼロも動きを止める。

「待てー！ここは訓練生が許可なく来ていい場所ではないぞ！」

ディアナがゼロのもとに駆け寄ろうとするのをレオとアストラが制止する。

「離してくださいー！」

「ダメだ！」

懸命に獅子兄弟の制止から逃れようとするが、この二人からはそうそう簡単に逃れられるものではない。

「なぜここにいるんだ ディアナ……！」

タロウはディアナのもとに駆け寄り詰問する。

しかしディアナはタロウの問いに答えることなく、こちらに背を向けて動かないゼロに問いかける。

「ゼロ…… なんて、こんな……！」

ディアナの声は震え、眼には涙が溜まって今にも溢れそうになっている。

「……………」

「ゼー」

「……お前には関係ねーだろ。お前は俺の何なんだよ」

「……!!」

凍てつくような言葉が胸に突き刺さる。

絶句したディアナは膝から崩れ落ち、両手で顔を覆った。

ゼロは一切振り向くことなく、そして喚くことなくジャックとエースによって連行されていった。

泣き崩れるディアナのそばにメビウスが跪き、何も言わずその背をそっと擦る。

タロウも、レオも、アストラも、かける言葉が見つからなかった。

ゼロが連行されて行った、数分後だった。
憔悴しきった表情のセブンがゾフィーに支えられ、タワー内から出てきたのは。

第6話 真実と決意

暗く冷たい、無機質な部屋。

そこに一人蹲り、虚ろな表情のディアナ。

―あの事件から3日。

講義にも出席せず、ずっと寮の自室に閉じこもったまま。

何度か他の訓練生が自分を呼びに来たが、一切それに応えることはなく、

ただただあの日のゼロの言葉を思い出していた。

『…お前には関係ねーだろ。お前は俺の何なんだよ』

ゼロにとって自分は邪魔な存在でしかなかった。

ずっと自分が抱いていた気持ちは、一方通行だった。

一緒に夢を語って、憧れの警備隊を目指して。

いつか一緒に戦える日が来ると信じていたのに。

そんな思いを抱いていたのは、自分だけだったのだ。

―部屋にノックの音が響く。

ディアナは動こうとしない。

さらにノックが繰り返され、扉の向こうから声がかかる。

「…ディアナ、いるんだよね？」

(……え)

意外な訪問者にディアナは立ち上がり、玄関へと向かう。

扉を開けるとそこに立っていたのは教官であるメビウスだった。

「こんにちは」

メビウスは虚ろな表情のディアナを見ると心配そうな表情を浮かべる。

「突然ごめんね。でもどうしても話がしたくて―」

「…話ができるような気分じゃありません」

「……ゼロのことで話があるんだ」

メビウスの言葉にディアナはびくりと体を震わせ、怯えた表情を見せる。

「僕と一緒に来てほしい …いや、僕と一緒に来てもらうよ」

メビウスの言葉にディアナは小さく頷くと、後に続いて飛び立つた。

メビウスの後に続きながらディアナは考える。

—何の話だろう。

ゼロが罪を犯した動機を聞きたいのだろうか。

ゼロの事情聴取に付き合わせられるのだろうか。

(……そんなの、耐えられない)

震える唇をキュツと結び顔を上げる。

メビウスとディアナが向かうその場所は—。

—宇宙の平和を守る宇宙警備隊の本部。

メビウスに続いて本部の中へと入り、どこかへと向かう。

最上階につくと、メビウスは目的の部屋の前で立ち止まる。

(え、ここって…まさか……)

—宇宙警備隊長室。

一介の訓練生が立ち入ることは、まず、ない場所。

ディアナはさらなる不安に駆られ、メビウスを見上げる。

メビウスはディアナを見て少し微笑むと扉をノックする。

「メビウスです。ディアナを連れてきました」

「入ってくれ」

低く落ち着いた声が部屋の中からかけられる。

音もなく静かに扉が開く—。

扉が開き、目に入った光景に思わず息を飲む。

宇宙警備隊長のゾフィーを始め、マン、セブン、ジャック、エー

ス、タロウ、80、ヒカリ…

多くのウルトラ兄弟が隊長室でメビウスとディアナを待っていたのだ。

「やあ、ディアナ」

ゾフィーが声をかけるが、目の前の光景にディアナは返事ができずにただ立ち尽くす。

メビウスにそつと背中を押され、やつとこのことで部屋へと足を踏み入れた。

「突然のことで驚かせてしまったようだね…」

ディアナの表情を見てゾフィーが苦笑いを浮かべる。

—驚いたとか、そういうレベルじゃありません…

そう答えられたらいいのだが、如何せん目の前の光景に圧倒され声
がうまく出ない。

「ディアナ、君に来てもらったのは他でもない。ゼロのことについて
だ…」

ゾフィーの言葉にディアナの表情が硬いものになる。

「昨日ゼロの処分が決まった… ゼロは宇宙警備法違反につき、光の
国追放処分とする」

「!!」

ディアナは絶句する。恐れていた最悪の結果だった。

「…ただし」

ゾフィーは少し力を込める。

「ゼロはまだ未成年であり、将来あらゆる可能性を秘めた戦士でもあ
る。彼が罪を悔い、更生することができれば光の国への帰還を認める
こととする—」

「…では」

「かつてのベリアルのように永久追放ではない、ということだ」

「よ、かった…」

こらえていた感情が涙になってどっと溢れる。

「今朝早くからある星で更生のための修行に入っている。師範はレ
オ・アストラ兄弟だ。あの二人なら、必ずゼロを導いてくれるだろう
…」

「ありがとうございます…」

「…頭を上げてくれ、ディアナ。そうしなければならぬのは我々の
方だ」

「え…?」

「君を呼んだのはゼロの処分について伝えるためだけじゃないんだ…
むしろ、こちらの方が本題なんだがね」

ゾフィーとマンからの言葉に、ディアナは訳が分からないといった

表情になる。

そんなディアナの前に、セブンが進み出る。

セブンの表情からはどこか緊張している様子が読み取れた。

「ディアナ、実は……………」

そこまで言うのと、セブンは一度大きく息を吐く。

そして意を決したようにディアナに告げる。

「あの子は……………ゼロは…………… 私の実の息子なんだ」

あまりの衝撃に息ができない。

思考が、追いつかない。

「どういうこと、です…か?」

説明を求めるようにセブン、そしてウルトラ兄弟を順に見る。

「ゼロは…生まれてすぐにある事情のために施設に預けられた、正真正銘セブンの息子だ」

マンがセブンに代わり、ディアナに説明する。

「私たちは何とかセブンとゼロと一緒に暮らせるように働きかけた…だが、どうすることもできず、施設に預けるといいう形になってしまったんだ」

ディアナはマンからゆっくりとセブンへ視線を移す。

—見れば見るほど、そっくりだ。

腹部から足元にかけて入る銀色のライン、金色の瞳、特徴的なスラッガー。

思えばゼロの光線技—エメリウムスラッシュやワイドゼロショットも、セブンのエメリウム光線やワイドショットと共通点がある。

なぜ今まで気がつかなかったのかと、自分を責めたいぐらいだ。

考えるよりも、体が先に動いていた。

ディアナはセブンのマントに掴みかかる。

「なんで親子の名乗りをしなかったんですか!?!それだけでもゼロはきつと…!」

「ディアナ、落ち着いて—」

メビウスがセブンからディアナを引き放す。

「ゼロは… ずっと幼い頃からあなたに憧れていたんですよ?知らない

いはずがないでしょう!？」

「ディアナ……!」

「ゼロがいつもどんな思いで過ごしていたと思っっているんですか!？」

ディアナは感情任せにセブンに怒りをぶちまける。

なぜ、もつと早く名乗り出なかったのか。

どうしてももつと早くゼロの気持ちに気づいてあげなかったのか。

どうしてもこんな事態になるまでゼロを放っておいたのか……。

親のいない辛さ、寂しさを誰よりも知っているディアナにとって

は、理解しがたいことだった。

「あなたはそれでも本当にゼロの父親なんですか!？」

「!!」

「ディアナ、少し言い過ぎだ……!」

タロウがディアナに近寄ろうとするが、セブンが手で制止する。

「そうだ…… 私は父親失格だ。ゼロにも……君にも辛い思いをさせてしま

ったのだから……。その結果、こんなことになってしまった…… だ

から今回の責任は全て私にある」

「セブン兄さん!」

「……本当にすまなかった」

セブンはディアナに深く頭を下げる。

ディアナはさらにセブンに怒りをぶちまけようと口を開きかけた

が、

震える肩と骨が浮き出るほど強く握られた紅い拳を目にすると、何

も言えなくなってしまうた。

——この人はたった一人の息子を失ったんだ。

例えそこに至るまでの過程がどんなものであったとしても、その苦

しみは本物だった。

寮に帰ったディアナは、大きな溜息と共に座り込む。

壁に背を預け、ぼんやりとした表情で先ほどまでの会話を思い出

す。

「どうして私にそれを伝えたんですか……?」

なんとか怒りを鎮めながらウルトラ兄弟に問う。

「施設の人も、訓練センターの教官も、ゼロがセブンの息子であることを知らないんですね？ 処分のこともまだ発表されていませんし…。それに…どうして皆さんが一介の訓練生である私に直接伝えてくださったんですか？」

「…君にとってゼロが特別な存在であるように、ゼロにとっても君が特別な存在だからだ」

セブンがディアナの問いに答えるが、ディアナはそれに反論する。「でもゼロは、ここのところ私の話すら聞いてくれなかったんですよ？ 部屋に訪ねて行っても無視され続けるし…。それなのにどうしてそんなことが言えるんですか!？」

「ゼロが君と出会って…。あの子の表情は本当に変わった。父親として本当に嬉しかった…。君がいなければゼロのあんな表情は見られなかったかもしれない」

「…私じゃなくてもゼロの表情は引き出せたはずです」

「ディアナ…」

「私はゼロにとって邪魔な存在でしか」

「ディアナ、そんなことは絶対じゃない!」

ディアナの言葉を突然の強い口調で遮った80に、皆の視線が注がれる。

「君は間違いなく、ゼロにとって特別な存在だ…!」

「だからどうしてそんなことが」

「覚えているかい？ もう何千年前になるかな… 地球文化体験の一環で七夕の短冊に願い事を書いただろう？」

「…ええ」

「君の願い事を上級生の何人かがからかったよね… だが君よりも先にゼロが反論した…」

「……」

「まあ、アレは反論したというよりも反撃したと言った方がいいかな… ともかく僕はその後でゼロと二人つきりで話をした。その時、なんて言っていたと思う？」

「……分かりません」

『無理なんかじゃねえ… アイツは絶対強くなる。女だから何だつてんだよ……』ってね。君の願い事がからかわれたのがすごく悔しかったみたいだよ…」

「!!」

知らなかった。

あの後で「頑張れよ」っていう応援の言葉はもらったけど、

ゼロがそんなことを言っていたなんて。そんな風に思っていたなんて。

「ゼロは誰よりも早く君の強さや可能性を見抜いていたのかもしれないね…」

「……………」

「ディアナ、最近のゼロの態度は君にとっても辛いものだったろう。けれどもゼロの心の奥深くには君への思いが今も存在している。だからこそ連行されようとしているゼロのところへ君が駆けつけたときに、ゼロも思わず立ち止まったんだろう…。心の底から君のことを邪魔だと思っているのならそんなことはしないはずだ……」

タロウの言葉にディアナはゼロの様子を思い出す。

激しく抵抗していたゼロが急に立ち止まったのは、間違いなく自分が到着してからのことだ。

「ディアナ」

ゾフィーの声にそちらを向くディアナ。

「私たちにとってゼロは大切な家族だ。だが力が及ばず、結果こんな事態を引き起こすことになってしまった…。そんなふがない私たちに代わって長い間ゼロをそばで支え見守ってくれていた君には、言葉で表せないほどの感謝の気持ちがある。その君にはいち早く真実を伝えねばならないと思ったんだ…」

「……………」

「本当にありがとう、ディアナ」

ゾフィーが頭を下げると、他のウルトラ兄弟も一斉に頭を下げた。

「え、ちよつと…」

「どうかゼロが一人前の戦士として帰還するまで、あの子のことを待っていてあげてほしい」

「……」

ゼロは、私のことを心の底から邪魔な存在だとは思っていないかった。

他の訓練生と比べると「特別」だった。

その「特別」がどういう意味の「特別」かは分からないけれども。

(あの人たちにあままでされたら信じるしかないじゃない……)

ウルトラ兄弟に頭を下げられ、「待っていてあげてほしい」と懇願され。

あの表情や態度であそこまで必死に言われれば信じるしかない。信じるほかにない。

『待っていてほしい』：か』

待っただけだなんて、もどかしい。

本当ならゼロが修行しているところへ行って自分の思いを伝えたい。

だが追放処分の身となっている以上、ゼロは「罪人」として扱われるため接触は禁止されている。

—もし、ゼロにあの頃の気持ちが残っているのなら。

(私がやるべきことは、一つだけ……)

ディアナは立ち上がると、窓の外に輝く光を見つめた。

翌日の朝。

タロウはいつもより早くコロセウムに着き、午後の演習の準備をしようとしていた。

「……ん？」

演習場の中に入ろうと扉に手をかけたが、中に誰かの気配を感じ、音をたてないように扉を少し開ける。

「！」

中にいたのは、ディアナだった。

その表情はこれまで以上に真剣で、気迫を感じさせた。

タロウは気づかれぬように、静かに中へと入る。
強く速い蹴りが空を切り、力強い拳が放たれる。

「セアア！」

「やあ、ディアナ」

タロウが声をかけると、弾かれたようにディアナが振り向く。

「タ、タロウ教官！」

「ずいぶんと早いんだね」

「す、すみません！勝手に入ってしまったって……！」

「うん、まあ勝手に入るのはよくないよね」

青い顔で謝るディアナとは対照的に、タロウは朗らかに答える。

「自主トレーニングかい？」

「まあ、そんなところですよ……」

「今度の入隊試験のだったら少し見てあげるけど……」

「あ、そうじゃなくて……」

「？」

「昨日、皆さんとお話して……決めたんです。……ただ待ってるだけじゃダメだって……」

「……」

「ゼロの心の奥に少しでも私を思ってくれる気持ちがあるのなら、あのころの夢を叶えられるように頑張ろうと……。ゼロが帰って来るまでに今よりもっと強くなって……。大切なものを守る強さを身に着けて、もう二度と大切なものを失わずに済むように……」

「……そうか」

タロウはディアナの言葉を聞くとブラザースマントを脱ぎ捨てる。

「タロウ教官？」

「よし、ディアナ。トレーニングに付き合おうよ」

「え、でも……」

「それとも、この私が相手じゃ不満かい？」

「……いいえ！」

「よし、じゃあこい！」

「はいっ！」

「まったくお前は本っ当に……!」

数時間後の宇宙警備隊長室。

呆れた顔のゾフィーと怒り心頭のエース。

―そして立派なたんこぶをこしらえた、タロウ。

「お前は筆頭教官なんだぞ?! 授業をほっぽり出すとは何事だ!」

長兄ゾフィーからのお説教に、小さくなる6兄弟の末っ子タロウ。

ディアナとのトレーニングに夢中になってしまったタロウは、午前の講義の予定をすっかり忘れてしまった。

ディアナに指摘されるまでそれに気づかず、気づいたころには時すでに遅し。

そして最悪だったのは、タロウの代わりに講義をしていたのがエースであったということ。

当然エースはキレて、強烈な教育的指導が施され、立派なたんこぶができてしまったのである。

「だって―」

「だってもくそもあるか アホンダラア!!」

「わー! ゴめんなさい、ゴめんなさい!!」

―筆頭教官も兄たちの前ではこの通りである。

タロウはエースから逃げ回りながら、必死に理由を説明しようとする。

「だってディアナが朝早くからトレーニングしてたからつい……」

「ディアナ?」

ゾフィーとエースが同時に反応する。

タロウは今朝のディアナとの会話について説明した。

「そうだったのか……」

ゾフィーは深い溜息を吐く。

「私たちはあの子に新たな重荷を背負わせてしまったのかもしれないな……」

「ゾフィー兄さん、それは違うよ。ディアナは今回の出来事を通して自分のなりたい姿を見つけたんだ。その為に今必死に頑張っている

…。それを重荷だなんて言っちゃ、失礼だよ」

「そうだな…」

ゾフィーはそう言って顔を上げると扉の向こうに呼びかける。

「だそうだと、セブン」

隊長室の扉が開き、セブンが姿を現す。

「セブン兄さん、いつからそこに？」

エースが尋ねる。

「お前の怒鳴り声が聞こえたんでな。タロウがまた何かやったのかと思っただが…」

「…え、そんなに聞こえてた？」

「ああ、聞こえた。それでここへ来てみれば思いがけない話が聞けたというわけだ」

セブンは浮かない表情だった。

「セブン兄さん、大丈夫だよ。僕も心配してたんだけど、今のディアナは真つすぐ前を向いて頑張ってる。なんだか前よりも逞しく感じるよ」

「そうか…」

「そうだ、ゾフィー兄さん。俺たちも何かディアナの力になれませんかね？」

エースがゾフィーに提案する。

「あの子がここまでゼロのことを思って頑張ってるんだ。その家族として何かできることがあるんじゃないかな？」

「そうだな…」

ふむ、と銀の指を顎に当ててゾフィーは思案する。

「またこの愚弟が講義をすっぽかしても困るし…」

「酷い！もうそんなことしないって！」

「俺らが代わる代わるディアナの自主トレーニングを見るといいうのはどうですか？」

タロウの抗議を華麗に無視し、エースはゾフィーに提案する。

「だがそれだと、他の訓練生に不公平が生じるんじゃないか？」

前・筆頭教官でもあるセブンが疑問を口にする。

「だから理由を決めるんですよ。『宇宙警備隊への特別推薦枠入隊試験のためのトレーニング』とでもしておけばいいでしょう。もちろん期間は試験当日まで。これならちゃんとした理由になるんじゃないですか？」

「まあ、確かにそれなら皆納得はするが…」

「やりましょうよ、兄さん！」

タロウも賛成し、ゾフィーはよしと頷く。

「分かった、すぐに皆を集めよう」

ゾフィーはテレパシーで兄弟たちに集合をかけた。

翌日 ウルトラコロセウム。

昨日タロウからコロセウムの使用許可をもらったディアナは、今日も朝早くから自主トレーニングをしていた。

そこへ現れた一人の戦士。

「おはよう、ディアナ」

「！セブンさん…」

突然のセブンの登場に驚くディアナ。

「おはようございます…」

少々気まずそうに挨拶をするディアナ。あの日の自分の言葉が次々と浮かんでくる。

「あのっ！」

「？」

「あの時は本当にすみませんでした。セブンさんの気持ちも考えずにずけずけと…！」

「いや、本当のことだ。気にしなくていい」

「でも…！」

「それに… 君がどれほどゼロのことを大切に思ってくれているのかわることができた。ありがとう…」

「そんな…」

「そこでどうしても君にお礼がしたくてね…」

セブンがそういうとコロセウムに次々と影が降りてくる。

ゾフィー、マン、ジャック、エース、タロウ、80、メビウス、ヒカリ。

突然のウルトラ兄弟の登場に驚きを隠せないディアナに、タロウが説明する。

「ディアナ、君の思いを兄さんたちに伝えたいんだ… そうしたら君の夢を叶える手伝いをしたいと言ってきてね…」

「こいつがまた講義をすっぱかしても困るしな…」

「兄さん…」

「ディアナ、俺たちはゼロの叔父… いや、家族としてゼロを見守り支えてくれた君に恩返しをしたいんだ」

エースが言うと、他の兄弟たちも頷く。

「君は確か来月に入隊試験を控えていたね？」

「はい…」

ジャックの質問にディアナはこくりと頷く。

「その入隊試験まで、私たちが特別教官として代わる代わる自主トレーニングに付くことになった」

「え!？」

「突然ですまないが、私たちの申し出を受けてくれないか？」

ゾフィーがディアナの前に進み出る。

「…では、私からも一つお願いがあります」

「なんだい？」

ゾフィーが尋ねると、ディアナはセブンを見据え口を開く。

「ゼロが立派な戦士となって帰ってきたら… 父親の名乗りをして、ちゃんと向き合ってあげてください」

セブンは静かにディアナを見つめ返す。

「分かった、約束する。ゼロが修行を経て立派な戦士となって帰ってきたら、必ず父親の名乗りをしよう。どんなことがあってもゼロと向き合ってみせる」

「ありがとうございます…!」

セブンとディアナはお互いに微笑み合った。

「さてディアナ、今日は私が特別教官だ」

ウルトラマンがブラザーズマントを脱ぎ、肩をゆっくりと回す。

「分かっているだろうが、私たちは甘くないぞ?」

「はい、ウルトラ兄弟はそうでなければ期待外れです」

「言うじゃないか」

にやりと笑い合うウルトラマンとディアナ。

その後コロセウムには、威勢のいい声がしばらく響き渡った。

第7話 温かな想い

磁気嵐吹き荒れるK76星。

本来無人であるはずのこの星に、円を描くようにしてお互いを見据えながら動く戦士が二人。

一人は深紅の身体、もう一人は上半身が物々しい鎧に覆われている。

ゆっくり、ゆっくりと距離を保ち、息を殺して相手の様子をうかがっている。

「ツラアー！」

先に動いたのは鎧に覆われた戦士。

勢いよく地面を蹴り、相手に向かっていく。

だが拳や蹴りを繰り出すも全て動きを読まれ、いとも簡単に受け止められてしまう。

「くっそお!!」

加えて鎧―テクターギアが体を締め付け、自由が利かない。

「おい―こいつを何とかしろよ!」

テクターギアの煩わしさと攻撃が一切当たらないことへの苛立ちがピークに達し、鎧の戦士―ゼロは自分を見据える深紅の獅子に突っかかる。

「それも修行のうちだ!我慢しろ!」

深紅の獅子―ウルトラマンレオはそう一喝するとゼロの腕をつかみ地面に組み伏せる。

「離せ、離せよこの野郎!!」

「お前の動きは隙だらけだ。これでよく自分が強いと言えたものだな!」

「んだとお!」

ゼロはレオの腕から逃れようと暴れるが、レオの力は驚くほど強くビクともしない。

そこへ、この状況を面白がるような声が降って来る。

「おー 今日もやってるね」

レオの双子の弟、アストラだった。

「アストラ、戻ったのか」

「ただいま、兄さん」

未だゼロを組み伏せたまま、レオは光の国から戻って来た弟を迎える。

「食料とか医療品とか…、いろいろ必要なもの買ってきたよ」

「すまん、アストラ」

レオはゼロの拘束を解く。

「今日はここまでだ」

それだけ言うとレオはゼロのもとを離れていった。

「…覚えてろよ」

低く唸るような声でゼロはレオの背中に向かって呟く。

「ゼロ、明日は僕が相手しようか？」

アストラがにっこりと微笑んでゼロを見下ろしている。

—その目は、笑っていない。

「…いや、いい」

ウルトラ兄弟八男、アストラ。

レオの双子の弟で、レオにも劣らぬ高い身体能力を持つ。

目に見えて厳しいレオとは違い、アストラは穏やかな印象だった。

—こいつが相手なら逃げ出すチャンスはいくらでもある。

その考えが大きな間違いだった。

K76星に来てから数か月。何度かゼロは脱走を図った。

その度にレオに説教され、修行は厳しくなっていたがゼロは脱走を諦めなかった。

そうして何度目かの脱走がバレたとき、ついにアストラがキレたのである。

—思い出すだけでも背筋が凍りそうな、あの時間。

レオの修行なんて準備運動ぐらいにしか感じられないような怒涛の攻撃。

息つく暇も、体勢を立て直す暇もなく蹴りや拳を一身に浴び、地獄のような時間が過ぎたときには立ち上がることもできなかった。

その時のレオはというと、「俺は知らんぞ」というような表情でアストラを止めることはなく、ただただ二人の様子を―ゼロが死ぬことの無いように見ていた。

ここへ来てゼロが一番最初に学んだこと。

―アイツを、アストラをキレさせるとヤバい。

そのため、ゼロは比較的アストラの言うことは聞くようになった。

「ほら」

アストラが手を差し出す、ゼロはその手を借りることなく立ち上がると

修行中の住まいとなっている洞窟へと戻っていく。

アストラは肩をすくめると、ゼロに続いて洞窟へ戻っていった。

洞窟へ戻るとゼロはごろりと寝ころび、アストラは食事の用意を始める。

レオはまだ戻っていない。

恐らくキングに今日の報告をしに行っているのだろう。

きつい鍛錬による空腹感に耐え兼ね、アストラに食事の用意を急かそうとふと視線を横に向けると見慣れぬものが目に入る。

―ゼロの両手ほどの大きさの食料保存用カプセル。

光の国では一般的に使用されているのでゼロも知っているが、K7 6星で見たのは初めてだ。どうやら中には何か食べ物が入っているらしい。

ゼロはアストラの様子を伺う。

アストラはゼロに背を向けた状態で食事の用意をしており、こちらに気づいている様子はない。

ゼロは体を起こしそつとカプセルを取ると、蓋を開ける。

中に入っていたのは、チョコカッパケーキだった。

一口サイズのものがいくつも入っており、甘い香りがゼロの鼻と胃袋を刺激する。

ゼロは迷うことなく一つ手に取ると、口の中へ放り込んだ。

口いっぱい広がる優しいチョコの甘さと、オレンジピールの爽やかな香り。

(…………あれ)

この味、どこかで。

ゼロはもう一つ口に含む。

今度はじっくりと味わうように。

…………そうだ、前にも。

甘い香りに誘われて部屋に入ると、できたばかりのそれを嬉しそうに見せてきた。

早く食べたくて大急ぎで口に入れたら、ゆっくり食べてほしいと言われた。

「おいしい」と言ったら、満面の笑顔を見せてくれてー。

「…………ディアナ……」

ゼロの口から幼馴染の名前がこぼれ落ちる。

「そうだよ」

ゼロが顔を上げると、アストラがこちらを見て微笑んでいた。

「なあ、これ…………まさか……」

「預かって来たんだよ、ディアナからね」

ゼロの報告もかねて光の国へ戻ったアストラは、食料や薬などK7 6星での生活に必要なものを買出しに行った。

買いそびれたものはないかと確認していると不意に名前を呼ばれる。

「アストラさんー！」

振り返ると一人の少女がこちらに向かって駆けてくる。

余程急いできたのか、少女は自分の前で立ち止まると肩で息をしたまま話し出せずにいる。

「こんにちは。えっと、君は確か…………」

「デイ…………ディアナです」

「ああ、そうだったね。どうしたの、そんなに急いで？」

「…………」

未だ肩で息をしたまま、ディアナは少し視線を泳がせる。

そして息を整えると真つすぐアストラを見つめ、持っていたものを

差し出した。

「これ、〃皆さん〃で食べてくださいー！」

ディアナが差し出したのは、食料保存用カプセルだった。

「あの… 手作りなんでお口に合うかどうかは分からないんですけど…」

どうやら何かを作って差し入れとして持ってきたようだ。

そしてディアナが手作りのそれを渡したい人物は、たった一人ー。

アストラはディアナの手からカプセルを受け取る。

「ありがとう。ちゃんと 〃皆〃でいただくね」

「！は、はい…！」

「あ、でもレオ兄さんは甘いものあんまり得意じゃないから、今度からは…ね？」

アストラは意味ありげに片目を瞑ってみせる。

「あ、はい…」

ディアナはその意味を察し、少し俯く。

そんなディアナの頭をぽんぽんとすると、アストラはディアナに別れを告げて飛び立った。

「あくまで僕とレオ兄さんへの差し入れとして渡したみたいだけど、君に渡したいというのがバレバレだったよ」

アストラは苦笑いでディアナとの出来事を話してみせる。

ゼロは俯いたまま、何も言えずにいる。

「君は追放になっっている以上、 〃罪人〃として扱われている。ごく一部の人物を除いて接触することは禁止されているし、もし破ってしまった場合は嚴重に罰せられる… そんな危険を冒してまであの子は君にこれを渡したかったんだ…」

アストラはカプセルに入れられているカップケーキに視線を移す。

ゼロはゆっくりとした動作でカップケーキに手を伸ばし、一口サイズのそれを口に入れ咀嚼する。

『なあなあ、このあまいにおい なんだ？』

『あ、ゼロくん！みてみて！おかしつつくってみたんだよー！』

『すげー！これディアナがつくったのか？ でもこれなんだ？みたことねー…』

『これはね、ちきゆうのおかしで「かつぷけーき」っていうんだって。せんせいといっしょによにつくってみたんだ！』

『へー… なあなあ、たべてもいいだろ？』

『あ、まって！ゆつくりたべてよ！』

『んぐ…』

『だ、だいじょうぶ!?』

『…うめー これすごくうめー!』

『ほんとう!』

『おう！もいっこたべてもいいか?』

『いいよ。たくさんあるから、いっぱいたべてね!』

また、もう一個。

『…なあ、ディアナ』

『なに、ゼロ?』

『お前の願い事、「宇宙警備隊になって地球に行きたい」だったよな?』

『うん』

『…頑張れよ』

『え…?』

『お前なら絶対… その夢叶えられると思う。俺も夢叶えられるよ
うに…セブンみたいに強くなるからさ。頑張ろうぜ』

『うん!』

『…』

『ゼロ』

『…なんだよ』

『…ありがとう』

『…別に』

もう一個。

『ゼロ!』

『ディアナ…』

『入学おめでとう、ゼロ』

『お前もな』

『ありがとう。なんだかドキドキするね…』

『そうか?』

『だって夢に少しずつ近づいてきてるんだよ?』

『夢…か』

『ゼロの夢は変わってないんだよね?』

『…多分な』

『多分って…』

『お前はどうかなんだよ?』

『変わってないよ、あの頃から。「宇宙警備隊に入って、地球に行きたい」これが私の夢』

『そつか… 相変わらずなんだな』

『何よ、これじゃダメ?』

『…いや、それでいい』

『?』

『(お前はその夢を見てる時が、一番…)』

『ゼロ?』

『うおっ、なんだよ』

『何か考えてた?』

『なんでもねーよ』

『…嘘だ』

『なんでもねーって!』

もう一個。

『ゼロ!』

『…』

『どうして講義に来なかったの?』

『…どうしようが俺の勝手だろ』

『よくない!最近どうしたの?まるで人が変わっちゃったみたいだ』

『…』

『ねえ、何かあったのなら私で—』

『…うぜえんだよ』

『…え？』

『うつとおしいんだよ… 俺にかまうんじゃねえ！』

『ゼロ…？』

『どいつもこいつも分かったようなツラして、俺に近づきやがって…！』

『ゼロ！待って！』

『お前に分かるわけねーよな？捨てられた奴の気持ちだ』

『捨てられた…？何言つてー』

『そりやそうだよな？お前の親はとっくに死んでるんだからな！』

『!!』

『（…いい気味だ）』

一つ食べるごとに、ディアナとの記憶が蘇る。

いつの間にかどこかへ封じ込めてしまっていた、大切な記憶。

出会った日、輝くような笑顔に心臓が跳ねた日、

お互いの夢を叶えるという約束、夢へと一歩近づいたあの日、

そして、疑心暗鬼となりそのはけ口として辛く当たってしまった

日々…。

優しい甘さがゼロの荒んだ心を少しずつ溶かしていく。

もう一つと手を伸ばしたとき、カプセルの底にケーキとは明らかに

違うものが入っていることに気づく。

震える手でそれを取り出し、そっと開く。

『ずっと待ってるからね』

懐かしさのある綺麗な文字で、たった一言。

そのたった一言がゼロの心に、体に広がっていく。

じわりと視界が歪んだかと思うと、大粒の涙が幾筋となって金色の眼から落ちる。

「…ば、かだろ… なんでアイツ…」

ディアナからの手紙に涙が落ち、大きな染みとなって広がる。

「俺…は、アイツの思いを…こんな、こんな…」

自分は最悪の形でディアナの想いを裏切ってしまったというのに。

目先のことに捕らわれて、大罪を犯してしまったというのに。ずつとそばにいてくれていたのに、いつしかそれを忘れてしまったというのに。

なぜ、こんなことになってもー。

「それだけ彼女にとつて、君が大切な存在なんだよ」

アストラがゼロの頭をぽんぽんとしながら言う。

「彼女は君が必ず更生して、光の国へ帰ってくることを信じている。君のことを大切に思って、帰りを待っていてくれる人はまだいるんだ」

「で、も… 俺は…もうアイツに、合わせる顔が、ねえ……」

「この話聞いて、その手紙読んでもまだ言うのー?」

「俺は…罪人だ… 例え帰っても、その事実は変わらねえ…! 一生残るんだ…!」

「…そうだね」

「だから…!」

「そう感じるんだったら、それを打ち消すぐらい強くなればいいじゃないか」

「……」

「ディアナはね、あの頃の夢を忘れずに頑張ってるみたいだよ。君が帰って来るまでに今よりずっと強くなっていよう、大切なものを守る力を手にしたいって…」

「!」

「ゼロ、君がやるべきことは一つだ。ディアナの想いに応えること。

それが “真の戦士” となる一番の近道でもある」

「一番の…近道」

「まあ、近道と言っても険しい道のりだよ?けど、それを乗り越えて手にした強さは本物だ。一時の力じゃない、永遠に君の物だ」

「……」

会いたい。

ディアナに会いたい。

こんなことになっても自分のことを見捨てずに待っていてくれる。

差し伸べてくれた手を振り払ってしまったというのに。
どんな思いで毎日自分に声をかけていてくれたのか。
どんな思いで自分からの罵りの言葉を受けていたのか。
それに気づくことの無かった自分をずっと信じて待ち続けている。
そんな彼女に、今すぐ会いたい。
会って、謝って、もし許してもらえるのなら…。

一緒に夢を追いかけていた日々をまた過ごすことができるのなら…。

伝えたい思いがたくさんある。
ごめん。

許してほしい。
辛かったよな。

俺は何も分かってなかった。
また一緒に夢を追いかけたい。

信じてくれてありがとう。
そばにいてくれてありがとう。

お前には何度も救われてたんだ。
出会えてよかった。

—好きだ。
忘れていた、大切な気持ち。

ずっとずっと抱いていた、暖かな気持ち。
好きだ、好きだ。

こんなにも長い間気づけなかった想い。
今更気づいても手遅れかもしれない。

でも、この想いは偽りのない確かなもの—。
『…お前には関係ね—だろ。お前は俺の何なんだよ』

—バカ野郎。
ゼロは100年ほど前の自分に心の中で憤る。

アイツは俺にとって何でもない存在なんかじゃない。
初めて自分を認めてくれた人。

そばにいて、支えてくれた人。

何よりも大切な、大切な人。

ゼロは残ったカップケーキを全て口に含む。

「んぐっ……」

「お、おいおい……」

アストラが大慌てで水を差し出すが、ゼロは手で「いらねえ」という意思表示をする。

そして何とか全て飲み込むと洞窟の外へ飛び出していく。

「レオオー……」

吹き荒れる磁気嵐の中、「ゼロはレオの名を叫ぶ。

「なんだ騒々しい……」

キングの元から帰って来たと思われるレオの呆れた声がする。

「頼む、もう一度修行だ！」

「……は？ いや、今日は終わりだと言ったはずだが……」

突然のゼロの申し出に、レオが間の抜けた声を出す。

「つべこべ言わねえで、さっさと相手しろよ！」

直後、衝突音が聞こえ、ゼロがレオに対して技を繰り出したことが分かる。

「っ！馬鹿者！相手が戦闘態勢ではないのに不意打ちとは何事だ！」

レオの怒りの声が聞こえ、またもや衝突音。

「これは長くなりそうだなあ……」

アストラは外の様子を確かめると、やれやれといった様子で洞窟へと戻っていった。

——必ず、必ず帰るから。それまで待っていてくれ。

ゼロは故郷の想い人にそう誓った。

第8話 ウルトラ銀河伝説

―ゼロが修行に入り、2000年が過ぎた頃。

けたたましく鳴り響く警報音。

筆頭教官室でモニターを確認したタロウは愕然とする。

「…っ！これは…！」

それが全ての始まりだった…。

十数分後、警備隊本部上空に輝くウルトラサイン。

「あれは… タロウのウルトラサイン！」

「最悪の事態だ…！」

息子のウルトラサインを確認したウルトラの父とウルトラの母の顔色が変わる。

「まさか… あの宇宙牢獄が破られるとは…！」

ゾフィー、マン、セブン、そしてメビウスも動揺を隠せない。

「奴の狙いはプラズマスパークタワーだ！」

「絶対にタワーを守るのです！」

ウルトラの父とウルトラの母はきびきびと指示を出す。

「行くぞー！」

「うむー！」

「はいっ！」

ゾフィーたちは頷き合うと本部から飛び立っていった。

「あなた…！」

ゾフィーたちを見送るとウルトラの母は夫の表情を窺う。

「…私たちはタワーへ向かうぞ」

ウルトラの父はマントを翻し、プラズマスパークタワーへと向かった。

その表情には焦り、動揺、そして哀しみが見て取れた。

警備隊本部は警報音により異様な空気に包まれていた。

特に若い隊員たちは何が起こったのか把握できていない。

「皆、集まってくれー！」

メビウスが若い隊員たちに集合をかける。

「落ち着いて聞いてくれ。宇宙牢獄が何者かによって破られ、ベリアルが脱獄した」

息を飲み、動揺を隠しきれない隊員たち、中には怯えた表情を見せるものもいる。

―ウルトラマンベリアル。

光の国が生んだ唯一の犯罪者で、最恐最悪のウルトラマン。

ベリアルはウルトラの父と同期で、ウルトラ大戦争を生き抜いた歴戦の戦士でもあった。

だが、力に溺れプラズマスパークに手を出してしまい、光の国を永久追放となってしまうた。

そしてベリアルは、レイブラット星人の力を得て故郷へ復讐を果たしに舞い戻った。

―その手に伝説のアイテム、100体の怪獣を操れるというギガバトルナイザーを持って。

ウルトラの父やゾフィーは力の限り戦ったが、ベリアルの暴走は止められなかった。

そこへ現れたのは、伝説の超人ウルトラマンキング。

キングはベリアルを宇宙牢獄へ閉じ込めると、ギガバトルナイザーを炎の谷へと封印した。

光の国ではその悲劇を伝えるため、学校で子どもたちに必ず「ベリアルの乱」の話をする。

力に溺れることの愚かしさ、正義の心を持たない力の恐ろしさを伝えるために…。

―そのベリアルが、光の国を襲ってくる。

警備隊員の間にも、緊張感と恐怖が走った。

「宇宙牢獄へはタロウ兄さんが何人かの警備隊員を連れて行って、現在ベリアルと戦闘中だ。そこで君たちは2つのグループに分かれてもらう…」

メビウスは隊員たちを光の国でベリアルを迎え撃つ戦闘部隊、そして市民の避難誘導をする部隊に分けた。

「ディアナ、君は市民を避難誘導する部隊に行ってもらおうよ」

「え、でも…」

「ディアナ、君は確かに強い。だが相手はあのベリアルだ。しかもギガバトルナイザーを手にしている…。まだ君を行かせるわけにはいかない…」

「分かりました…」

ディアナは頷くと、自分の持ち場に向かった。

—不気味なほど切れ上がった眼。おどろおどろしい色のカラータイマー。

かつて美しい銀と赤の色に覆われていた体は、まるで今の彼の心を表すかのような闇の色と血の色に覆われている。

「帰って来たぜ！」

ぐったりとしたタロウを放り投げるとベリアルはゆっくりとウルトラ戦士へと向かっていく。

それを合図にユリアン、ネオス、マックス、パワード、スコット、チャック、ベス…。

数多くのウルトラ戦士が故郷を守らんと立ち向かっていく。

だがそのウルトラ戦士たちをいとも簡単になぎ倒していき、ついにはメビウス、ヒカリ、ゾフィー、マン、セブンだけとなった。

メビウスとヒカリはそれぞれメビウムブレードとナイトブレスブレードを駆使してベリアルに挑む。

だが、ヒカリは倒されメビウスはベリアルによって宇宙空間へと放り出される。

そしてゾフィー、マン、セブンとベリアルによる激しい戦闘が繰り広げられた—。

「ベリアル！ウルトラ戦士の心を失くしたのか！」

ウルトラの父—ウルトラマンケンがタワー内に進入したかつての親友・ベリアルに訴えかける。

「ウルトラ戦士の心なんて何万年も前に捨てたよ… 俺は宇宙最強の

「!？」

「んのやろっ!!」

ゼロは力任せにレオを投げ飛ばす。

レオは巨大な岩に激突し、地面に落ちる。

優越感に浸っていたゼロだが、直後あることに気づき血の引いた顔で落ちていく岩に走り寄る。

起き上がったレオが目を凝らすとゼロの足元には小さな、小さな命――。

「…あぶねーだろ、あっち行ってな」

ゼロは巨大な岩の塊を支えながら足元のピグモンに向かってぶっきらぼうに言う。

そして岩を遠くへ投げ飛ばすと、姿勢を低くする。

「…うろちよろしてんじゃねーよ」

ピグモンは嬉しそうに一声鳴くと、ピョンピョンとどこかへ跳ねていった。

ゼロはピグモンを見送ると、再びレオと対峙する。

「さあ、来い！今度こそぶっ飛ばしてやるぜ！」

「待てー！」

「なんだよ、降参かよ？」

珍しく待てと言うレオに、やる気満々のゼロはもう降参かと呆れかえる。

「お前は今、その小さな命を助けたな？」

「それがどうかしたか？」

「…」

「ごたごた言ってねーで、勝負付けようぜ…」

苛立ち気味のゼロを落ち着かせようとレオが口を開きかけたが、それよりも早くゼロの名を呼ぶ人物が現れる。

「…ゼロ」

神々しい白銀のマントを纏い、音もなく降りてきたのは、伝説の超人でありゼロの修行を静かに見守っていたウルトラマンキングだった。

「覚えているか？ウルトラの星を追放された日のことを…」

「そんなもん、思い出したくもねえな！」

キングに対しても突っかかるゼロに、レオは落ち着いた口調で話しかける。

「あの時、セブンは今のお前と同じことをしたのだぞ？」

「なにっ…？」

「あの頃のお前はまだまだ未熟だった…」

「…」

「もしもセブンが止めなければ… エネルギーコアの巨大な力によってお前は身を滅ぼし、ベリアルのように悪の道に堕ちていたかもしれない…」

—セブンは力を手にしようとした自分を邪魔したのではなく、身を滅ぼしかけた自分を救ってくれた。

ゼロは何とも言えぬ気持ちになる。

あの時は、なぜ邪魔をしたのかとセブンに突っかかった。

所詮、力を持っているものは持っていないものことなど分かっていないのだと恨んだ。

だが、それは間違いだった。

ゼロはキングを見る。キングは静かに頷いた。

突如、空を切り裂き何かが地面に突き刺さる。

レオにとっては師のトレードマークである、それ。

「アイスラッガー…！」

ゼロは駆け寄り地面からそれを引き抜く。

「どうして… セブンのアイスラッガーが？」

キングがアイスラッガーに手をかざす。直後、キングの表情が険しいものとなる。

「…『ベリアルが復活し、怪獣墓場で暴れている』」

キングがセブンからのメッセージを告げると、レオとアストラ、そしてゼロの表情も衝撃の色に染まる。

だが、ゼロにとっての一番の衝撃はその後のキングの言葉だった。

「セブンは息子であるお前に助けを求めている…」

—今、何て？

セブン… 息子… お前…？

「息子って… セブンが…俺の親父ってことか…？？」

ゼロは手にしたアイスラッガーとキングを交互に見つめる。

「時が来るまで、伝えずに置いた…。セブンは大罪を犯したお前を我々に託し、ウルトラ戦士としての過酷な試練を積みさせておったのだ」

バサリ、とキングが両腕を自由にするようにマントを広げる。

「どうやら、[〃]時[〃]が訪れたようだ…」

キングがゼロの胸の上に手をかざすと、テクターギアのロックが解除される。

「ゆけーウルトラマンゼロー！」

レオとアストラも力強く頷く。

ゼロは手にしたアイスラッガーを見つめる。

—セブンが、親父が俺を待ってる。

ぐつと手に力を込め、空を見上げるとゼロは勢いよく飛び立った。その後には、今や必要のないテクターギアだけが残されていた。

ゼロは全速力で怪獣墓場へと向かう。

そして怪獣墓場へと入ったゼロを待っていた光景—。

おびただしい数の怪獣、その前に立つ一人の見慣れぬ光の巨人、岩場の上に立つ5人の地球人、カラータイマーを点滅させ立ち上がることもできないマンとメビウス。

そして、ギガバトルナイザーを持つベリアルの後ろで倒れている紅き戦士は—。

(親父…！)

父・セブンはぐつたりと倒れ、ピクリとも動かない。

—まさか、もう…。

例えようのない怒りがゼロの体を駆け巡る。

ゼロはエメリウムスラッシュを発射し、ベリアルがこれ以上父に近づくことの無いよう威嚇し、光の巨人—ダイナの後ろにいた怪獣を数

体撃破した。

突然の攻撃にベリアル、そしてダイナたちも何事かと攻撃の出所を探す。

そしてベリアルが振り向くと、一人の戦士がセブンを抱きかかえ高台の岩場へと飛び去って行くところであった。

「帰って来たか……！」

ダイナに支えられながら立ち上がったマンは、逞しく成長した義理の甥の気配を感じ取っていた。

ゼロはセブンの身体をそつと横たえる。

気配に気がついたのか、セブンは頭をゆっくりと持ち上げ久方ぶりに見る息子に弱々しくも微笑みかける。

「立派に……なったな……」

愛しい息子の顔に触れようと手を伸ばすも、その手は届かず地に力なく落ちる。

ゼロはアイスラッガーを紅い大きな手にしっかりと握らせる。

多くの星を、多くの人を守って来た手。そして、最後まで自分を守ってくれた手。

「誰だ!？」

ベリアルが未だ正体のつかめない人物に問う。

ゼロはゆっくりと立ち上がる。

震える手を骨が浮き出るほどぐっと握りしめる。

父を倒された怒り、そして大切なことに気づけなかった自分への怒り、悔しさ。

それらがふつつつと湧き上がってくる。

ゼロはベリアルをぎっと見据える。

「ゼロ・ウルトラマンゼロ・セブンの息子だ!」

―若き戦士の伝説が幕を開けた。

ゼロは怪獣軍団を相手に果敢に立ち向かった。

父親譲りの光線技、そしてレオ・アストラに鍛えあげられた宇宙拳法を駆使して、あつという間に怪獣軍団を殲滅した。

「小僧！今度は俺様が相手だ！」

予想外の強さを見せつけられ、苛立ったベリアルがゼロを見据える。

ゼロもゼロスラッガーを両手に持ち、ベリアルと対峙する。

―俺も親父たちがいなかったら、こうなっていたんだ。

こいつは……力に溺れ、何も知らなかったもう一人の俺だ。

「貴様だけは……絶対に許さん！」

「ほぞけ！今ぶっ倒してやるからな！」

ゼロは様々な思いを胸にベリアルに向かっていく。

―その眼に、かつてのような闇はなかった。

第9話 再会

エネルギーコアを手にし、久方ぶりに故郷へと戻ったゼロは変わり果てたその姿に愕然とする。

「なんだよ… これ…」

“光の国”と呼ばれた姿は影も形もなく、あたりは一面雪と氷に覆われている。

ふと地面をのぞき込むと、そこには逃げ遅れたウルトラ族の姿がいくつも見られた。

―皆、生きてんのか？ アイツは…… デイアナは？

ほん、とゼロの肩に手が置かれる。

ゼロが振り返ると、レオがゼロを安心させるように微笑み、頷いている。

ゼロも表情が少し硬いながらも頷いて立ち上がり、プラズマスパークタワーへと向かう。

そしてタワーの最上階に着くと、タロウが守る台座へと向かう。

ゼロがエネルギーコアを台座に差し込むと、眩いばかりの光がウルトラの星を包む―。

突然戻った意識にぼんやりとした頭を振り、タロウが覚醒する。

ゾフィーや他のウルトラ戦士も目覚め、抱き合い、歓喜に沸く。

そんな様子をゼロは一人、タワーの上から眺めていた。

「ゼロ…」

不意に呼ばれ振り返ると、そこには筆頭教官であるタロウが立っていた。

「ゼロ、君がこの国に光を取り戻してくれたんだね…。ありがとう」

タロウは心からの感謝を口にするが、ゼロの表情は晴れない。

「…でも、全部取り戻せたわけじゃねえ」

ゼロはタロウから目をそらす。

タロウの眼は、従兄弟であるセブンによく似ている。

ゼロはまだそれを知る由もないが、なんとなく父に似ていると感

じ、父を守れなかった罪悪感から目を合わせられなかったのだ。

—親父は… もういねえ。俺はまた大切なものを失ったんだ。

「ゼロ—」

「…じゃあな」

ゼロは踵を返すと、そのまま飛び去っていった。

「…母さん」

タロウはいつの間にか背後にいた母に呼びかける。

「…セブン兄さんを頼みます」

ウルトラの母は静かに頷くと、足早にその場を立ち去った。

ぐらりと揺れた体を、誰かに支えられる。

「大丈夫か!?!」

地面に着く前にディアナの体を支えたのは、ブルーの体にスターマークが特徴的なウルトラ兄弟十一男—ウルトラマンヒカリだった。

「あ、ありがとうございます…」

ディアナはヒカリの手を借り体勢を立て直すと、あたりを見回す。市民たちは歓喜に沸き、光の国はいつも通りの美しい姿だった。

「いったい何が起きたんでしょう…」

「分からん… だが先ほどよりはいい状況だということは確かだな…」

ヒカリはあたりを見回し、状況を把握する。

「…ん?」

ヒカリがテレパシーを受信する。

そしてその表情は喜びに満ちたものへと変わっていく。

「そうか…! よかった… よかった!」

「どうしたんですか、ヒカリ博士?」

「ディアナ、ゼロが帰って来たぞ!」

「え…?」

「ゼロがベリアルを倒し、エネルギーコアを持ち帰った! 無事帰還したぞうだ!」

やっこのことでヒカリの言葉を認識したディアナは声を震わせる。

「ゼロが… 本当に… 帰って、来たんですね？」

「ああ、夢じゃない！現実だ！」

銀色の瞳から大粒の涙がいくつもこぼれ落ちている。

ヒカリは落ち着かせるようにディアナの背をそつと擦る。

しばらくして、落ち着きを取り戻したディアナは涙を拭う。

「落ち着いたか？」

「はい、ありがとうございます…」

「そうか… すまんが、俺は今から警備隊の本部へ戻らなければなら
ない。…君はどうする？」

「私は… ゼロを探します。会えるかどうかは分かりませんが…」

一目、姿だけでも見たい。成長したゼロの姿を。

「分かった。会えるといいな、ゼロに」

「はい！」

別れを告げ、ヒカリは警備隊本部に、ディアナはゼロを探しに街中
へと駆けて行った。

ゼロは、広場に一人佇んでいた。

目の前を小さな子どもを連れた夫婦、何人もの友達に囲まれて歩く
人たちが通りすぎていく。

ゼロは視線を落とし、溜息をつく。

―その背後に静かに降り立つ、影。

気配を感じ、はっとして振り向くと、そこには自分とよく似たス
ラッガーと眼を持つ戦士が立っていた。

「さすが、俺の子だな」

セブンは柔らかな微笑みで激戦を戦い抜いた息子を迎えた。

「…親父」

ゼロは父・セブんに歩み寄る。

生きていたのか。

どうして俺を一人にしたんだ。

なぜ、いつまで経っても名乗り出てくれなかったんだ。

言いたいことがたくさんあったのに、どうでもよくなった。

父の逞しい腕の中に抱きしめられ、ゼロはセブンが生きていたことの喜びを、

親子として再び出会えたことの喜びを噛みしめていた。

そしてセブンも、息子が逞しく成長し、親子として再会できたことの幸せを感じていた。

光を取り戻した、ウルトラの星。

その中心広場でキングの演説が行われた。

その内容は全宇宙の平和を守るウルトラ戦士を鼓舞する、素晴らしいものだった。

ウルトラ兄弟やゼロも演説に聞き入っていたが、ただ一人―セブンだけは演説よりも息子の横顔を嬉しそうに眺めていた。

キングの演説が終わり、人々はそれぞれ帰路に着く。

「…ゼロ」

「なんだ、親父…？」

「…帰るか」

セブンにそう言われ一瞬何のことか分からなかったが、セブンの少し緊張したような微笑みにその意味を察すると、こちらは照れたように小さく頷く。

そして並んで歩こうと、一步を踏み出した時だった。

「ゼロ…！」

自分の名を呼ぶ懐かしい声に、ゼロは素早く反応しあたりを見回す。

そして、見つけた。

透き通るような銀色の瞳で自分を見つめる、一人のウルトラ族の女性。

シルバーの体の中心で輝くのは、六角形のカラータイマー。それを支えるように入る三日月のような赤いライン。

最後に会った時よりも、幾分大人びて見える幼馴染。

これだけの人込みで目的の人物を探すのは容易なことではなかっただろう。

ディアナは少し息を切らしている。
そしてゆつくりと自分に近づいてくる。

「ディアナ…」

ゼロは思わず半歩下がる。

—何から言えばいい…。

言わなければならぬはずのことがたくさんあったのに、いざ本人を前にすると何も言えなくなる。

いや、言葉にならないと言った方がいいだろうか。

罪悪感、軽蔑されるのではないかという恐怖から言葉に詰まってしまふ。

—とにかく、謝らなければ。

ゼロは口を開く、が。

「うおっ！」

突然、体のバランスが崩れる。

修行で鍛え抜かれた体幹で何とか体勢を保ち、何事かと視線を下げるとディアナが抱き着いているのが見えた。

「お、おいーディアナ…！」

周りにはまだ多くの人がある。何よりもすぐ後ろには父・セブンがいるのだ。

ディアナを引き離そうと彼女の両肩に手をかけるが、震えていることに気がつき、声をかける。

「おい、どうしたんだよ…！」

「…よ、かつ、た。ゼロ…。ゼロ、だよね…！」

泣いている。肩を震わせ、言葉に詰まるほど泣いている。

「ほんと、に、よか、った…。ゼロが…帰って、来てくれて…！」

ディアナはゼロから少し体を離すと涙を拭う。そして、

「おかえりなさい、ゼロ！」

眼に涙の跡を残しながらも、輝くような笑顔で幼馴染を迎えた。

—ああ、やっと帰って来たんだ。

「…ただいま、ディアナ」

ゼロも柔らかな笑顔で、そう答えた。

そんな2人の様子を、セブンは穏やかな表情で見守っていた。

静かで、少し気まずい時間が流れる。

—ここに誘ったのは自分だ、自分から話しかけなければ。

ベンチに腰掛けて、数分。

ゼロは一人、謎の焦りに襲われていた。

ゼロは「どうしても話がしたい」と言っただけで、ディアナを誘い、中心街近くにある公園に来ていた。

中心街の近くにあるといっても、ここは静かで今はゼロとディアナしかない。

セブンには申し訳ないと思ったが、驚くことにセブンは嫌な顔一つせず「行っておいで」と笑顔で送り出してくれた。

その父のためにも、話ができなかつたなんてことにはしたくない。

「……」

ゼロは、隣に腰掛けている幼馴染を盗み見る。

ディアナは何も言わず、ただ空を眺めていた。

吸い込まれそうな銀色の瞳、艶やかな肌。

戦士として鍛えられてはいるが、自分とは違ってしなやかな体つき。

昔から知っているはずなのに、久しぶりに会うせいとその姿に目が惹きつけられてしまう。

…それとも、自分がディアナに対する想いを自覚したせいだろうか。

(…いやいや、それよりも！)

話をするためにここへ来たのだ。ディアナを眺めてドキドキするためではない。

ゼロは自分を落ち着かせるようにゆっくりと息を吸う。

「…あのさ、ディアナ」

「なに、ゼロ？」

「…ごめん」

やっこのことでゼロは自分の想いを口にする。

「謝って許されるなんて思ってたねえ…。でもどうしても伝えたくて…」

ゼロは自分の想いを綴っていく。

― 一番大切な想いは、まだ秘密にして。

罪を犯してしまったことへの懺悔、そばにいてくれたことへの感謝…。

ディアナは静かにゼロの話を聞いていた。

「お前はずっと俺のそばにいてくれたのに、それに気づかず辛く当たって、目先のことに捕らわれてプラズマスパークに手を出して…

ホント最低だよな…」

ゼロの声がだんだんと小さくなっていく。

「それでさ、もし…許してくれるのなら、また昔みたいに… お前のそばにいて、一緒に夢を追いかけていいか？」

ディアナは静かにゼロの金色の瞳を見つめる。

ゼロもディアナの銀色の瞳を見つめ返した。

「当たり前じゃない」

「え…」

ディアナからの返事にゼロは小さく声を漏らす。

「私がここまで頑張れたのは、ゼロの応援があつたからだもん。ゼロがいなきゃ、私は夢を見ることを忘れてたかもしれない…」

ディアナも自分の想いを打ち明けていく。

ゼロの応援が心の底から嬉しかったこと、ゼロが罪を犯してしまつたとき、あまりの絶望から抜け殻のようになってしまったこと。

ウルトラ兄弟から聞いたゼロとセブンの関係。それに対して強く言ってしまったこと。

そして、ゼロが帰って来るまでにもっと強くなりたいと思つた理由…。

ゼロも黙ってディアナの話を聞いている。

幼い頃の、さりげない応援。

それがディアナにどれだけの力を与えていたのかなんて、ゼロは考えたこともなかった。

「…許して、くれるのか？」

「うん。これからも私のそばにいてほしいし、また一緒に夢を追いか
けよう？」

ふわり、と微笑む幼馴染。

いつかゼロの心臓を鷲つかみにした、変わらないあの笑顔。

「ああ…！」

ゼロは力強く頷き、強く誓った。

—もう二度と、この手を、この笑顔を離しはしない。

過ちを犯したあの日と同じように、プラズマスパークの光は美しく
輝いていた。

第10話 優しすぎるお節介

ベリアルルの事件から、1週間後。

光の国では破壊された街の復興作業に追われていた。

ウルトラ兄弟をはじめとする宇宙警備隊はもちろんのこと、宇宙保安局や銀十字軍、科学技術局の職員も忙しく働いていた。

そして、ゼロ。

ゼロはベリアルルを倒したものの、正式に光の国への帰還を認められなかったわけではなかった。

そのためには光の国の上層部だけでなく、国民にも理解を求める必要があった。

大隊長であるウルトラの父、隊長であるゾフィー、父親であるセブンはもちろんのこと、怪獣墓場でゼロの活躍を間近に見たマンやメビウス、そしてゼロを導いたレオ・アストラ兄弟もメディアに出てゼロの“光の国帰還”を訴えた。

そのおかげで、ゼロは光の国への帰還を正式に認められ、現在は宇宙警備隊の一員として活動している。

一日の仕事が終わり、警備隊本部を出たゼロは街中で目的の人物を見つける。

「メディアナー！」

名を呼ばれ、振り返った幼馴染に駆け寄る。

「ゼロ…」

「よ！今日の仕事、もう終わったのか？」

「うん。ゼロも終わったの？」

「おう！まったく、今日も大変だったぜ…」

「お疲れさま、ゼロ」

「おう。お前もな」

お互いに労いの言葉をかけ合い、今日の出来事について話し合う。

自分の声に応えてくれる人がいること。他愛もない会話ができること。

2人はそんな当たり前の日々をまた共に過ごすことができる喜びを噛みしめていた。

だが、ゼロには一つ不満があった。

「なあ、お前この後どうするんだ？」

「ん？家に帰ろうかなって… 何？」

「いや、予定がないんだったら一緒に飯でも食わねえかな、って…」

「…それよりも、セブンのところには行ったの？」

(…またかよ)

ゼロは光の国へ戻ってから、一日の仕事が終わると必ずディアナに声をかけるようにした。

これまで辛く当たってしまったぶんを埋め合わせしたいという罪滅ぼしに近い感情もあったが、何よりも大好きな人と少しでも多くの時間を過ごしたいという思いがあった。

そして幾度と食事などに誘ったりしていたのだが、その度に必ずこう返されたのである。

『セブンのところには行ったの？』

最初は言われるままセブンのところに行っていたのだが、誘うたびにこう言われるとさすがに嫌になってくる。

ゼロだってセブンのことをなおざりにしているわけではない。

仕事を手伝ったり、一緒に食事をしたりしてやっとなにをするのできた家族としての時間を大切にしているし、ゼロもそんな時間を心地よく感じている。

だが、ゼロにとってはディアナとの時間もそれに匹敵するぐらい大切な時間なのだ。

(なんだよこいつ… 俺が帰って来るの待ってたんじゃないのかよ…)

ゼロは募っていた不満を露わにする。

「ゼロ？」

「なあ、お前ってさ、俺が帰って来るのを待ってたんだよな？」

「え… うん、当たり前じゃない…」

「じゃあなんで俺のこと避けてんだよ？」

「…避けてなんかないけど」

「避けてんじやねえかよ」

「なんでそう思うのよ」

「俺が誘ったっていつも『親父のところには行ったのか』ばかりじゃねえか」

「それは—」

「それらしい理由付けて俺のこと避けてんじやねえかよ！」

「……」

ゼロの鋭い眼差しにディアナは思わず目をそらしてしまう。

「…ああ、そうかよ。じゃあ、お前の言うとおりにさせてもらうよ」

視線をそらし、答えようとしないうちに幼馴染に苛立ったゼロはそのまま踵を返すと宇宙警備隊本部へと戻っていった。

そのゼロの背中をディアナは何とも言えぬ表情で見送った。

「終業時刻を少し過ぎた、宇宙警備隊本部。」

荒々しく執務室に入って来た息子に、セブンは思わず手を止め固まる。

そんなセブンの傍らで同じような表情で固まるレオ。

ゼロはというと、応接セットのソファアームにセブんとレオに背を向けた状態で寝ころび、黙り込んでいる。

「…ゼロ？」

セブンがおずおずと声をかけるがゼロは答えない。

セブんとレオは顔を見合わせる。一体何があったというのか。

つい先ほどまで今日の仕事を一所懸命こなしていたはずだ。

朝食を一緒にした時も、警備隊の仕事を手伝ってもらった時もなんら機嫌の悪い様子はなかった。

『…レオ、何か心当たりはあるか？』

『いえ、全く…。というか俺は今日初めてゼロに会ったんですが…』

セブんとレオはテレパシーでゼロの突然の機嫌の変化について緊急会議を行う。

その時、セブンの執務室に訪問者が現れた。

「失礼します、セブン兄さ……ん」

執務室に足を踏み入れたアストラは部屋の異様な空気に気づいた。ソフアーに籠城を決め込んだ弟子と、そんな弟子を困り果てた顔で見つめ恐らくテレパシーで会話しているであろう2人の兄。

アストラはゼロを気にしつつも、兄たちの元へ歩み寄り小声で話しかける。

「……どうしたんですか、ゼロ」

「いや、私にもさっぱり分からん……」

「入って来た時にはすでにひどく不機嫌な状態で……。セブン兄さんが声をかけたんだが反応なしだ」

「……何かしたんじゃないんですか?」

「それが…… 全く心当たりがない」

「俺も今日初めてゼロに会ったから、思いつかん」

すっかり困り果てた表情の兄に代わってアストラがゼロに声をかける。

「ゼロ」

「……」

「黙ってちや、分かんないよ」

「……」

ゼロは答えない。

そんな弟子の様子を見てアストラはピンとくる。

「……ディアナ、だね?」

ゼロはぎくりとし、ゆっくりと体をこちらへとむける。

その表情はまるで拗ねた子どものように、アストラは思わず笑いそうになる。

「……何で分かったんだよ」

「んー なんとなく」

ゼロは体を起こすが、むっとした表情だ。

「ほらほら、セブン兄さんやレオ兄さんが心配してるよ」

顔を上げると父や師が心配そうに見つめている。

「……めん」

「謝らなくていい、ゼロ。何があつたのか話してくれないか？」
セブンが優しくゼロに問う。

息子を気遣う父の優しい声と表情に、ゼロはぼつりと漏らす。

「…ディアナが俺のこと避けてる」

「…なんだって？」

予想外の答えに、セブンは思わず聞き返してしまう。

「アイツ、最近俺のこと避けてんだ…」

「だが、昨日も一昨日もディアナに会つたと言つていたじゃないか」
「会つたのは会つたけど…。俺が『この後予定あんのか？』って聞いた
ら『特にない』って言うから飯とか手合わせに誘つてみたけど、一度
も応じてくれたことねえ…」

アストラがレオを見、レオはセブンへと視線を移す。

セブンも訳が分からないといった表情で首を少し傾げる。

あれほどまでにゼロの帰りを心待ちにしていたというのに、一体ど
うしたのだろうか。

「なんで避けるのか、理由を聞かなかつたの？」

「聞いたけど…『避けてなんかかない』って言つてた」

アストラからの問いに、ゼロはますますむっとした表情で答える。

「しかし…それは避けてると勘違いされてもおかしくはない態度だ
な…」

レオも少女の不可解な行動に腕を組んで考え込む。

「ゼロ、ディアナが断るときなんて言つてるの？」

「…『セブンスさんのところには行つた？』って。いつもこれだ」

セブンがピクリと反応する。

「ゼロ、ディアナはいつも…そう答えるのか？」

「うん」

「…そうか……」

セブンは椅子に背を預けると、深い溜息を吐いて天井を見上げる。

「まったくあの子は…」

「何か心当たりでもあるんですか？」

「…まあな」

セブンは立ち上がるとゼロの元へと向かい、視線を合わせるようにして跪く。

「ゼロ」

ゼロが顔を上げると、暖かな金色の眼差しが自分を見つめていた。「もう200年以上前になる…。あの子が宇宙警備隊特別推薦枠での入隊試験を控えていたのは覚えているか？」

「…うん」

「ふがいない私たちに代わって幼い頃からお前をそばで支え見守ってくれていた彼女に、私たち兄弟はある恩返しをしたいと考えた…」

「恩返し…？」

『ウルトラ兄弟による入隊試験対策特別トレーニング』： 私たちが代わる代わる特別教官となり、ディアナにトレーニングを行った。だが、正直恩返しというよりも償いの気持ちの方が強かったように思う。彼女の手から大切な幼馴染を奪ってしまったも同然だったからな…」

「……」

「だからどうしてもこの申し入れを彼女に受け入れてほしかった…。そうでもしなければ特に私が耐えられなかった。私たちがこの申し入れを受け入れてほしいと言ったら、ディアナはある交換条件を出してきた…。なんだか分かるか？」

ゼロはしばし考えた後、ゆっくりと首を横に振った。

「…分かんねえ」

『ゼロが一人前の戦士として帰ってきたら、父親の名乗りをして、親子としてきちんと向き合ってほしい』： そう言われたんだ」

「！」

ゼロは思わず息を飲む。レオとアストラも驚愕の表情になる。

「ゼロ、あの子は優しすぎる…。いつだって自分よりも誰かの幸せを考えているんだ。私がお前に父親だと名乗り出る勇気をくれたのもあの子だ…。今回のこともお前のことが嫌で断っていたわけではないだろう…。恐らく、私とお前がやっと手にするのできた家族としての時間を大切にしてほしいと思ったんだ。…知っているだろう

？あの子には…家族がいない。それを失うことの辛さや哀しみをよく知っている…」

「…そう、だったのか」

どこまでも優しすぎる幼馴染。ゼロはディアナの想いに胸が熱くなった。

「でも…俺はアイツとの時間も大切にしたい…。ディアナは俺の大切な…幼馴染だ」

「そうだな。こう言っただけは何だが…優しすぎるお節介だな」

「…俺、ディアナともう一回話してくる」

ゼロは立ち上がると、執務室を出ていこうとする。

「ゼロ、待ちなさい」

「なんだ？」

「今日の夕食にディアナを招待してきてくれないか？私がぜひ、と言っているからと言って…。どうだ？レオ、アストラ、お前たちも来るか？」

「じゃ、お言葉に甘えて！」

「おいおい、アストラ…」

「いいじゃない！それに僕たちディアナって子とあんまり話したことないしさー」

「だがなあ…」

「よし、決まりだな」

「セブン兄さん！そんな勝手に！」

「…嫌なのか？」

「いえ、そういうわけでは」

「なら、いいだろう？ゼロ、レオとアストラも追加だ」

「よろしくお願いまーす」

「…では、お言葉に甘えて」

「分かった！じゃ、ディアナのところ行ってくる！」

入って来た時とは打って変わり、笑顔でゼロは部屋を出て行った。

「まったく世話が焼けるよ…好きななら好きっはつきり言えばい

いのに」

ゼロが出て行った後、アストラが放った言葉にセブンは盛大にお茶を嘔き出した。

驚く獅子兄弟をよそに、激しく咳き込むセブン。

「ア、アストラ… 今、何て言った…?」

咳き込んで涙目のセブンがアストラに尋ねる。

「え、何がです?」

「誰が、誰を好きだつて?」

「え… え!?もしかして気づいてなかったんですか?」

「どういうことだ、アストラ?」

さっぱり分からんといった表情のレオがさらに尋ねる。

「:ゼロがディアナのこと、好きってこと」

「:そりゃあ、嫌いなはずないだろう。幼馴染なんだし:」

「いや、そうじゃなくてね、レオ兄さん:」

真面目すぎる故にこういうことには非常に鈍い兄に事細かに説明する。

「ゼロはディアナのことを一人の女性として意識したってこと。まあつまり、ゼロがディアナに恋をしたってことだね」

—恐ろしいほどの沈黙。そして、

「なんだとおおおおとおおおおとおおおお!」

同時に驚きの叫びをあげる兄2人。そんな2人に驚く弟。

「本当か、アストラ!」

「というか、いつ知ったんだ!」

鬼気迫る表情で詰め寄る2人にアストラは思わずたじろぐ。

「ちよ、ちよつと待つて:」

「父親の私でさえ知らない情報をなぜ知っているんだ…!」

「それに実の兄であり、ゼロの師でもある俺にも報告なしとは…!」

「だって気づいていると思っただんですよ!あそこまで分かりやすいのに!」

ディアナのことになると明らかに態度が分かりやすくなるので、気がつかない方がおかしいとアストラは抗議する。

そんな執務室にマンが入ってくる。

「…なんだ騒々しい」

「あ、マン！いいところに来てくれた！」

「マン兄さん、聞いてくださいー！」

セブンとレオはこれまでの経緯を説明し、マンに援護を求めた。

「…なるほど」

マンは2人の言い分を聞き終わると、アストラに向き直る。

「アストラ、お前はいつそれを知ったんだ？」

「K76星での修行中です。確か修行に入ってから100年経ったぐらいの頃かな…」

「え… そんなに前なのか…」

レオが小さく声を漏らす。

「ほら、途中からなんかゼロ雰囲気変わったでしょ？」

レオは必死に記憶を呼び起こす。そういえば修行に対する態度が変わったような…

「…確かに」

ううむ、とレオは腕を組む。

「弟子の変化に気づけなかったとは… まだまだ修行が足りん…」

「修行とかでどうこう出来る問題ではないと思うぞ、レオ…」

「まあ、これでやっとお前たちも気づいたというわけか…」

「ちよつと待て、マン。やっとなってどういうことだ？」

思わずレオにツツコミを入れたセブンは、マンの言葉に反応する。

「…ウルトラ兄弟で気づいていないのは、お前たちを除くとメビウスだけだ」

呆れ顔のマンにそう言われ、セブンとレオは愕然とする。

「えーじゃあマンも気づいていたのか!？」

「当然だ。だが、恐らく一番早く気づいたのは80だろうな。80はウルトラ小学校で2人を受け持っていたからな」

「80め… なぜそれを早く言わん…」

「それではお前のためにならんだろう。心の変化に気づくのも父親としての大切な役目だ」

唸るような声で言うセブンにマンがそう言うと、セブンはうっという表情になる。

(まあ、それ以外にも理由はあるんだがな… それを言うと80の身が危険だ)

「ゼロよ… いつの間にそんなことになっていたんだ…。私は何をしてやればいい…」

セブンはうろろろと執務室を歩き回る。

「余計なことはせずに、静かに見守ってやることだな。恋愛というものは当事者以外が不必要に絡むと面倒なことになる」

マンはセブンの親バカが暴走して甥っ子の恋物語が面倒な展開にならないように釘を刺した。

ゼロにそっくりのむつとした表情でマンを見たセブンだったが、ふと表情が変わる。

ゼロからのテレパシーだ。

セブンの表情が緩む。

「…ゼロはなんて言ってた？」

テレパシーを終えたセブンにマンが問いかける。

『『ディアナを連れて家に帰る』だとさ』

「ならセブン兄さん、急いで家に向かわないと…」

「そうだな… じゃあマン、俺たちは失礼するよ」

セブンと獅子兄弟はマンに挨拶すると、足早に執務室を出ていく。

マンは弟たちを見送ると、若い2人の恋物語の展開に思いを馳せながら家路についた。

第11話 アナザースペースへ

ベリアルルの事件から3か月後。

光の国に新たな脅威が迫っていた…

「未確認物体が近づいているだ?!」

ヒカリが持つてきた報告にゾフィーは思わず立ち上がる。

「ああ…。恐らくどこかの飛行艇か何かだろうが、こちらから呼びかけても一切応答がないし、進路を変える様子がない」

「それで…」

「きっかり15分後にこの星に不時着する。しかもとてつもないマイナスエネルギーを感じしている」

「分かった、すぐに緊急警戒態勢を取る！」

ゾフィーはそういうとすぐにウルトラ兄弟を招集した。

光の国に不時着したのは数体の巨大ロボット。

宇宙警備隊を始め、ウルトラ戦士たちがその巨大ロボットに立ち向かう。

だが、巨大ロボットはその攻撃をもともせず突き進んでいく。

—そんなロボットの前に立ちはだかったのは。

特徴的な2本のスラッガー。切れ上がった金色の眼。

親指で上唇を拭うその表情は、どこか自信ありげなもの。

ウルトラマンゼロは巨大ロボットにゼロスラッガーを放ち、その腕を切り落とす。

混乱するロボに反撃する機会を与えず、ウルトラゼロキックでロボを粉碎する。

「へへっ…。呆気なかったぜ…」

ゼロは次の場所へ向かおうとするが、ロボの残骸の中からゆらりと影が立ち上がる。

「…ダークロプスタイヨリホウコク、ヒカリノクニヲカクニン…」

ゼロそっくりのロボット、ダークロプスが姿を現す。

「ダ、ダークロプスだ?!」

かつて侵略目的のためサロメ星人によって操られていたダークロプス。

ゼロや地球人レイたちとの死闘の末、サロメ星人の本拠地であった星を巻き込んで自爆したはずだった。

「…ウルトラマンゼロロカクニン。ハカイスル。」

ダークロプスがゼロを見据える。どうやら、ゼロが目的のようだ。「てめえら、誰に送り込まれた!？」

3体のダークロプスと戦いながら、ゼロは一体何者が送り込んできたのかを探ろうとする。

だが、いくらゼロでも3体を相手取るのは難しかった。

2体に両腕を抱えられ、動くことができない。ゼロは拘束から逃れようと身をよじる。

「離せえ！」

1体のダークロプスが光線の構えを取る、が。

「デュワー！」

紅き戦士の渾身の体当たりを喰らい、体勢を崩すダークロプス。

「ゼロ！」

「親父……！」

セブンは息子が無事であることを確認すると、ダークロプスに立ち向かっていく。

ゼロも宙返りで拘束を解くと、エメリウムスラッシュを放ち2体のダークロプスを相手取る。

だが、この間戦った個体よりもはるかにパワーアップしている。

気づけばセブんとゼロは背中合わせの状態で3体のダークロプスに囲まれていた。

「……」

「……」

息をすることさえも躊躇するような緊張感。

親子は全神経を集中させ、次の相手の動きを予測する。

「デュワー！」

「シャアッ！」

3体のダークロプスが放った光線技を息の合った跳躍でかわし、これまた息の合った動きでスラッガーを放つ。

セブン一族が得意とするウルトラ念力でスラッガーを操り、親子のコンビネーション技でダークロプスを粉碎する。

炎の中から攻撃を免れた1体のダークロプスが飛び立っていく。

ゼロはゼロスラッガーを胸のところに構えるとそこに膨大なパワーを集める。

「逃がすかよっ！」

目の前に現れた敵の姿に思わず目を疑う。

特徴的な2本のスラッガー、肩から腕を覆うプロテクター。

だが、その眼に金色の輝きはなく、機械的で冷たい色。

呆然としているとタロウから喝の入った声がかげられる。

「ディアナ、姿に惑わされるな！戦うことに集中しろ！」

「……」

その声によって現実に取り戻されたディアナは、ダークロプスの攻撃を間髪でかわす。

「セアッ！」

ムーンプリズムシユートを受けたダークロプスは爆破し雲散霧消する。

その時、ディアナのはるか頭上を1つの影が横切る。

（あれは……！）

1体のダークロプスがどこかへと飛び去っていく。

このまま逃がしてしまえば、敵にこちらの様子を知られてしまう恐れがある。

だがその時、天を切り裂くように青く輝く光線が発射され、逃げようとしたダークロプスを直撃する。

（あれはゼロの……）

ディアナはほっと息を漏らす。

だが、ダークロプスの残骸を見、ディアナは不安に駆られる。

ゼロから聞いた話では、ダークロプスはある惑星を巻き込んで自爆

したはず。

(いったい誰がこんなことを…)

宇宙警備隊本部のとある部屋。

ウルトラ兄弟を始め、ウルトラの父、ウルトラの母、そしてゼロが集まっている。

マイナスエネルギーのスペシャリストである80がダークロプスの残骸を解析した結果、このエネルギーは別の宇宙―アナザースペースから発信されていることが分かった。

―つまり、あのダークロプスたちは別の宇宙から光の国を侵略する目的で何者かによって送り込まれたということ…。

ウルトラ兄弟たちの顔色が変わる。

一体何者が送り込んできたのか、早急に調査しなければ再び襲撃してくる可能性がある。

だが光の国のエネルギーを集めても、別次元の宇宙へと派遣することができるのはたった一人。

その時、ゼロが進み出る。

「俺が行く。その謎は、俺が解く!」

「ゼロ…!」

セブンが「早まるな」とでも言うようにゼロを落ち着かせようとする。

だがゼロは引き下がるつもりはなかった。

かつて倒したはずの敵が力をつけて再び自分の前に現れた。

それが意味することは―。

(何かが起きてる… 俺の知らないところでよくない何かが…)

「この調査はゼロに任せよう。それが運命かもしれない…」

ウルトラの父はゼロをアナザースペースに派遣することを決定した。

次の日、中央広場に多くのウルトラ戦士が集まった。

「ゼロ」

「親父…」

「これを持っていけ」

セブンは出発前の息子にあるものを手渡す。

ゼロはセブンからそれを受け取ると形を変形させ、左腕に装着する。

ゼロの左腕には、3つの青いクリスタルを持つブレスレットが光っていた。

「このウルトラブレスレットには、特別なプラズマスパークエネルギーが込められている。帰るときの道しるべとなるだろう…。予備エネルギーとしても使うことができる」

「…親父は心配性だな」

父の様子に任務前にもかかわらず、嬉しさを隠せないゼロ。

そんな息子に、セブンは表情を変えずに重要なことを告げる。

「…だが、使えるのは3回だけだ」

「3回か… 充分だ」

「ブレスレットを使ったことは、あのプラズマシンクロ装置を通じて我々も知ることができる…」

タワーの上部を見上げると、ゼロのブレスレットについているのと同じような青いクリスタルが輝いている。

恐らくブレスレットを使うと、その分だけクリスタルの光が消えていくのだろう。

「ゼロ…」

父の声の変化にゼロはそちらへと顔を向ける。

「忘れるな。私も皆も、いつでもお前のことを想っている…。お前は一人じゃない」

温かな眼差し。力強くも優しい言葉。

「ああー」

ゼロは照れを隠しきれない笑みを浮かべると、真っ直ぐ父の顔を見つめる。

「じゃあ、行ってくるー」

ゼロはダーククロプスのコアを手にとると力強く飛び立った。

「ウルトラマンゼロに、我らの光を！」

ウルトラの父が威厳のある声でそういうと、多くのウルトラ戦士たちが手を掲げてゼロに光を送る。

ゼロは自分に光を送ってくれる多くの仲間たちを見回す。

(あれは……)

中央広場で発表された、ゼロのアナザースペースへの派遣。

突然のことに驚きを隠せなかったが、ゼロ自身が希望したと聞いてゼロが戦士として自分にできることをやろうとしている姿が嬉しかった。

だが、先ほどとは比べ物にならない激しい不安がダイアナを襲う。

—アナザースペース。ウルトラ兄弟も未だたどり着いたことの無い未開の宇宙。

その未開の宇宙から力をつけて再びゼロを狙い、光の国を襲撃してきたダークロプス部隊。

(なんだか…… とてつもないことが起きてるんじゃないかしら……)

もしゼロの身に何かあったら……

もしアナザースペースから帰還できないということになったら……

息もできぬような不安と恐怖に胸をぐっつと締め付けられる。

けれども今は見送ることしかできない。この件において自分があまりに無力なのは分かっている。

(今の私は…… あなたに光を送ることしかできない……)

「ウルトラマンゼロに、我らの光を！」

ウルトラの父の威厳のある声を合図に、次々とウルトラ戦士たちがゼロに光を送る。

ダイアナもゼロを見つめて手を掲げ、光に精一杯の想いを込める。

—ふと、ゼロと目が合ったような気がした。

ゼロの目に映ったのは、今にも泣きだしそうな顔をして自分に光を送る想い人の姿。

(なんて顔してんだよ……)

思わずゼロはふっと笑ってしまふ。

恐らくディアナのことだから、「こんな時自分は役に立たない」と自分自身を責めているのだろう。

けれどもゼロにとってはこうやって自分を見送ってくれること、そして何よりも自分の帰りを待っていてくれることが嬉しいのだ。

(必ず帰って来る… だからそんな顔するな)

ゼロは自分を見つめる想い人に、そう力強く頷いて見せた。

ゼロが一瞬、笑ったように見えた。ちよつと困ったような、そんな笑みだった。

(え……)

ゼロが力強く頷いた。

ディアナも笑顔で頷く。

ゼロが赤い光に覆われていく。

—どうか、どうか無事に帰って来て。

ディアナの手からひととき強い光が放たれた後、ゼロは赤い光球となり、旅立っていった。

第12話 旅立ち

マグカップが落ちて、砕け散る。

「おい、大丈夫か!？」

心配する声もはつきりと認識されることなく、ぼんやりと頭に響く。

「…おい、ディアナ?」

はつとして現実に戻ると、怪訝な顔をして自分を見つめる幼馴染。

「え…あ、ゼロ?」

「…お前ホントに大丈夫か?」

「へ、あ、う、うん…」

「…?」

「あ、ごめん… 破片、私が拾うから…」

—ゼロがアナザースペースから帰還した、その日。

ゼロは本部での報告を終えると、その足でディアナの家に向かった。

笑顔で自分を出迎え、労いの言葉をかけてくれた想い人にゼロはアナザースペースでの出来事を話した。

始めはいろいろな表情を見せながら熱心に自分の話を聞いていたディアナだったが、ある話に話題が移ったとき動きが止まり、あげくマグカップを取り落としたのだ。

粉々になったマグカップを拾うディアナの表情は固い。気のせいか、手も少し震えている。

片づけを終えたディアナがソファアーへと戻ってくる。

「…ごめん、何の話してたっけ?」

さっきの話嘘だよ、とでも言いたそうな表情にゼロは一瞬躊躇するが、今日来たのはこの話をしなければならなかったからだ。

「…俺、アナザースペースで出会った仲間と、ウルティメイトフォーセゼロ」っていう名前の自主警備隊を作ったんだ。だから、これからそっちで活動しようかと思う」

「…そっち?」

「アナザースペース… だけど」

「え…」

「あ、だからってこつちに帰ってこないわけじゃないぜ？たまには帰ってこようと思ってるし…」

「…たまには？」

「いや、流石に毎日帰ってこられるわけじゃねーし、イーゼスのエネルギーのこともあるしさ…」

「…そう、だよね……」

「…どうしたんだよ、さつきから？なんか変だぜ？」

「あ、ううん。ちよつと急だったからびっくりしただけ…」

「まあ、そうだよな。親父たちもびっくりしてたし…」

「…いつから行くの？」

「え、明日からだけど？」

「！」

びくりと体を震わせるディアナ。その様子に気づくことなくゼロは話を続ける。

「アナザースペースの現状はまだ宇宙警備隊も把握しきれてないらしくてさ… ゾフィー隊長がなるべく早い方がいいって…。まあ俺もそのつもりだったしな。あつちは光の国みたいに規模のデカイ警備隊はまだないし…」

「…なんで？」

「へ？」

「なんで… そつちじやなきやダメなの？」

さつきから様子のおかしいディアナにゼロは首をかしげる。

「なあ、ホントにどうしたんだよ？」

「……」

ゼロは思わず大きな溜め息をつく。それにまたもやびくりと反応するディアナ。

「なあ、何か言いたいことがあるんなら…」

ディアナの煮え切らない態度に少々苛立ったゼロが口を開いたとき、脳内に父の声が響く。

『ゼロ、聞こえるか?』

『親父…?』

『本部に来てくれないか?皆がお前を送り出す会をしたいと言っているんだが…』

『お前の好きな料理用意して待ってるぞー』

『マジで!?!行く行く!』

セブんとエースからのテレパシーにゼロの表情は明るなものとなる。

「俺、今から警備隊本部に行くけどお前も来るか?」

「え?」

「親父たちが俺を送り出す会を準備してくれてるんだってよ!」

「……」

「…ディアナ?」

「…ごめん、私行けないや。報告書が残ってるから…」

「そっか…」

沈黙が2人の間を流れる。

「じゃあ、俺行くわ」

「…うん」

ディアナはゼロを玄関まで見送るが、その表情は暗い。

「…じゃあな」

「……うん」

「…あ、明日出発朝早いんだ」

「…そう……」

「…無理なら、別に見送りいらねーから……」

「……」

「…じゃ」

静かに玄関の扉が開く。

ゼロが出て行ったあと、カチリとロックされる音が部屋に響いた。

宇宙警備隊の一室でゼロのために食事会が開かれた。

食事会と言ってもお固いものではなく、立食パーティーに近いもの

でアナザースペースへと旅立つゼロのための壮行会でもあった。

「ゼロー 煮込みハンバーグいるかー？」

「おう」

「あ、エース兄さん！僕もおかわり！」

「ったく、タロウお前もう5個目だぞ!? 主役はゼロなんだから少しは遠慮しろ！」

「…メビウス、さつきからカレーばっかり食べているが他のも食べたらどうだ？」

「んー？だつてエース兄さんの作ったカレー美味しいんだもん。ヒカリも早く食べないと僕が全部カレー食べちゃうよ？」

(そうはさせんぞ、メビウス…)

「エース、デザートにおはぎはあるか？」

「ありますよー 今回は苺大福もありますからね」

エースが腕を振るった料理を兄弟たちで取り合いながら、ゼロのアナザースペースでの話に花が咲く。

「それにしても別次元の宇宙でゼロに志を同じにした仲間ができるとはな…」

「帰って来ていきなり『アナザースペースでできた仲間と警備隊を作ったから、そこで活動する』って言ったときはさすがに驚いたぞ…」

「わりい、親父」

「いや、いいんだ。離れてしまうのは父親として寂しいが、同時にお前がそうやって一人の戦士として自覚と誇りを持ってくれていることが嬉しいんだ」

目の前にいる息子は、かつて力に取りつかれ罪を犯してしまった幼い少年ではなく、戦士として自分が何をすべきか、どうすることができているのかを考え、行動することができる一人の男へと成長していた。

セブンは息子にしか向けない特別な眼差しでゼロを見つめたあと、レオとアストラに頭を下げる。

「レオ、アストラ、本当にありがとう…。ゼロがここまで成長できたのもお前たちのお陰だ」

「そんな、セブン兄さん…」

「僕たちは僕たちにできることをしただけですよ」

「…いや、でもアンタたちがいなくなったら俺はずっとここへ帰って来ることができなかつたかもしれないねえ」

ゼロが小さくもはつきりとした声でそう告げた。

「アンタたちが俺に全力で向き合ってくれたおかげで、俺はウルトラ戦士として大切なものを学ぶことができた…。俺、アンタたちの…レオとアストラの弟子でよかったよ…」

ゼロを見ると普段言いなれないことを言ったためか、頬が赤く染まっている。

レオとアストラはちよつと驚いたような表情を見せたが、その表情は優しいものへと変わる。

「ありがとう、ゼロ。僕たちもゼロに誇ってもらえる師匠になれるように頑張るよ」

「…そうだな。ゼロもまだまだ修行が必要だが、俺たちも師として精進せねばならんな」

ゼロは照れたように、上唇を拭った。

食事会からの帰り道、並んで歩いていた息子に声をかける。

「そういえば、ディアナと会ったんだろう？」

「…ああ」

先ほどまで笑顔だったゼロの表情が曇る。

「何かあったのか？」

「何かあったってわけじゃねーけど…なんかアイツ元気なかつたなって…」

「きつと心配なんだろう… 急な話だったしな」

「……」

「ゼロ、どうした？」

「…いや、なんでもねえ。帰ろうぜ、親父！」

そう言って駆けだした息子の背中へ、なんだか少し寂し気だった。

（アイツなら、笑って送り出してくれると思っただけだな…）

リビングの机に突っ伏して数時間。気がついて時計を見るとすでに夜遅く。

プラズマスパークの輝きは、夜のそれへと姿を変えていた。けだるげに体を起こしながら、ゼロとの会話を思い出す。

—あまりにも突然すぎる。

追放処分が解かれて光の国へ帰還した直後、任務で一人アナザースペースへ。

そして無事に帰って来てくれたかと思ったら、これだ。

しかも行き先は自由に行き来することが難しい、宇宙警備隊も未開拓の宇宙。

どうしてまたすぐどこかへと行ってしまふのだろう。

そんなにもアナザースペースやそこにいる仲間の方が刺激的なのだろうか。

—どうして、素直に喜んで送り出せなかったんだろう。

ゼロがしようとしていることは、宇宙の平和を守るウルトラ戦士として立派なことだ。

宇宙警備隊やウルトラ兄弟もこれまでなかなか目を向けることの無かった別次元の宇宙の平和について考え、それを守るために自主警備隊を組織し、その一員として活動することを決めた。

助けを求める人がいれば、例えば宇宙の果てまでも駆けつける。

同じ宇宙警備隊員ならば、ゼロの意思を尊重して送り出すべきなのに。

「…なんで、気づいてくれないかなあ」

報告書なんて、とつくに仕上げている。あれはただの口実だ。

あのままゼロやウルトラ兄弟と顔を合わせていれば、きつと「ウルトラ戦士としてふさわしくない答え」を言ってしまうに違いない。

—どうしても、引き止めたくなくなってしまふ。

また、独りぼっちになってしまう。

自分が小さな子どもなら、きつと駄々をこねて引き止めているだろう。

泣いて、すがって、どんな手を使ってでも引き止めているだろう。ずつとずつと待っていた、幼馴染の帰還。

無事な姿を見てどれだけほっとしたか、当人は知らないだろう。

3回しか使えないはずのエネルギーコアの光が消えたとき、心が張り裂けそうになった。

再び光の国を襲撃してきた部隊と戦っているときも、ずつとゼロのことが頭から離れなかった。

生きているのか、怪我はないのか。光の国へ帰還できるのか。

―結局ゼロは、アナザースペースでの戦いでウルトラマンノアから力を授かり、その力を使って無事に光の国へ帰って来たのだが。

アナザースペースでのことについて話しているときのゼロの表情は生き生きとしていて、そこでの出来事や出会った仲間たちがゼロにとってかけがえのないものであることが伝わって来た。

独りぼっちの不安。

魅力たつぷりの別次元への嫉妬。

駆けつけられぬ場でゼロが命を落としてしまうのではないかという恐怖。

それらが入り交じり、もやもやとした感情に包まれる。

―こんな感情さえなければ、笑顔でゼロを送り出すことができるのに。

いつからこんなに心が乱されるようになってしまったのか。

ディアナは再び、机に突っ伏す。

明るさを感じて顔を上げると、目の前には懐かしい光景が広がっていた。

仲良く遊ぶ、2人のウルトラ族の子ども。

一人は胸のところの赤い三日月のようなラインが入っており、もう一人は特徴的なスラッガーを頭に2本持ち、体は赤と青。

幼い頃のディアナとゼロはいつも一緒だった。

友達というよりも兄弟に近かったように思う。

遊ぶのも、食事も、寝るのも一緒。それが当たり前だった。

―場面が変わる。

暗い部屋で一人涙を流しているディアナ。

ゼロが罪を犯し、連行された日の夜の自分の姿だった。

心がバラバラになり、しばらく抜け殻のようになってしまった。

そんな自分が立ち直るきっかけをくれたのもゼロだった。

ゼロが一人前の戦士として帰って来るその日を信じて修行に明け暮れた。

ゼロを、大切な人を守る力が欲しいと願いながら。

―また、場面が変わる。

自分とゼロが少し離れて向き合っている。

ベリアルが倒れプラズマスパークの輝きを取り戻した光の国で、再会した2人。

久しぶりに会う幼馴染の姿に、ディアナは心が震えたのを覚えている。

瞳に闇はなく、真つ直ぐとした金色の輝きを湛えており、顔だちも幼さがなくなり凛々しい表情となっていた。

目の前にいる過去の自分が、ゼロの胸の中に飛び込む。

今見ると、なんだか恥ずかしい。

でもあの時は本当に嬉しくてそこまで意識が回っていなかった。

また一緒にゼロと過ごすことができる、夢を追いかけることができると…。

「…本当に、それだけ?」

「…え?」

何者かからの問いかけに反応し振り向くと、驚くことにそこには自分が立っていた。

「本当に… それだけなの?」

どこか憐れむような表情を浮かべて問いかけてくる自分。

「…何が言いたいのか?」

「ディアナ、あなたがゼロに対する気持ちは本当にそれだけなの?」

―ゼロが追放になって抜け殻になってしまうほど絶望したのも、

ゼロが立派な戦士として成長して帰って来た時、涙が出るほど嬉し

かったのも、

ゼロが今回、アナザースペースに旅立つことに激しく心乱されたことも……。

「……」

「ゼロの見送りに行ってみて。そうしたらきつと分かるから――」

はつと目を覚ます。

「……夢……?」

夢にしてははつきりと記憶に残っているが、同時に疑問もいろいろと残る。

あの語りかけてきた自分は何だったのか。

その自分が言いたかったこととは何なのか……。

時計を見ると、あと1時間でプラスマスパークの輝きが早朝のものへと変わる時刻。

「……行かなきゃ」

朝靄の中を談笑しながらゆっくりと歩く、セブンとゼロ。

その少し後ろを離れて歩くレオとアストラ。

向かう先は光の国への玄関口、ウルトラスペースポート。

一歩進むごとに別れの時間が迫ってくる。

「……ゼロ」

遠目にウルトラスペースポートの入り口が見えてきた時、セブンが口を開く。

「ん?」

「気をつけてな」

「ああ……」

多くの言葉はいらないというような親子の会話。

その様子を獅子兄弟は静かに見つめていた。

ゼロがウルトラスペースポートへと目を向けると朝靄の中に人影が現れる。

銀色の体に映える、赤い三日月のライン。胸元に輝く六角形のカ

ラータイマー。

「ディアナ…」

ゼロはディアナの元へと駆け寄る。

「おはよう、ゼロ」

「おはよ、ディアナ」

ディアナは昨日の様子を微塵も感じさせない笑顔でゼロに挨拶をする。

ゼロもディアナの登場に驚きつつも、挨拶を返す。

「…昨日は、ごめんね。あまりに急なことだから驚いちゃって…」

「いや、いいんだ」

「……」

「…来てくれねーかと思った」

「言いたいことがあったから…　ゼロに」

「俺に？」

「うん…」

そこまで言うのとディアナは黙ってしまう。ゼロも黙ってディアナの言葉を待つ。

「ゼロ…」

ディアナは息を吸って顔を上げる。

「頑張つてね、ゼロ。応援してる。私も頑張るから…　それと体に気を付けてね…　それから」

言いかけたディアナの頭にゼロの手が置かれる。

ゼロは優しい笑みを浮かべていた。

「…ゼロ？」

「ありがとな、ディアナ。それで十分だ…」

「…ときどきは元気な顔見せに帰って来てね？」

「分かってるって」

にっこり笑ったゼロにつられてディアナも笑顔になる。

ゼロはディアナの頭から手を放すと、後ろにいた父と師にも声をかける。

「じゃ、行ってくるな、親父！師匠！」

「頑張るんだぞ、ゼロ」

「たまには帰って来るんだよ」

「気をつけてな、ゼロ」

「おうー」

ゼロは再びディアナに向き直る。

「じゃ、行ってくるー！」

「いってらっしゃい、ゼロー！」

笑顔でそう挨拶をかわすと、ゼロは飛び立つ。

ディアナたちはその姿が見えなくなるまで見送っていた。

「ディアナ、見送りに来てくれてありがとう」

ゼロを見送った後、セブンがディアナの背中に声をかけた。

だが、ディアナは答えることなくただただゼロが飛び去った方角を見つめている。

「ディアナー」

「すみません！私もう帰りますー！」

突然そう言ったかと思うとセブンたちの間をすり抜け、振り返ることなく飛び立っていった。

自宅の扉を開け、中に入るとカチリと自動ロックがかかる。

同時に全身から力が抜け、ズルズルとその場にへたり込む。

—行ってしまった…。言いたいことの半分も言えなかった。

伝えたいことがたくさんあったのに、涙をこらえるのに精一杯で言葉にすることができなかった。

何かがぶつりと切れたように、こらえていた感情が涙になってどつと溢れる。

『ゼロの見送りに行ってみて。そうしたらきつと分かるから—』

—やっと、分かった。

ゼロが追放になって抜け殻になってしまうほど絶望した理由も、

ゼロが立派な戦士として成長して帰って来た時、涙が出るほど嬉しかった理由も、

ゼロが今回、アナザースペースに旅立つことに激しく心乱された理由も…。

ゼロが、好きなんだ。

幼馴染としてではなく、一人の男性として。

夢に出てきた自分は、一人の女性としての自分。

ゼロへの想いを大切に育んできた、一人の女性。

戦士としての使命よりも、ゼロへの想いを大切にしたいと願う我儘な自分だった。

ひとしきり泣いて落ち着いた後、洗面所に向かう。

「…酷い顔だなあ……」

鏡に映りこんだ自分の顔を見て、あまりの酷さに思わず苦笑いがこぼれる。

冷たい水で顔を洗い、ふうと息を吐いて自分に喝を入れるように両手でばんつと頬を叩いた。

(ゼロが頑張ってるんだ。私も頑張らなきゃ…)

—2か月後。

警備隊本部の資料室で、一人苦戦するディアナ。

「あれ… 確かここにあるはず…」

資料棚に並べられている膨大な資料プレートの中から必要な資料を探しているのだが、探す資料が多いうえに資料室の広さ・多さにまだ慣れていなかったのである。

十数本はあるかと思われるプレートを抱えながら、台に乗り目的のプレートに手をかけたとき抱えていたプレートのうち数枚が腕をすり抜けた。

「あー」

思わず大きな声を出す。

床にぶつかるとかと思った瞬間、空中でプレートの動きがぴたりと止まった。

「つたく、気を付けろよ… いくらなんでもそんなに一人で持てるわけねーだろ」

ウルトラ念力で操られたプレートが、呆れた声を出した主の元へと集まっていく。

その動きを追って視線を上げると、そこには一人の若き戦士が立っていた。

切れ上がった金色の瞳、特徴的なスラッガー。

2か月前、その想いを自覚したばかりの人物―。

「ゼロ…」

ディアナの口からその帰りを待ち焦がれていた人の名がこぼれ落ちる。

「よっ―」

「……」

「…あ、悪い。違ったな」

反応を返さないディアナの様子を見て、かける言葉を間違えたのだとゼロは判断する。

「ただいま、ディアナ！」

笑顔でそう告げたゼロに、ディアナは何かをぐつとこらえ言葉を返す。

「おかえりなさい、ゼロー」

―ゼロへ好きな人―の前では、泣き顔よりも特別な笑顔でいたから。

第13話 背中

アナザースペースより帰還したゼロがウルトラスペースポットに降り立つ。

「ゼロじゃないか、おかえり」

「おかえり、ゼロ」

様々な人が自分に声をかけてくれる。自分を受け入れてくれる。

かつての自分の姿を考えると信じられないことだった。

ウルトラスペースポットから再び飛び立ち、宇宙警備隊本部へと向かう。

ここでもゼロはいろんな人に声をかけられる。

自分に声をかけてくれる人たちに挨拶を返しながら、ゼロはセブンの執務室へ向かう。

「親父、ただいまー」

ノックもせず勢いよく部屋に入って来た息子を、セブンは手を止め笑顔で迎える。

「おかえり、ゼロ」

再会できたかと思ったら、再び離れることになってしまった一人息子。

けれども寂しきよりも誇らしきのほうがずっと大きかった。

忙しい毎日の中でもゼロの著しい成長を感じられること、そしてゼロの土産話がセブンにとつて何よりの癒しだった。

「親父、今日は帰ってこれそうか？」

自分の話を笑顔で聞きながらも手はせわしなく動いているのを見て、ゼロはセブンに尋ねる。

「すまん、今日は遅くなりそうだ…。報告書や書類を仕上げなければならぬからな…」

セブンは書類の提出を急かしてくる長兄に、心の中で思い切り悪態をついた。

「そっか…。俺、明後日までこっちにいるからさ、そんなに謝らないでくれよ」

「ありがとう、ゼロ」

ゼロの優しい言葉にセブンの表情も和らぐ。

「ああ、そうだ… 今日レオとアストラは非番だから多分家だと思うぞ」

「分かった、後で行ってみる」

「手合わせでもするのか？」

「もちろん、そのつもりだぜ！」

ゼロはパンッと拳を左手に打ち付けた。

—ゼロが帰還する、1か月前。

カフェで溜め息をつく、ディアナの姿があった。

お気に入りのカフェの、通りが見える特等席で飲む、香り高い大好きなコーヒー。

厳しい戦いでストレスや疲れを癒してくれる、お気に入りのスポット。

—の、はずだが。

溜め息をつく理由は、テーブルに置かれた今日発売の若い女性向け雑誌。

通りの本屋で見かけ、思わず手に取ってしまったもの。

表紙では頭に特徴的なスラッガーを持つ若き戦士が、こちらに向かって笑顔でピースサインを向けている。

『今、注目のイケメン！ウルトラマンゼロに30の質問！』

ぱらり、とページをめくる。

たくさんのインタビュー記事、宇宙拳法の構えをとったポーズの写真などが30ページにわたって特集されている。

『ウルトラマンゼロに直撃！30の質問！』

『Q1. 好きな食べ物？』

『A1. カレーかな。エースの作るカレーはめっちゃくちゃうまいぜ！あ、でも親父の作るハヤシライスも同じぐらいうまいんだ！』

『Q7. お父さんのことを教えて！』

『A7. 俺の親父は、ウルトラセブン！ウルトラ兄弟の三男で、地球を

守っていたこともあるんだ。強くて自慢の親父だぜ!』

『Q17. ゼロの師匠って誰?』

『A17. ウルトラ兄弟のレオとアストラだ!俺の宇宙拳法は師匠たちに鍛えてもらったんだ。帰って来たときも時々手合わせしてもらってるんだぜ。』

『Q21. ウルティメイトフォースゼロの仲間について教えて!』

『A21. 鏡の騎士・ミラーナイト、炎の戦士・グレンファイヤー、そして鋼鉄の武人・ジャンボットだ。皆、アナザースペースで俺が出会った頼れる大切な仲間たちだ!』

こんな感じでゼロ自身やゼロの親しい人についての質問と答えが乗っている。

ぱらぱらとめくり、最後の質問のページ。

最後は、女性雑誌のインタビューにあるあるな質問。

『Q30. ズバリ、好きな女性のタイプは?』

ディアナも気になる、その答え。

『A30. うーん… やっぱり優しいやつかな!』

(普通…!)

思わず、そう突っ込んだ。

ベリアルの事件やアナザースペースでの活躍もあり、ゼロは今や英雄だった。

どこへ行っても声をかけられ、特に若い女性からの人気が高かった。

街を歩けば熱い視線を向けられ、ゼロの周りに人だかりができることもあった。

ゼロへの想いを自覚してから、そんな光景を見ると胸がチクリと痛む。

だが、最近の溜め息はそれだけが理由ではなかった。

ディアナは再び雑誌をめくり、インタビューの記事や写真に目を通す。

インタビューの内容も最後の質問以外は直接ゼロから聞いたことばかりだし、写真も見慣れた姿ばかり。

―それなのに…。

深い溜め息と共に雑誌を閉じたとき、突然声をかけられる。

「あれ、ディアナだよね?」

はつとして顔を上げると、そこにはウルトラ兄弟八男で、ゼロの師でもあるアストラがトレーを持って立っていた。

「ア、アストラさん!」

「こんにちは、ディアナ。ここ座ってもいい?」

「あ、はい…」

アストラはディアナの正面に座ると、テーブルの上に置かれている雑誌に気づく。

「あ、それゼロがインタビュー受けたやつだよね? 読んでもいい?」

「どうぞ…」

「ありがとう」

雑誌を受け取るとアストラは、ゆっくりとページをめくっていく。

「いいなー 僕もこんなにかっこよく写真撮ってほしいな…。あ、この質問… セブン兄さんが見たら狂喜乱舞ものだな…」

弟子の写真やインタビュー記事を見ながら、アストラの表情は次々と変わっていく。

「ゼロも今じゃ、光の国で一番の注目戦士か…。 K76星での修行時代が嘘みたいだよ」

「なんか、変わりましたよね。ゼロ…」

「そりゃあ僕たちが厳しい修行したし、何かしら変わっていないと僕たちの努力は水の泡だよ…」

「いえ、そうじゃなくて…」

「?」

アストラは頭の上にはてなマークを浮かべながらも、紅茶を口に運ぶ。

「このインタビューの内容も、写真に写っている姿も別に初めてじゃないんです。むしろよく知っています…。でも… なんだかここにいるゼロは私の知っているゼロじゃないような気がして…」

幼い頃からよく知っているはずのゼロ。

けれどもここ最近のゼロ―アナザースペースでの戦いを経て英雄と呼ばれている姿は、ディアナが知っているゼロの姿とはまるで違った。

「…なんだか、遠く感じるんです。ゼロのこと」

「……」

追いつきたくても、追いつけない。

隣に並ぶどころか、その背中に手を伸ばすことも叶わないのではな
いか…。

「ディアナ」

ディアナが顔を上げると、アストラがじつと自分を見つめていた。

「確かにゼロは変わったよ。もちろんいい意味でね。それは君も分か
かっているだろう?」

「はい…」

「誰でも時がたてば必ずどこか変わっていく… でもね、だからって
君の知っているゼロがいなくなるわけではないだろう?」

「…どういうことですか?」

「君が言う、〃私の知っているゼロ〃ってどんなゼロ?」

「えっと… やんちゃで、なぜかいつも自信満々で…。でも優しくて
思いやりがあつて、真っ直ぐで…。最後の最後まで諦めなくて…。意
外と可愛い物好きだったり…」

「そっか…。僕たちの知っているゼロもそんな感じだよ。いつまで
たつてもやんちゃ坊主だし、どこからそんなに自信が湧いてくるの
かって突っ込みたくなるし…。でも根は優しいしセブン兄さんや仲
間たちに思いやりを示しているし、真っ直ぐだし、諦めは悪いし、ピ
グモンは可愛がっていたし…」

「え、どこでピグモン可愛がっていたんですか?」

アストラの最後の言葉にディアナは思わず聞き返す。

「K76星の時。そこに1匹ピグモンが住んでいたんだけど、修行の
合間とかによく遊んでたよ…。夜一緒に寝たこともあったかな?」

思わずふふつと笑うディアナ。

「おかしかった?」

「…いえ、施設にいた頃も似たようなことがあったなって。ゼロ、いつもぬいぐるみと一緒に寝てたんですよ。怖い話聞いたときなんか、ぎゅっと抱きしめて…」

「へー… それはいいこと聞いちやった」

「あ、ゼロに言わないで下さいよ！後で怒られるの私なんですから…！」

「分かった、分かった」

大慌てのディアナにアストラは落ち着かせるように返事をする。

「でも、これで分かったら？ “君の知っているゼロ”は何も変わっていないよ。多分、この短期間でのゼロの成長に君の心が追い付いていないだけじゃないかな…」

「そうですね…」

「…あ、あともう一つ理由があるな」

「何ですか？」

「君、自信無さすぎ」

「…へ？」

アストラの予想もしなかった言葉にディアナは間の抜けた声を出す。

「自己評価が低すぎるよ、君。特にゼロが絡むと。もっと自信持ちなよ…」

「そんなことないです… ちつともー」

「ほらほら、またそうやって自己評価下げるー」

子どものようなむつとした不満げな表情でビシツとディアナを指さす。

「宇宙警備隊に特別推薦枠で入隊、現在はウルトラ兄弟の任務に同行することもしばしば、どんな強敵にも立ち向かっていく戦士でありながら、優しくて思いやりもあって女の子らしさもあるのに自分の何がそんなに不満なの!？」

「……」

マシンガンの弾丸のように放たれた言葉にディアナは真っ赤になって俯く。

そんなディアナを可愛いと思いながら、アストラは続ける。

「ゼロの背中を遠いつて感じてるのは、君の自己評価が低すぎるのもあると思うよ？君がもつと自信を持てば、その背中はまだもう少し近く感じるんじゃない？」

「それでも…ゼロだつていつまでも同じところで立ち止まっているような人じゃないです。私が前に進めば進むほどゼロも前に進んでいくし、私が成長すればするほどゼロも成長していくんです…。だから私はまだまだなんです…」

「…なるほどね」

—この子は僕たちが考えている以上に、ゼロを見ている。さすがだね。

「…アストラさん、今日は非番ですよね？」

ディアナがおもむろに口を開く。

「うん、そうだよ」

「レオさんも…ですか？」

「うん、兄さんなら家にいるよ」

「…お願いがあるんですけど、今からレオさんに会えませんか？」

真剣そのもののディアナの表情を見て、アストラは頷いた。

「いいよ、ちよつと待ってね」

そう言うと、アストラは兄にテレパシーを飛ばした—。

—そして、1か月後。

警備隊本部でゾフィーやウルトラ兄弟に挨拶を済ませた後、ゼロはレオ・アストラ兄弟の自宅を訪れていた。

「師匠— いないのか—？」

いくらチャイムを鳴らしても、声をかけても出てこない。

「親父が多分家にいるつて言ってたんだけどな… 出かけてんのか？」

ゼロは街中へ向かうと、レオやアストラが立ち寄りそうなところを探すが姿は見当たらない。

「ここにもいないなら… まさかあそこか？」

ゼロは最後の心当たりのある場所へと向かう。

—ウルトラコロセウム。

主に訓練生が実技演習で使う場所だが、ゼロとレオが手合わせをする際に使ったこともある場所だ。

演習場の扉に近づくと、中から聞きなれた声がする。

「拳の力が弱いーそれに踏み込みが甘いぞー！」

レオの声だ。だが、アストラを相手にしているには様子がおかしい。

そもそもアストラの拳が弱いだとか、踏み込みが甘いなんてことはあり得ない。

ゼロは扉を少し開けて中の様子を覗く。

「イヤアア！」

レオの放った拳が相手に見事ヒットし、喰らった相手は壁に叩きつけられる。

その相手を見て、ゼロは目を見開く。

—シルバーの体に赤い三日月のようなライン。胸元で輝くのは六角形のカラータイマー。

しなやかで美しい銀色の体には、多くのすり傷やあざが見られた。

（嘘だろ…）

ゼロの目に飛び込んできたのは、己の師と手合わせをする幼馴染の姿だった。

しかもK76星のときのゼロとは違い、テクターギアを付けず生身の体で。

テクターギアは体の自由を制限するのが主な機能だが、その体を磁気嵐やレオの技から体を守る役目もあった。

（無茶だ、ディアナー！）

レオの技をもろに受けて痛々しい様子に、ゼロは思わず止めに入ろうとしたが、その肩を後ろからがっしりと掴まれる。

振り返ると、アストラが静かに首を横に振っていた。

「離せよ！」

ゼロは小声でアストラに訴える。だが、アストラは離そうとしない。

「…ディアナを見てみな」

そう言われ、ゼロはディアナへと視線を戻す。

「どうした、もう終わりか？」

レオが拳を前に突き出した体勢のまま、目の前の戦士に問う。

ディアナは歯を食いしばり、ふらつきながらも立ち上がる。

「…まだ……、いけます！」

その表情は今までゼロも見ることが無い、気迫に満ちたもの。

「いい返事だ！」

レオは満足そうに頷いた。

目の前で練り広げられる、師と幼馴染の魂のぶつかり合い。

ゼロはそつと扉を閉めると、アストラに向き直る。

「なあ、何か知ってんだろ？」

「もちろん」

アストラはそう答えると1か月前の出来事を話した。

「前にディアナと話をする機会があつてね…。その時に言われたんだよ。『宇宙拳法の修行を付けてほしい』ってね」

「……」

「兄さんも最初はちよつと戸惑つてたみたいだよ。こんなことを言つたらあれだけど…。いくら警備隊員だといつてもディアナは女の子だし、ゼロとは体格も基礎体力も違うしね」

「…そうだな」

「ディアナの熱意に負けて始めたのはいいんだけど、思わず兄さんが手加減してしまつてね…」

「え、ホントかよ？」

「ああ。それに気づいたディアナがものすごく怒つて…。『本気の相手に本気でぶつかつてこないのは侮辱だ』って…」

「……」

「で、それからずっとあんな感じ」

「そつか…」

話を終え、コロセウムが静かになったことに気づく。

扉が開きアストラとゼロがそちらを見ると、情けない表情のレオが立っていた。

「…すまん、ちよつとやりすぎたようだ」

—その腕に、ぐつたりとしたディアナを抱いて。

「熱中するのはいいですが、限度というものがありますよ」

光の国最大の医療機関にして銀十字軍の本部、ウルトラクリニック
78。

その一室でウルトラの母から説教されるレオ。

「…すみません」

「ウルトラの母、そんなにレオさんを責めないでください。無理を言ってお願ひしたのは私なので…」

「例えそうだとしても、子どもと言っても間違いのない女性戦士にレオキックはやりすぎです」

「おっしやるとおりです…」

—つい数十分前。

ぐつたりとしたディアナを抱えて演習場から出てきたレオに、ゼロとアストラが何があったのかと問い詰めると、修行について熱が入ったレオは己の必殺技であるレオキックをディアナに繰り出してしまったのだ。

ディアナは一瞬意表を突かれたような表情を見せたが、逃げることなく真正面からレオキックを受け止めようとした。

勢いに押され壁際まで追いやられながらも、なんとか受け止めることには成功したが、レオとの修行による疲労とダメージは大きく、レオキックを完全に受け止めたと同時に崩れ落ちてしまったのだ。

大慌てでレオたちはクリニックへ駆け込み、ボロボロのディアナの様子に驚いたウルトラの母に事情を聞かれ、レオが一人説教されているのだ。

「レオもそうですが、ディアナ。貴女も無茶をしすぎです。疲労が蓄積されていて、体がきちんと回復していませんでしたよ。そんな状態で修行しても、身になりません」

「申し訳ありません…」

ディアナはウルトラの母の治療を受け、レオキックのダメージも、修行で受けた傷もすっかり完治していた。

「今日はここでゆっくりおやすみなさい。しっかりと体を休めるのですよ」

そう言うウルトラの母は病室を後にした。

扉の向こうで話し声がしたかと思うと、少ししてゼロとアストラが入ってくる。

「大丈夫か、ディアナ！」

「うん、大丈夫。ごめんね、心配かけて…」

「兄さん、熱が入ると周りが見えなくなるの気を付けてって言うのに…」

「すまん…」

「アストラさん、レオさんをそんなに責めないでください。自己管理ができていなかった私が悪いので…」

「まったく、もう…」

「そーいやウルトラの母に聞いたけど… 何でそんなに体が疲れてたんだ？」

「えっと… レオさんに宇宙拳法教えてもらってからずっと練習してたから…。あんまり寝てなくて…」

「熱心に練習してくれるのは指導のし甲斐があるが、無茶をするのと自分を限界まで追い込むとは違う。休息はきちんとするようになさい」

「分かりました」

レオの言葉にディアナは素直に頷く。

そんなディアナをゼロはじっと見つめる。

(…小せえ)

肩も、背中も、手も。自分よりも一回り小さい幼馴染。

自分の腕の中にすっぽりと収まってしまいそうな小さな戦士。
あの小さな手でレオの力強い拳を受け止め、
あの細くしなやかな腕で、時に爆発的な力を持つレオの蹴りや突き
を――。

「…ディアナ」

「なに？」

「頑張ってるんだな、すごく」

「え…」

突然のゼロの言葉にディアナは目をぱちくりさせる。

「俺も負けてらんねえな！」

ゼロは両手をパンツと打ち合わせる。

「なあ、師匠！今から手合わせしてくれよ！」

「ああ、いいぞ」

「あ、久しぶりに僕も相手させてよ？」

「もちろんだぜ！」

ゼロは未だにぼかんとしているディアナに向き直る。

「じゃあ、俺たちはもう行くな。ゆっくり休めよ！」

「え？あ、うん… 頑張ってるね」

「じゃあね、ディアナ」

「無理をさせてすまなかった… また体が回復したら修行を付けてやるからな」

「ありがとうございます、レオさん」

師弟が出て行ったあと、ディアナはぼつと布団をかぶる。

じわじわと効いてきた、その威力。

『頑張ってるんだな、すごく』

あの声、あの言葉、あの表情――。

(ずるいずるいずるいずるい!!!)

たった一言でここまでダメージがあるとは…。

破壊力バツグン。ある意味、レオキックを超えた技だ。

布団から顔を出し、はあと息をつく。

今日は言われた通り、ゆっくりと体を休めよう。

修行はまた明日から…。

布団を着直し、目を閉じる。

—その口元には小さな笑みが浮かんでいた。

「なあ、師匠。ディアナに手加減しちまったってホントかよ?」

クリニツクの廊下を歩きながらゼロはレオに尋ねる。

「ああ、情けないことに本当だ」

「なんでだよ?俺の時は一切手加減なかったじゃねえか…」

「あれはお前を更生する目的もあつたからな。それに正直言つて、あの子が俺の鍛錬についてこれるとは思つてなかつた…」

「…完全にアイツのこと見くびつてんじゃねえか…」

「本当に今回ばかりはすまないと思つている… アストラにもさんざん怒られたからな」

苦笑いでレオが答えると、アストラが咎めるような目で兄を見る。

「兄さんが優しいのは分かるけど、あの子が本気なのは目を見れば分かるでしょ?それで手加減するのは失礼だよ」

「…そうだな。俺もまだまだだな」

「で、手合わせしてみてもどんな感じだった?」

「うむ… まだ突きや蹴りの威力はゼロほどではないが、このまま鍛錬を続ければ必ず伸びてくる。男と比べると体が小さいから、それをカバーできる技を教え込まねば—」

「…小さくねえよ」

「え?」

ゼロがぼつりと呟いた言葉にレオとアストラは同時に反応する。

「アイツの背中は小さくねえよ」

戦士としての誇りと覚悟を持った背中。

身体は小さいけれど、〃戦士としての背中〃は決して小さくない。

「…おっしや!早く行こうぜ師匠!」

「お、おい待てゼロ!」

突然駆け出したゼロを追いかける獅子兄弟。

紅き戦士二人の背中は広く、逞しい。

その弟子、若き最強戦士の背中はそれよりも少し小さい。けれども、その背中にある誇りと覚悟は師に劣らぬものだった。

第14話 蒼き星へ

—宇宙警備隊大隊長室。

デスクの上で手を組み、じつくりと考え込んでいるのはこの部屋の主であるウルトラの父。

悩まし気な表情でデスクの上を見つめている。

静かに扉がノックされる。

「大隊長、ゾフィーです」

「入ってくれ」

扉が開き姿を現したのは、宇宙警備隊隊長のゾフィー。

「報告を聞かせてもらおうか」

「はい。調査の結果、やはり太陽系近辺で確認された宇宙人や怪獣は、これまでの個体と比べると格段に能力が上がっています。もし、これらの個体がこのまま地球に行けば…」

「地球人だけの力では地球を守れないかもしれない、か」

「残念ながら、その通りです…」

ウルトラ兄弟が命を懸けて守ってきた美しい星、地球。

「怪獣退治の専門家」ウルトラマンが初めて地球に降り立ってからどれだけの年月が経っただろうか。

今では地球を地球人の手だけで守れるようになっており、ウルトラ兄弟のように地球に派遣されるウルトラ戦士はいなくなった。

—の、だが。

近頃、この宇宙—特に太陽系で不穏な空気が渦巻いていた。

宇宙警備隊が調査に乗り出したところ、太陽系で侵略宇宙人や怪獣の出没が増えており、さらには個体がこれまでのものと比べると能力が格段に上がっていることが判明したのだ。

「やはり、誰か一人派遣するべきかと…」

「そうだな。調査結果がそうなっている以上、何も手を打たないというわけにはいくまい」

「誰を派遣しましょうか」

ゾフィーからの問いにウルトラの父はデスクの上に置いてある二

枚のプレートに目を落とす。

「もう目星はつけているんだがな…」

「どの隊員ですか?」

ウルトラの父は何も言わずプレートをゾフィーに見せる。

ゾフィーはプレートを見ると一瞬驚いたような表情を見せたが、さっと目を通して返す。

「…やはりお前も同じか、ゾフィー」

「はい。私もこの二人以外は思いつきませんでした。ただ…」

「どうした?」

「この二人を考えた場合、この子の方はどうしても派遣したくないんです。彼の活動は、我々ウルトラ兄弟でも手に入れにくい貴重な情報をもたらしてくれますから。そうなると候補は自然に彼女の方になります。この子の戦闘能力、戦士としての素質は彼に劣りません。ただやはり女性ということもあって心配なんです、隊長ではなく『兄』として…」

「おいおい、この子はウルトラ兄弟入りどころか、地球にも派遣されていないぞ」

「おこがましいかもしれませんが… あの子の修行についてから、勝手に妹のように気にかけてしまって」

「それがお前のいいところだよ、ゾフィー」

「マンやセブンには『兄バカ』と言われていますがね」

ゾフィーが苦笑いで答える。

「マリーと相談した時も似たようなことを言っていたよ。『あの子は確かに強いですが、まだ5900歳の女の子ですよ』と。マリーもあの子のことを実の娘のように気にかけているようだ」

「そうですか…」

「……」

「……」

「…ゾフィーよ」

「はい、大隊長」

「お前が考えていることで、言い残したことはないか?」

「あります、一つだけ」

「言ってみなさい」

「あの子なら…… ディアナなら必ず地球を守り抜けます。私たち兄弟が愛した、あの美しい星を」

「…そうか」

ウルトラの父はゾフィーの言葉を聞くとすっと立ち上がる。

「至急、皆を集めてくれ」

—翌日。

警備隊員合同の執務室では、多くの隊員たちが報告書を作成したり、パトロールについて打ち合わせをしたりするなどそれぞれ忙しく働いている。

ディアナも書類を記入したり上司にパトロールの報告をしている。そんな執務室に突然の訪問者が現れる。

「ディアナはいるか？」

低く落ち着いた声が部屋に響く。

隊員たちの視線が次々に扉の方へと集まり、部屋がざわつきだす。

訪問者は他ならぬ、宇宙警備隊隊長のゾフィー。

ディアナの名が呼ばれ、今度は一斉に隊員たちの視線がディアナに集まる。

ゾフィーの登場に呆然としていたディアナだったが、隣にいた上司に小突かれて現実に戻る。

「は、はい……ここです」

慌てて返事をしたディアナとゾフィーの目が合う。

「ディアナ、すぐに私と一緒に来てくれ。今やっている業務は後でいい」

そう言うとゾフィーは部屋を後にする。ディアナも急いで後を追った。

ゾフィーの後について警備隊本部内を歩くディアナ。

最上階へと上がり隊長室へと向かうのかと思いきや、その扉を通り過ぎて、本部の最も奥まったところにある扉の前でゾフィーが立ち止

まる。

「あの、ゾフィー隊長… ここは…」

「宇宙警備隊大隊長室。中で大隊長がお待ちだ」

「…！」

ゾフィーがノックをする。

「大隊長、ゾフィーです。ディアナを連れてきました」

「入りなさい」

扉が開き、部屋の主の姿が目に入る。

立派なウルトラホーンと髭が、その人物が歴戦の勇士であることを示している。

周囲を圧倒するようなオーラに思わず息を飲むディアナ。

「ディアナ、よく来てくれたね。いきなり呼び出してすまなかつた」

ウルトラの父は表情をやわらげディアナに話しかける。

ディアナもウルトラの父の前に進み出る。

「君に来てもらったのは他でもない…。宇宙警備隊大隊長として君に最重要任務を言い渡すためだ」

「…！」

一呼吸置き、ウルトラの父は口を開く。

「ウルトラウーマンディアナ、ウルトラ兄弟の候補生として地球での任務に就くよう、ここに言い渡す」

「……………え？」

一瞬の沈黙ののちに己の口から出た声は、恐ろしく間抜けだった。

「私、が… ウルトラ兄弟の候補生…ですか？」

「そうだ」

「その… 派遣先は…！」

「太陽系第3惑星、地球だ」

「…！」

ディアナは信じられないという表情のまま少し目を伏せる。

「どうした、何か不満か？ 確か君の夢は 警備隊に入って地球に行くこと」と聞いているが

「不満、はありません。ただ…！」

「何かあるのなら、言ってみなさい」

口にすることを躊躇している様子のディアナにウルトラの父は穏やかな表情のまま促す。

「…なぜ私を選んだのか、理由をお聞かせ下さい」

「ふむ…」

ウルトラの父はどこか面白そうな表情でディアナを見つめる。

「…君は『自分よりも適任者がいる』。そう思っているのではないのかな?」

ディアナの目が大きく見開かれる。

「なぜ『彼』を差し置いて自分が選ばれたのか、その理由を知りたいんだらう?」

「はい…。実力や戦闘能力でいえば、私よりもゼロの方が上です」

「確かにゼロの方が戦闘能力は高い。彼に任命してもきつとこの任務を達成してくれるだろう。だがなディアナ、私たちは経験や戦闘能力の良し悪しで決めたりはしない。その先の姿を見て判断しているのだ」

「……」

「ウルトラ兄弟入りをしているレオも元々は戦闘員ではなかったし、私の息子のタロウも自分の力を過信していた時期があった。それにメビウスも地球に派遣した時は戦い方もよく分かっていないルーキーだった…。私たちが地球へ派遣する者を決めているときに大切にしているのは、『この戦いを乗り越えたとき、どんな戦士へと成長するか』だ」

「……」

「君について息子たちに聞いたよ。そうしたら皆口を揃えて言うんだ…。『あの子は必ず地球を守り抜き、ゼロと共に次世代を担う戦士になる』と」

「……」

その言葉に、ディアナは信じられないといった表情でウルトラの父を見つめる。

ウルトラの父は静かにディアナを見つめ返し、低く重みのある声で

こう言った。

「ディアナ、宇宙警備隊大隊長として命ずる。この任務、宇宙警備隊員として、そしてウルトラ兄弟の候補生として誇りと使命を持って全うするように」

ディアナはウルトラの父の顔を見据え、はつきりとした声で言った。

「承知いたしました、大隊長」

そこから先は大忙しだった。

業務の引継ぎや地球行きの手続き、また地球へ行くにあたってメビウスにいろいろと教えてもらったりした。

上司も仲間も、ウルトラ兄弟も皆地球行きを祝福してくれ、多忙の中でも喜びを感じていた。

そしていよいよ明日、地球へ出発するという夜。

ディアナは全ての準備を済ませ、早めに休もうと部屋の戸締りを確認していた。

―ふと足が、ある物の前で止まる。

壁に掛けられたコルクボードに貼ってある、いくつもの写真。

その中にある、一番お気に入りのもので。

笑顔でピースサインをこちらに向ける若い戦士が二人。

ゼロが活動の拠点をアナザースペースに移して、初めて光の国に帰ってきた時に撮った写真。

太陽のように輝く笑顔のゼロと、少し頬を朱に染めて笑う自分。

「ゼロ… 私、夢叶ったよ」

そつと、写真の中のゼロに触れてみる。

今はどこで何をしているのか、いつ自分のことを聞くのだろうか。

ゼロはそれを聞いて何と思うのだろうか…。

そんなことを考えていると、インターホンが鳴る。

こんな時間に訪ねて来るような知り合いに、心当たりはない。

首をかしげながらも、玄関に向かい扉を開けると―。

「……え」

玄関先に現れた、その人物。

余程急いで来たのか、プロテクターに覆われた肩が上下している。こちらを見つめているのは、薄暗い夜の中でも映える金色の瞳。

「ぜ、ロ……」

たった今思いを馳せていた人物の登場にディアナは我が目を疑う。

「…悪い、こんな遅くに……」

「え、あ、ううん。とにかく入って……」

リビングのソファァーに座るように促し、温かいココアを2人分淹れる。

「はい、ゼロ」

「サンキュ……」

ゼロはココアを受け取ると、熱さと格闘しながらもゆっくりと味わう。

ディアナもゼロの隣に座り、ココアを口に運ぶ。

「いつ帰ってきたの？」

「ついさっきだ。家に着いたら親父からお前のこと聞いてき……。なんか…… いてもたってもいられなくて来ちゃった」

「……」

「ごめんな、こんな遅くに……」

「……ううん、来てくれて嬉しかった。びっくりしたけど」

いつもより、少し素直になるその理由。

「次、いつ会えるか分かんないもん……。今もそうだけどさ」

「…そうだな」

「…それに……」

『次、生きて会えるか分からないから』

心の中でそう呟く。

戦士として生きている以上、いつ死が訪れるかは分からない。

地球に行ったからといって死ぬと決まったわけではないけれども、

ウルトラ兄弟の何人かは地球での任務を終えて帰還した時ボロボロの状態で、中には瀕死の重傷を負った者もいた。

それだけ地球での任務は過酷なのだ。

だから次会ったとき、自分が生きているかは保証できない。

生きていたとしても、こうやって話ができる状態かは分からない。

「それに、なんだ？」

「…うん、何でもない」

こんなことを言えば、怒られるかもしれない。呆れられるかもしれない。

そう思い胸にしまっておく、今一番の本音。

「夢が叶ったわりには、元氣ねーな」

「そんなことないけど」

「いや、どう見てもないぞ」

「…少し不安なだけよ」

「ふーん…」

決して嘘ではない。

大隊長からはああ言われたけれども、自分が地球を守り抜けるのかという不安は残っている。

「不安に思う理由なんてあんのか？」

ゼロはディアナのほうを見て、そう疑問を口にする。

「親父も『ディアナなら必ず守り抜ける』って言ってたし、俺だってそう思う」

はつきりとしたその言葉にディアナはぼっとゼロの顔を見る。

ゼロは真剣な表情でディアナを見つめていた。

「ホントに、そう思う？」

「ああ」

「…なんで？」

「なんでって…」

ゼロはうーんと難しい顔をして天井を見上げる。

「…ずっとお前が努力してきたの見てきたし、俺の背中、お前に任せてもいって本気で思ってるし…」

「…！」

「それにウルトラの父が任命したってことは、それだけの力があるっ

てことだろ」

ゼロは少し冷めたココアを一気に飲み干す。

「じゃ、俺そろそろ帰るわ」

「え、もう？さっき来たばかりじゃ…」

「明日から行くんだろ？地球に行ってもしつかり戦えるよう、早く寝ろよ」

「あ、うん。そうするつもりだけど…」

—そのタイミングで、あなたが来たんです。

そう突っ込んでやりたかったけど、この空気を壊したくなくて何とか飲み込む。

「明日、親父と一緒に見送り行くからな」

「うん、ありがとう」

「じゃあな」

「…ゼロ」

「ん？」

「…ありがとう」

「…おう」

ゼロは片手をひらひらと振ると、ディアナの家を後にした。

「…あつぶね」

自宅に向かう途中でゼロの口から出た言葉は、夜の闇に静かに溶ける。

青い手で口元を覆っていたが、ほんのりと朱に染まった頬は隠しきれていなかった。

—翌日。

まだ靄が残る朝方、ウルトラスペースポートにウルトラ兄弟とゼロ、そしてディアナの姿があった。

ディアナの左手首にはウルトラの父から授けられたブレスレットが輝いている。

「気をつけてな、ディアナ」

「くれぐれも体を大事にしなさい」

「ウルトラ五つの誓いを忘れないようにね」

「向こうへ行っても鍛錬を忘れるなよ」

「ディアナなら必ずやり遂げるって、僕信じてるよ」

ウルトラ兄弟からの力強い言葉にディアナの胸はいっぱいになる。

「ありがとうございます」

「ディアナ」

セブンの少し後ろにいたゼロがディアナに近づき、目線を合わせるように姿勢を低くする。

(ええ!?)

ゆっくりと近づいてくるゼロの顔にディアナの胸は早鐘を打つ。

思わずぎゅっと目を瞑っていると…。

パチンツ

「痛っ!」

デコピンを喰らい、その痛みに額を押さえて恨めしそうな表情でゼロを見上げる。

対してゼロはニシシと笑い、悪戯が成功したときの子どものような表情で、とても楽しそうである。

「なにすんのよ、もう…」

「しけた顔してんじゃねーよ。ウルトラ兄弟の候補生なんだから、もつと堂々としていけよ。それにずっと憧れてた地球に行くような顔じゃねーぞ、それ」

「ゼロの言うとおりだよ、ディアナ。『いつてきます』はヒカリみたいな仏頂面じゃなくて笑顔で言ってほしいな」

「おい、それはどういう意味だメビウス」

「あ、ほらまた仏頂面してるー。ヒカリ、笑顔だよ!笑って、笑って!」
「い、いひゃい!うえびうふ、ひゃめろ!」

仏頂面を直そうと親友の頬を引っ張りあげるウルトラ兄弟十男。その様子を見て、メビウスの師であるタロウが止めに入るー

「違うぞ、メビウス。ヒカリ博士が一番似合う笑顔はこうだ」

ー訳がなかった。

「いひゃ!ひゃめんか はろー!」

「あ、そうか！さすがです、タロウ兄さん！」

天然師弟の餌食となったヒカリに、やつのことで救世主が現れる。

「…なあ、ディアナが戸惑ってるんだけど」

3人のそばにやって来たのは、ゼロ。

ゼロが指さす方向を見ると、ディアナは困惑しきった表情でこちらを見つめていた。

その肩を「気にしなくていい」と言いたげな表情でぽんぽんと叩いている、マン。

「あ、そうか！もう出発の時間だよね… ごめんねディアナ！」

「…いや、そうじゃない」

メビウスの発言に、小さな声で同時に突っ込んだヒカリとゼロだった。

ディアナとマンは、ヒカリをもみくちやにしている天然師弟を見ながら言葉を交わす。

「…あの、ウルトラマンさん」

「なんだい？」

「私ずっと疑問に感じてたことがあるんですけど…。メビウス教官って優しくて親切で、講義もすごく分かりやすいんですけど、それほどの人がなんであんなにも天然なんだろうって…」

「……」

「…今、その理由が分かったような気がします」

「…君は本当に、素晴らしい子だよ」

ヒカリも無事解放され、皆でディアナを見送る。

「ディアナ、私たちは必ず君がこの任務をやり遂げられると信じている。それにどうか忘れないでほしい…。離れていても君を思う仲間たちがいることを」

「…はい」

ゾフィーの言葉にディアナは大きく頷く。

「ディアナ」

声が出た方へ顔を向けると、ゼロが笑顔でこちらを見ている。

「頑張れよ！」

ニツと笑った、その顔。

—ふいに、幼い頃のことを思い出した。

初めて会った、あの日のことを。

目に熱いものを感じる。

ぐつとそれをこらえて、笑顔で答える。

「うん！」

ディアナは見送りに集まったウルトラ兄弟たちを見回すと、姿勢を正す。

「宇宙警備隊隊員、ウルトラウーマンディアナ。これより特別任務のため、地球へと向かいます。ウルトラ兄弟候補生の名に恥じぬよう、全力を尽くしてまいります」

その言葉にゾフィーが深く頷き、隊長として、そして「兄」として言葉をかける。

「いっておいで、ディアナ」

「はい、いってまいります！」

ディアナはそう言うと、くるりと背を向け振り返ることなく飛び立っていった。

「…いってしまったな」

ぽつり、とタロウが漏らす。

そんなタロウの耳に、鼻をすすするような音が入る。

タロウがそちらを振り向くと、メビウスが涙を流していた。

「メビウス!?!」

驚くタロウの声に反応し、他のウルトラ兄弟たちも一斉にメビウスの方を見る。

「おい、どうしたんだメビウス?」

突然のことに心配したエースがそつとメビウスの顔をのぞき込む。

「す、みませつ、ん、兄さん、たち… なんか…、むかしの、ことをっ、思い出し、て…」

しやくりあげながらそう話すメビウスも、かつて宇宙警備隊のルー

キーだった頃に地球へ派遣された。

「なんか、ディアナと、む、昔の自分が、重なって見えてっ…」
期待と不安を胸に、旅立ったあの日。

ずっと憧れてた星へと、同じく憧れだったウルトラ兄弟の候補生として派遣されたあの日。

その日はメビウスにとって、忘れられない大切な日。

今の自分があるのは、その日があったから。

そして、地球で出会った人たちとの大切な絆があったから…。

そんな日を、今度は自分が送り出す側として迎えるとは思っていなかった。

「きつと、これから… 辛いこととか、たくさんっ、あると、思います…。でも、僕が、そうっ、だったように、ディアナも、乗り、越えていくのかなって、思うと…」

「心配なのか？」

タロウがそう尋ねると、メビウスはこくりと頷く。

「心配っ、ですけど、なんだか、ディアナの成長が… 嬉しくてっ」

「そうか、そうか。メビウスにとってもディアナは妹みたいなものなんだな」

「…もっ？」

「メビウス、ここにいるウルトラ兄弟全員…。皆ディアナのことを妹のように大切に思っているんだ。かなり気は早いけどね」

「本当、ですか？」

メビウスが涙を拭い、兄たちを見回すと皆一様に深く頷いた。

「心配すんな、メビウス。あの子はどんな困難も乗り越えて、必ずまたここへ帰って来てくれる。俺たちの妹になる。『かもしれない』子だからな」

エースが言うのとメビウスも笑顔で頷く。

「はい！僕もあの子の教官として、『兄』としてそう思います！」

「おー、面構えだけはずいぶん兄貴っぽくなったな」

「そんなことないです、エース兄さん！僕年齢でもディアナより上ですよー！」

「……」

エースの口元は、少し引きつっている。

「…あれではディアナが兄弟入りした時、どちらが上か分からんな」
「まったくだ」

セブンとマンがそう言っている後ろで、ゼロはまだディアナが飛び立っていった方向を見つめていた。

その背中は、いつかディアナがゼロを見送りに来た時とよく似ている。

「…絶対、死ぬなよ」

その言葉は、誰の耳にも入ることはなかった。

第15話 ラブソングはとまらないよ

多くの人が行きかう交差点。

手をつなぎ、笑顔で歩く親子。

そんな光景を見ながら街を歩く。

ふと空を見上げると、目に映るのはひとときわ美しく輝く光。

でも、その輝きは私にしか見えない特別なもの。

この地球に降り立ち、ソラノ・ミツキ」と名乗ってから、半年。

ウルトラの星で地球式の生活をしていたせいかな、地球での生活に馴染むのは早かった。

仲間にも恵まれ、良好な関係を築けている。

―数日前、それを危うく自分の手で崩壊させてしまうところだったけれども。

怪獣が出現した時、なぜかいつもその場から姿を消す私を不審に思った隊長が私に尋ねた。

『いつもどこに行っているのか』と…。

でも私は何度聞かれても、答えなかった。

結果、私は自室での謹慎を命じられた。

正直、とてもショックだった。

けれども、隊長の判断は正しい。

代わる代わる部屋の前に来た仲間が「本当のことを言ってほしい」と言ったが、私は一切答えなかった。

本当のことを言ってしまうえば仲間には危害が及ぶ危険性がある。

防衛チームとウルトラ戦士の繋がりを知られてしまったり、自分の正体が敵方にばれてしまったが故に、過去に仲間を人質にとられたり、愛する人を殺されたウルトラ兄弟もいる。

そして何よりももう一つ、恐れていること…。

だからずっと、秘密にしておくはずだった。

そんな時、地球に無双鉄神インペライザーが飛来する。

驚異的な回復力と、圧倒的な攻撃力。

しかも過去に襲来した時よりも、パワーアップを遂げていた。防衛チームの仲間は全力で立ち向かったが、インペライザーをしとめることは難しかった。

私は「ミツキ」としても、「ディアナ」としても戦うことができなかった。

仲間が全力で戦っているのに、何もできない自分を責めていた時だった。

頭の中に、懐かしい声が響く。

『ディアナ、聞こえるかい？』

『メビウス教官!』

—ウルトラ兄弟十男、ウルトラマンメビウス。

私やゼロの教官でもあったその人は、はるか昔にこの地球に降り立ち、

今でも英雄として語り継がれているウルトラ戦士だ。

『ディアナ、君はどうして何もしないんだ？』

『…どうすることもできないんです』

『そう？君は多少無茶をする子だと思ってたけどな』

『……』

『僕には何かを恐れて動いていないように見えるけど… 何が怖いのか？』

『仲間を… 失うことが怖いんです。私と防衛チームのつながりを敵方に知られてしまつて、それでも仲間が傷つくようなことがあつたら…』

『…本当にそれだけかい？』

『え？』

『もし、自分の正体が明るみになって皆が離れていったら…』なんて思つてない？』

『…!』

『君は、その程度しか仲間を信じてないの？』

『そんなこと…!』

『じゃあ、君がやるべきことは一つだよ』

『……………』

『僕が少し時間を稼いでおくから、ちゃんと話すんだよ。大丈夫、きつと彼らなら君を受け入れてくれるよ』

『…分かりました、教官』

そして、インペライザーの前にウルトラマンメビウスが現れ、英雄の降臨に人々は歓喜に沸く。

私はブレスレットからムーンスラッシュを発射し、扉のロックを破壊して外へと出る。

その音を聞いて駆け付けた隊長と仲間たちに、私はブレスレットを見せる。

普段は袖の下に隠し、ウルトラ族の力を使って見えないようにしているそれ。

そして、それを付ける者がディアナであるという証でもある。

ブレスレットを見て、皆の表情が驚愕の色に染まる。

「私には、果たさなければならぬ使命があるんです」

私が左腕を掲げると、あたりは眩いほどの光に包まれた！

インペライザーとメビウス教官が戦闘を繰り広げているところに合流し、協力して戦った。

だが、やはり回復能力が高い。

それに対する攻撃が間に合わないのだ。

―その時、こちらに向かってくる巨大戦闘機が一機。

それは防衛チームが所有する最大の戦闘機だった。

「メビウス、ディアナ！ 私たちが攻撃し、奴にダメージを与える。そこを一気に叩くんだ！」

無線で隊長が私たちにそう呼びかけた。

教官と領き合い、戦闘機にも領いて作戦の了承を伝える。

戦闘機から多くのミサイルが放たれ、インペライザーの体に巨大な穴が空く。

間髪を入れず、メビウムシユートとムーンプリズムシユートの眩

いばかりの奔流が走った―。

インペライザーを倒した後、ヒビノ・ミライさん―地球でのメビウス教官の姿と話をすることができた。

話を終えて教官を見送った後、こちらへやって来る人影が見えた。防衛チームの仲間たちだった。

私は全てを話した。

私が何者であるのか、どうして正体を明かさなかったのか、など。話し終えた後、仲間の一人が私に近づいてきた。

彼は、私を防衛チームに誘ってくれた人でもあった。

殴られると思った。それぐらい当然だと思った。

でも彼は私に向かって頭を下げた。

「ありがとう。俺たち人間のことで見捨てないでいてくれて」

驚く私に彼は続けた。

「きつと苦しかったよな…。ずっと一人で戦ってたんだからさ。でもこれからはもつと俺たちを頼ってくれ。俺たちは君みたいに超人的な力はないけど、君を全力でサポートすることはできる。それに、ミヅキの正体を知ること確かに俺たちに危険なことはあるかもしれない。でもそれぐらいのことなんて、なんともないさ。だって俺たち仲間だろ？」

嬉しかった。涙が出るほど嬉しかった。

私の一人よがりやで仲間たちを不安にさせてしまっていた。

仲間たちには、強い信念と覚悟があったのだ。

それがなかったのは、私だけだった。

皆は私の正体を知っても、何の疑問もなく受け入れてくれた。

それだけではなく、仲間たちとの絆はより強くなった。

ふわりと鼻をくすぐる、コーヒーの香り。

故郷でもよく飲んでいたせいか、なんだか懐かしい感じさえする。

今日は非番なので、地球に来た時に見つけたお気に入りのコーヒーショップで

のんびりコーヒーを楽しんでいると、隣の席に座っている女性二人の会話が耳に入る。

「ねえ、最近彼氏とはどう?」

「えー!…うまくやってるよ。来年同棲しようかなんて話もしてて…」

「えー! いいじゃん、いいじゃん! 結婚もそう遠くないわね!」

「…そういうそっちはどうなのよ。好きな人とか、気になる人いないの?」

「うーん、なんか周りにいる男、皆いまいちでね…。いい男降ってこないかなー」

「…降ってはこないと思うよ」

ウルトラの星でもありきたりな、恋愛トーク。

(好きな人、か…)

空でひととき美しい輝きを放つ、ウルトラの星。

その輝きを見るたびに思い出してしまう、想い人のこと。

会えない時間のなかで、彼に対する想いは強くなっていく。

思い出すたびに会いたくなってしまう。

時には涙が出そうになる。

でも、泣いている時間はない。

「会いたい」なんて、言えない。

彼は自分に与えられた使命を全うしようと、別の宇宙で頑張っているのだ。

そんな彼の活動に私が水を差してはいけない。

約束したんだ、お互いに夢を叶えられるように頑張ろう、と。

まだ会えない。だって何も掴んでないから。

あなたとまた笑い合えるその日まで、私はここで頑張っていくと決めたのだから。

(ゼロ、いつか私も…)

あなたにふさわしい人になって、想いを伝えられる日がくるのだらうか。

…なんだか、最近ゼロのことを考えるとセンチメンタルな感じになる。

これじゃだめだな、なんて思っていた時だった。
突如、激しい揺れに襲われる。

何事かと外へ出ると、そこにはなんと――

「…タイラント!?!」

暴君怪獣タイラント。

タロウ教官が地球で任務にあたっていた頃、襲撃してきたという記録が残っている。

しかも地球へやって来る前にウルトラ兄弟5人と戦ったにもかかわらず、ほぼ無傷の状態で飛来し、タロウ教官と相まみえたのだ。

ウルトラ兄弟随一のパワーを誇ると言われているタロウ教官だが流石に苦戦したらしく、講義でタイラントの話をしていた時には苦々しい表情だったのをよく覚えている。

端末から呼び出し音が鳴る。隊長からだった。

すぐに応援に向かう旨を伝え、タイラントの元へと急行する。

逃げ惑う人々の間を縫って、建物の影へと移動する。

左腕を掲げ、ディアナへと姿を変える。

人々の助けを求める声が聞こえる。私はその声に応えなければならぬ。

私はタイラントに立ち向かっていく。

けれどもその力とあらゆる光線技を吸い込んでしまう腹に、私も仲間たちも苦戦することとなった。

だが、私たちは絶対にあきらめない。

最後まであきらめなければ、必ず勝機はやって来る。

そう信じてこれまで戦ってきたのだ。

――その時、私たちのその思いに応えるかのように

荘厳な鎧をまとった戦士がはるか上空に現れていることに気づいた者はいなかった。

若き最強戦士の降臨まで、

想い焦がれた人が私の目の前に現れるまで、あと1分――。

第16話 ULTRA FLY

「ゼロが太陽なら、ディアナは月だよね」

俺が久しぶりに光の国へ帰還し、隊長室でエースが作ってきたおやつを食べながら話をしていた時、師匠の一人であるアストラがそう言った。

「突然何だよ？」

「これ、マン兄さんに勧めてもらった恋愛小説なんだけどさ」

アストラはそういうと1冊の本を見せる。

「幼馴染の男女が主人公なんだけど、その二人がなんとなく君たちに似ているんだよ」

「それなら私も読んだよ。ファンタジーな感じだけど、なかなか読みごたえのある話だったね」

ゾフィー隊長がコーヒーを口に運びながら、そう言う。

「どんな話なんですか、ゾフィー兄さん？」

興味をそそられたらしい俺のもう一人の師匠―レオが尋ねると、ゾフィー隊長はゆっくりとした口調で話し始めた。

ある国に、美しく優しい姫とその姫を守る十一人の騎士がいた。

その中でも一番若い騎士と姫は、幼い頃から身分の差も超えてまるで兄弟のように育っていった。

ところが少しずつ、二人の気持ちに変化が訪れる。

お互いを異性として、恋愛対象として意識するようになったのだ。始めにその変化を感じ取ったのは、若い騎士。

だが騎士は姫を守る立場として“身分の差”を重んじるようになったが故に、これまでのように姫と接することができなくなってしまう。

そんな騎士の態度に、姫は悩み苦しむ。

そして姫はそんな自分の姿から、騎士への想いを自覚する。

お互いを想う気持ちは同じはずなのに、すれ違ってしまふ二人―。

「なんだか読んでいると、とてももどかしくてね…。どうしてそこで気づいてあげないんだとか、なんでそこで邪魔が入るんだ、とか」
「なんか騎士も自分の気持ちから逃げてるところがありますよねー。一向に自分の気持ちを認めようとしなないというか…。素直じゃないというか…」

「へー…」

小説なんて読むことがほとんどない俺も、思わずゾフィー隊長やアストラの話に聞き入る。

「姫の優しく思いやりのあるが、芯の通っているところ、そして騎士の少々自分に自信がありすぎるが何よりも仲間を思う気持ち。そこがなんとなく君たち二人に似ているんだよ」

「それでゼロとディアナが似てるってのは分かるけどさ、なんで『太陽と月』の話になるんだ？」

エースが自分の作ってきたクッキーをつまみながら、アストラに尋ねる。

…クッキーはいつの間にか、半分ほどなくなっている。

「姫がね、騎士団の長にこう話すシーンがあるんですよ。『彼はまるで太陽のような人です。灼熱のような何者をも寄せ付けない強さの中にも、暖かな優しさがあります。その暖かさがある限り、私はそれを感じ出すだけでとても勇気をもらえます。…でも、それ故に時々考えるんです。彼に手を伸ばすことはとてもおこがましいことなんじゃないか、って…』」

「…なるほどなー」

エースが腕を組み、うんうんと頷く。

「それでその騎士団の長はこう答えるんですよ。『それならば、姫は月のようなお方ですね。月の輝きというのは太陽のものと比べると儂いものかもしれません。ですが、優しく時に力強く漆黒の夜を照らしてくれれます。私たちはあなたのことを思い出すと、どんな絶望の中でも戦い抜くことができます。…あなたはまさに、絶望という名の闇を照らす月の光―希望の光なのです。』って」

「くーっ…いいこと言うじゃねえか」

エースがバシんと、膝を叩く。

「だから『ゼロが太陽、ディアナが月』というわけだな、アストラ?」
「うん、そういうこと」

「…だがいくら人物が似ていても、最後の結末だけは違ってほしいものだな」

「え、どういうことだよ、ゾフィー隊長?」

いち早く反応した俺を見て、ゾフィー隊長は少し悲しそうな顔をする。

「…知りたいか?」

「…うん」

「…二人の想いが通じる前に、姫が命を落としてしまうんだよ」

「…!」

その言葉にレオやエースも反応する。

「どういうことですか…?」

レオの言葉に、ゾフィー隊長はまたゆっくりと語り始めた。

ある時、地中深くに封じ込められていた魔物が悪魔に魂を売った者によって呼び覚まされる。

騎士たちは力の限り戦ったが、その魔物を封じ込めることはできなかった。

魔物を封じ込める方法はないのかと何度も会議が開かれたが、誰もいい方法を知らなかった。

ただ一人を除いては—。

実は代々王家には『禁断の歌』と呼ばれる歌が脈々と受け継がれてきた。

その歌は「滅びの歌」と呼ばれるもので、どんな魔力を持ったものでもたちまち消し去ることができるという。

—ただし、この歌には一つ欠点があった。

それは、この歌を歌った者は歌い終わったとき必ず死ぬということ。

つまり、姫の命と引き換えに魔物を消し去ることができるのだ。

だが姫は、悩まなかった。

命を懸けて国民を、そして愛する人を守ると決めたのだ。理由を付けて会議を中座した姫は、こっそりと魔物のところへと向かう。

なかなか姫が戻らないことを不審に思った騎士たちは姫の搜索へと向かう。

そして国の長老は、姫が王家に伝わる「最終手段」を使おうとしているのではないかと騎士たちに伝えたのだ。

騎士団員の間には戦慄が走る。特に一番若い騎士の動揺は激しかった。

自分の気持ちを認め、姫への想いを貫くと決めた騎士は、必死になつて愛する姫を探した。

そして騎士たちはようやく姫を見つける。

―だが、すでに遅かった。

美しくもどこか物悲しい旋律が流れる。

姫の足元と魔物の足元には、大きさは違うが同じ魔法円が描かれていた。

「滅びの歌」はその力を発揮し始めており、魔物は呻き声を上げて、もがき苦しんでいる。

騎士は姫を止めようとそばに駆け寄るが、魔法円がバリアを張り歌を止めようとする者の侵入を許さなかった。

騎士は必死になつて姫に呼びかけるが、姫は振り向くこともなく歌い続けた。

そして魔物は、この世のものとは思えぬ断末魔を上げて消え去つた。

魔物が消え去ると同時に、姫の体は崩れ落ちる。

駆け寄った騎士に「なぜ命を捨てるようなことをしたのか」と問われた姫は、

息も絶え絶えに「命を懸けて、あなたを愛しているから」と答えたのだ。

そして姫は、愛する人の腕の中で息を引き取った―。

「そしてその後、姫の遠縁にあたる王子が国王として即位したが、国は乱れ争いが絶えず、そんな王のもとで騎士たちは忠誠を誓えるはずもなく、やがて多くの者が国を去っていった…。一番若い騎士は生涯をかけて姫の墓を守るため、墓の近くに小屋を建ててひっそりと暮らしたそうだ…」

「……」

「姫と騎士が夢見た平和な世界は、叶うことの無い永遠の夢となってしまったのさ…」

若い二人のあまりにも悲しすぎる結末。

自分の思いになかなか向き合えなかった騎士と、命を懸けて愛する人を守った姫のすれ違いが起こってしまった悲劇。

「二人がもつと早く素直になれていたのなら、結末は変わったのかもしれないな…」

「〴〵人は失ってからその大切さに気付く」と言いますが、それでは遅すぎるということですね」

エースとレオも悲しげな表情だった。

「ゼロ、君はどうだ？自分の気持ちに正直に向き合えているか？」

「俺は—」

俺は自分の気持ちにちゃんと向き合えているだろうか。

もしものことがあったとき、後悔しないように行動できているだろうか。

「戦士として生きていく以上、一人の男としての感情よりも使命を優先しなければならぬ時がある。それは時に辛い結末を生むんだ…」

エースはマグカップに入ったコーヒースプーンをぐつと飲み干す。

「…そういうえば、エース兄さんは…」

「…お前の方が辛い思いしてるじゃねえか、レオ」

エースとレオは視線をかわすと少し悲し気な笑みを浮かべる。

俺が不思議そうに見ていることに気づいたのか、エースがこちらを向く。

「気が向いたら、いつか話してやるよゼロ。それを聞いてお前がどう

するかは、お前次第だな…。まあでもお前のことだ。きつと何があつてもディアナのことを考えて行動するんだろうな…」

「ああ、きつと俺もそうすると―」

そこまで言いかけたとき、俺ははつとして顔を上げる。

そこにはニヤニヤしたエースの顔があった。

「おー おー、やつと公に認めたか、可愛い甥っ子よ」

「なっ、何をだよ!」

「とぼけるなよー」

「だから何をだよ!」

「お前がディアナのこと、好きだつてことだよ」

「す、好きなんかじゃねえよ!」

俺は恥ずかしくて思いつきり否定したが、逆にその慌てようが俺の嘘を暴いていた。

「その態度が何よりの答えだよ」

何杯目のコーヒーを淹れながら、冷静な声でゾフィー隊長が俺にそう言う。

そしてアストラが俺に最後の追い打ちをかける。

「ウルトラ兄弟でそのことに気づいていないの、メビウスだけだよ」

ニヤリとした顔で、そう告げる。

変な汗が伝う。

「お、俺は別に、そんな目でディアナのこと見てねーし…」

悪あがきだと分かっている、俺は粘る。

最後まであきらめなければ、必ず何とかなる…はず。

「ふーん、そっかあ。ディアナのこと好きじゃないんだ…」

アストラがさつきよりも意地の悪いニヤリとした顔で俺を見る。

「じゃあ、僕がもらってもいいよね?」

「…は?」

「いやね、前々から結構タイプだなーと思ってたんだよね。何事にも

一生懸命だし、可愛いし…」

「……」

「照れた顔すごく可愛かったし…。絶対よく似合うだろうな、ウエ

ディングドレス…」

頭に血が上って来るのが分かる。アストラの言葉が途切れ途切れでしか入ってこない。

気がついたらアストラに詰め寄っていた。

そして隊長室に響き渡る声で言い放った。

「ディアナはぜってえ誰にも渡さねえ！例えそれが師匠でもな！」

「はい、100点満点。よく言えました」

ほんの少しの沈黙の後、アストラが笑顔でそう言っただけで俺の頭を撫でる。

「……は？」

アストラの言葉の意味が分からない俺は口をぽかんと開けたまま、目の前の師匠を見つめる。

「ゼロ、お前はアストラに一杯食わされたんだよ…」

もう一人の師匠―レオの呆れた声がする。

「……どういう…、ことだよ？」

「…お前がわざと喋るように仕向けたんだよ」

「そんなことも分からんのか」とでも言いたげな師匠の顔。

コーヒーにむせたであろうゾフィー隊長の様子とクツクツと笑ったエースの様子に、

自分のやらかした失態を完全に把握した俺。

全身が燃えるように熱くなる。

「うわああああああああ!!」

思わず絶叫する俺。

「安心して、ディアナのこと恋愛対象として見てないから。可愛いと思ってるのは事実だけど、あくまで『妹』として可愛いってことだから」

「うわああああああああ!!!」

言葉が出なくて、とりあえず叫ぶしかない情けない俺。

そして部屋の隅で膝を抱えるようにして蹲る。

「アストラ、あまりゼロをからかうな…。セブン兄さんになんて言われるか…」

「別にからかつてないよ？素直になってもらっただけだよ」

「……」

「おーい、ゼロ？」

エースがそばに来て俺の顔をのぞき込むように姿勢をかがめる。

「大丈夫か？」

「…イージス使って今すぐアナザースペースに帰りたい」

「まあ、落ち着け…」

落ち着かせるようにぽんぽんと背中を叩いてくれたエースにそつと尋ねる。

「…なあ」

「ん？」

「その…いつから知ってたんだ？」

「俺はお前が修行から戻ってきた後だな」

「…一番早く気づいたのは誰なんだ？」

「多分、80だろうって話だ。でも誰にも言っていないって聞いたけどなあ。なんせセブン兄さんにも言わなかったって話だし…」

「…ああ……」

80先生か…。なんとなく、思い当たる節はあった。

「ゼロ」

落ち着いたゾフィー隊長の声に俺はそちらを振り返る。

「皆、ゼロのことが可愛いんだ。叔父としていろいろ世話を焼きたいんだよ…」

「…それは、どうも」

どう答えていいか分からず、とりあえず礼を言う。

「まあ、マンに『余計なことはせず、静かに見守れ』って全員釘は刺されてるから安心してね…」

相変わらずウルトラマンは暴走しようとするウルトラ兄弟の制裁役らしい。

ゾフィー隊長の表情からも、その力がどれほどのものなのかが分かる。

俺がだいぶ落ち着いたころ、慌ただしい足音が隊長室に近づく。

「ゾフィーー！」

勢いよく入ってきたのはウルトラマンと親父、そしてジャックとタロウだった。

「どうしたそんなに慌てて…」

「どうもこうもない！のんびり皆でコーヒータイムなんてそんな暇はないぞー！」

いつもと違うウルトラマンの様子に、全員の表情が変わる。

「何があつたんですか？」

エースが立ち上がってウルトラマンに近づく。

「言うより見た方が早い…」

ウルトラマンは空間投影パネルにある姿を映し出す。

それを見て部屋の空気が一気に変わった。

―暴君怪獣タイラント。

シーゴラスの顔、イカルス星人の耳、ベムスターの腹、ハンザギラの背中、バラバの腕、レッドキングの脚、そしてキングクラブの尻尾を持つ合体怪獣。

ウルトラ6兄弟を苦戦に追い込んだことで有名な怪獣だ。

「太陽系で目撃されたタイラントだ…。かつて私たちが戦った個体よりもはるかに強い…」

「太陽系で目撃って… まさか行き先は…！」

「…地球だ、間違いなく」

親父の言葉に皆の顔色が変わる。

「地球って… 今はディアナが…」

「ああ。…だが、今のディアナでは、もしかしたら…」

「…倒せないってことですか？」

レオの言葉に苦しそうに頷くタロウ。

「俺に行かせてくれ！」

考えるよりも先に口が動いていた。

「俺を地球に行かせてくれ、ゾフィー隊長！」

隊長は静かに俺を見つめていたが、ふっと表情を和らげると一言。

「いいだろう」

そう言うとパネルを操作し始めた。

「よし、これでいい。ゼロ、君は一刻も早く地球へ向かいディアナと協力してタイラントを倒すんだ」

「おう！」

「ああ、それと」

「なんだよ隊長？」

今まさに部屋を出ようとしていた俺に隊長が声をかける。

「現在の地球の様子を見てきてくれないか？ 調査期間は10日間だ」

「…分かった！」

今度こそ俺は隊長室を飛び出した。

ウルトラの星を飛び立ち、すぐさまイージスを身にまとう。

空間を移動しながらさつきまで話していたことを思い出す。

『ゼロが太陽なら、ディアナは月だよね』

(俺が、太陽…)

太陽はいつでも地球を暖かい光で照らすという。

俺は、お前を照らすことができるような光だろうか。

…いや、必ず照らして見せる。

お前が闇の中にいた俺を月明かりのような優しきで照らし見守ってくれたように、

俺はどんな時でもお前を強く時に暖かな光で照らし導いてみせる。

『ゼロ、君はどうだ？ 自分の気持ちに正直に向き合えているか？』

あの日、誓った。「もう離さない」と。

必ずお前を、守ってみせると。

何があってもそばにいる。お前を見捨てたりしない。

俺がいる限り、お前を死なせたりしない。

俺は…。

『命を懸けて、あなたを愛しているから』…

目の前には、青く美しい星・地球。

その美しさにしばし見とれていたが、すぐさま本来の目的を思い出し現場へ急行する。

(……いた！)

数機の戦闘機、そして一人のウルトラ戦士―ダイアナがタイラントと戦っているのが見える。

膝をつくダイアナのカラータイマーが不吉な音を出している。

だがタイラントはここぞとばかりに突進していく。

「行かせるかよっ！」

俺はイージスをしまい、ウルトラゼロキックの体勢に入った。

「ウォラアア!!」

俺の右足はタイラントの顔面を直撃した。

タイラントをふつとばし、ダイアナを背に庇うように立つと、後ろでダイアナが息を飲むのが分かる。

―久しぶりに感じる、ダイアナの「輝き」。

それは見送った日よりも、どこか強くなっていた。

心臓が高鳴るのは急いでいたせいか、ダイアナのせいかよく分からない。

「…久しぶりだな」

「ゼロ… どうして…」

「ま、いろいろとな」

あくまで落ち着いているふうを装う。

はつきり言って、すげえかつこ悪いとは思う。

「…ほら」

手を差し出すとダイアナの手が重なる。

ぐっと引き上げるようにして立ち上がるのを手伝うと、じつとこちらを見つめてくる。

「なんだよ」

「…ありがとう、来てくれて」

「…礼はこいつを倒してからな」

すぐに視線をタイラントに戻す。

少し赤い頬が気付かれてなければいいけど。

少し赤い頬が気付かれてなければいいけど。

「行くぞー！」

「うん！」

俺とディアナはタイラントに向かっていく。

自信がありすぎるのはよくないって親父や師匠は言うけど、これだけは言わせてくれ。

俺とディアナなら、どんな相手にも負けることはないと思う。

だってこいつは、この俺を闇へ絶望から救ってくれた月へ希望の光だからな。